

上田市文化財調査報告書第 112 集

常入遺跡群

下町田遺跡 VI

国立大学法人信州大学ファイバーイノベーション・インキュベータ棟 及び
先進植物工場研究センター建設工事に伴う常入遺跡群下町田遺跡第 6 次発掘調査報告書

2011.3

国立大学法人信州大学

上 田 市

上田市教育委員会

上田市文化財調査報告書第 112 集

常入遺跡群

下町田遺跡 VI

国立大学法人信州大学ファイバーイノベーション・インキュベータ棟 及び
先進植物工場研究センター建設工事に伴う常入遺跡群下町田遺跡第 6 次発掘調査報告書

2011.3

国立大学法人信州大学
上 田 市
上田市教育委員会



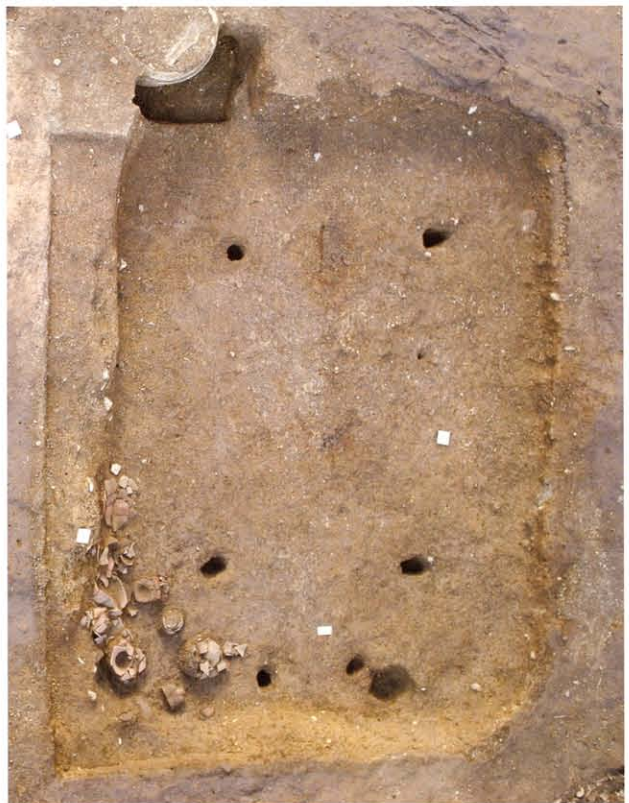
PL.1 発掘調査 A 区全景 〈ファイバーイノベーション・インキュベータ棟建設予定地〉



PL.2 発掘調査 B 区全景 〈先進植物工場研究センター建設予定地〉



PL.3 基本土層



PL.4 第 120 号 縦穴建物跡



PL.5 第 119 号 豎穴建物跡出土土器 (撮影: 小川忠博)



PL.6 第 117 号 竪穴建物跡出土土器 (撮影:小川忠博)

例 言

- 1 本書は長野県上田市常田三丁目 15 番 1 号における埋蔵文化財包蔵地常入遺跡群下町田遺跡の発掘調査報告書である。なお、新市発足に伴い、埋蔵文化財分布図の統合作業を進めているところであり、本文中の遺跡番号等は合併前のものを引き続いて使用している。
- 2 調査は、国立大学法人信州大学繊維学部構内のファイバーイノベーション・インキュベータ棟及び先進植物工場研究センター建設工事の実施に先立ち、国立大学法人信州大学の委託を受け、上田市（上田市教育委員会事務局文化振興課文化財保護係）が直営で実施した。なお、繊維学部構内ではこれまで下記のとおり発掘調査が行われており、本書は第 6 次調査報告書となる。

第 1 次	大学院・感性工学科棟建設工事	平成 8 年度
第 2 次	遺伝子実験棟建設工事	平成 11 年度
第 3 次	上田市産学官連携支援施設建設工事	平成 12 年度
第 4 次	総合研究棟建設工事	平成 14 年度
第 5 次	ベンチャービジネスラボラトリー棟建設工事	平成 15 年度
- 3 調査は文化振興課文化財保護係 和根崎剛が行い、計画準備、現地調査、遺物整理、報告書刊行を含めて、平成 21 年 10 月 9 日から平成 23 年 3 月 25 日まで行った。
- 4 発掘作業員、遺物整理作業員の氏名は本文中に記した。遺構・遺物の写真撮影は和根崎が行い、遺物実測用及び図版用写真の一部を小川忠博に委託して撮影した。
- 5 本文の執筆及び遺物観察は和根崎が行い、版組みは文化財保護係 中沢徳士の支援を得た。なお、本書は原則として上田市文化財調査報告書『下町田遺跡』Ⅰ～Ⅴの内容を基本に作成したが、これまで使用してきた遺構の名称や略号を変更したものがある。
- 6 調査に係る基準点及び基準線設置及び空中写真測量業務を、株式会社協同測量社に委託して行った。調査に係るバックホーの賃貸借は、和農興 竹内和好との平成 21 年度単価契約に基づき実施した。
- 7 調査に係る資料は上田市立信濃国分寺資料館収蔵庫に保管してある。
- 8 本書の編集刊行は事務局（上田市教育委員会文化振興課）が行った。なお、試掘等の調査結果は『市内遺跡（H20、H21）』で一部報告しているが、内容に相違がある場合は本報告をもって訂正する。
- 9 本書が刊行されるまでには、多くの方々や諸機関のご理解とご協力を賜った。以下、ご芳名を記して深く感謝の意を表したい。（順不同・敬称略）

国立大学法人信州大学、上田市文化財保護審議委員会、長野県教育委員会文化財・生涯学習課、
長野県埋蔵文化財センター、川上 元、倉澤正幸、甲田三男、児玉卓文、助川朋広

凡 例

[遺 構]

- 1 本書では遺構名を次のように略号等で表す場合がある。

竪穴建物跡 SB 土坑 SK 溝状遺構 SD ピット pit

なお、本書では、従来使用してきた「竪穴住居」に代えて「竪穴建物」（『発掘調査のてびき』文化庁文化財部記念物課 2010）の用語を用いた。また、これまでの調査で「ピット」と呼称した遺構のうち、屋外に所在するものについては、「土坑」とした。

遺構内部の自然堆積土等については、慣例により「覆土」と呼称している。この語と同義で使用されることがある「埋土」と区別するために、人為的な埋め立て土は「埋立土」と表記した。

混乱を避けるため、遺構番号は第1次調査からの連番としている。

- 2 遺構実測図は原則として原図 1 / 100、1 / 20 とし、縮小率 1 / 3 を原則とした。地床炉などの竪穴建物内の施設は原図 1 / 10、縮小率 1 / 3 とした。
- 3 遺構の主軸方向は国家座標の北と遺構の軸線との角度で示した。
- 4 土層の色調判別には、農林省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修「新版標準土色帖」1997 年度版を使用した。
- 5 遺構写真図版の縮小は任意である。
- 6 調査に使用した基準点（BM）の座標は下記のとおりである。

BM 1 X座標 43458.739 Y座標 - 21219.831 Z座標 470.620

BM 2 X座標 43480.294 Y座標 - 21146.301 Z座標 470.689

[遺 物]

- 1 遺物実測図は原図 1 / 1、縮小率 1 / 3 を原則とした。例外はその都度示した。
- 2 土器の実測方法は 4 分割法を用い、右側 1 / 2 に断面及び内面を左側 1 / 2 に外面を記録した。
- 3 遺物実測図のスクリーントーンは赤色塗彩または黒色処理が施された範囲を示す。
- 4 土器実測図に表現した矢印は、器面調整のためのミガキの方向を示す。
- 5 遺物写真図版の縮小は任意である。

[観 察 表]

- 1 実測図番号は、観察表の遺物番号及び写真番号と対応している。
- 2 遺物観察表の法量は、〈 〉が復元値、（ ）が残存値、括弧なしは完存値を示している。
- 3 土器の色調判別には、上記「新版標準土色帖」を使用した。

目 次

カラー写真図版	
例 言	
凡 例	
第一章 調査の成果	1
第1節 調査に至る経過	
第2節 発掘調査の経過	
第3節 調査日誌（抄）	2
第4節 調査の体制	4
第5節 調査の方法	
第6節 整理の方法	6
第二章 遺跡の環境	7
第1節 地理的環境	
第2節 歴史的環境	11
第3節 遺跡の層序	16
第三章 調査の結果	17
第1節 調査の概要	
第2節 遺構と遺物	
第四章 調査のまとめ	91
第1節 遺構	
第2節 遺物	93
写真図版	102
報告書抄録	

表目次

第1表 上田地域の地層区分図	10
第2表 下町田遺跡周辺の遺跡一覧	13
第3表 竪穴建物跡観察表（その1）	50
第4表 竪穴建物跡観察表（その2）	51
第5表 竪穴建物跡観察表（その3）	52
第6表 竪穴建物跡観察表（その4）	53
第7表 竪穴建物跡観察表（その5）	54

第8表 竪穴建物跡観察表（その6）	55
第9表 竪穴建物跡観察表（その7）	56
第10表 竪穴建物跡観察表（その8）	57
第11表 土坑跡観察表（その1）	58
第12表 土坑跡観察表（その2）	59
第13表 配石溝跡観察表（その2）	59
第14表 土器観察表（その1）	86
第15表 土器観察表（その2）	87
第16表 土器観察表（その3）	88
第17表 土器観察表（その4）	89
第18表 土器観察表（その5）	91

図版目次

第1図 地形区分図	9
第2図 遺跡周辺の地形図	
第3図 常入遺跡群の位置と周辺の遺跡分布図	14
第4図 信州大学繊維学部構内の発掘調査の履歴	15
第5図 基本土層図	16
第6図 信州大学繊維学部構内の発掘調査区域位置図	15
第7図 発掘調査区配置図 (S=1/500) 及び遺構全体図 (S=1/200)	29・30
第8図 第99・100号竪穴建物跡実測図(1)	31
第9図 第99・100号竪穴建物跡実測図(2)	32
第10図 第106号竪穴建物跡実測図	
第11図 第102・114号竪穴建物跡実測図	33
第12図 第103・105号竪穴建物跡実測図	34
第13図 第107号竪穴建物跡実測図	35
第14図 第108・109号竪穴建物跡実測図(1)	36
第15図 第108・109号竪穴建物跡実測図(2)	37
第16図 第110号竪穴建物跡実測図	38
第17図 第111号竪穴建物跡実測図	
第18図 第113号竪穴建物跡実測図	39
第19図 第116号竪穴建物跡実測図	
第20図 第115号竪穴建物跡実測図	40
第21図 第117号竪穴建物跡実測図	41
第22図 第118・119号竪穴建物跡実測図	42
第23図 第120号竪穴建物跡実測図	43
第24図 第120号竪穴建物跡(集石)実測図	44

第 25 图	第 121 号竖穴建物跡実測图	45
第 26 图	第 122 号竖穴建物跡実測图	
第 27 图	第 123·126 号竖穴建物跡実測图 (1)	46
第 28 图	第 123·126 号竖穴建物跡実測图 (2)	47
第 29 图	第 124 号竖穴建物跡実測图	
第 30 图	第 125·127 号竖穴建物跡実測图	48
第 31 图	第 2 号配石溝実測图	49
第 32 图	第 99 号竖穴建物跡出土遺物	60
第 33 图	第 102 号竖穴建物跡出土遺物	
第 34 图	第 103 号竖穴建物跡出土遺物	
第 35 图	第 106 号竖穴建物跡出土遺物	
第 36 图	第 107 号竖穴建物跡出土遺物	
第 37 图	第 100 号竖穴建物跡出土遺物	61
第 38 图	第 110 号竖穴建物跡出土遺物	
第 39 图	第 105 号竖穴建物跡出土遺物 (1)	62
第 40 图	第 105 号竖穴建物跡出土遺物 (2)	63
第 41 图	第 108 号竖穴建物跡出土遺物 (1)	64
第 42 图	第 108 号竖穴建物跡出土遺物 (2)	65
第 43 图	第 109 号竖穴建物跡出土遺物 (1)	66
第 44 图	第 109 号竖穴建物跡出土遺物 (2)	67
第 45 图	第 111 号竖穴建物跡出土遺物	68
第 46 图	第 114 号竖穴建物跡出土遺物	
第 47 图	第 113 号竖穴建物跡出土遺物 (1)	69
第 48 图	第 113 号竖穴建物跡出土遺物 (2)	70
第 49 图	第 115 号竖穴建物跡出土遺物	71
第 50 图	第 117 号竖穴建物跡出土遺物 (1)	72
第 51 图	第 117 号竖穴建物跡出土遺物 (2)	73
第 52 图	第 117 号竖穴建物跡出土遺物 (3)	74
第 53 图	第 118 号竖穴建物跡出土遺物 (1)	75
第 54 图	第 118 号竖穴建物跡出土遺物 (2)	76
第 55 图	第 119 号竖穴建物跡出土遺物 (1)	77
第 56 图	第 119 号竖穴建物跡出土遺物 (2)	78
第 57 图	第 120 号竖穴建物跡出土遺物 (1)	79
第 58 图	第 120 号竖穴建物跡出土遺物 (2)	80
第 59 图	第 121 号竖穴建物跡出土遺物	81
第 60 图	第 122 号竖穴建物跡出土遺物	
第 61 图	第 124 号竖穴建物跡出土遺物	
第 62 图	第 102 号土坑跡出土遺物	

第 63 図 第 124 土坑跡出土遺物	
第 64 図 第 123 号竪穴建物跡出土遺物	82
第 65 図 第 125 号竪穴建物跡出土遺物	83
第 66 図 第 126 号竪穴建物跡出土遺物	84
第 67 図 石器	60
第 68 図 下町田遺跡VIにおける弥生時代後期の土器分類 (その 1)	95
第 69 図 下町田遺跡VIにおける弥生時代後期の土器分類 (その 2)	96
第 70 図 下町田遺跡VIにおける弥生時代後期の土器分類 (その 3)	97

写真図版目次

写真図版 1	102
発掘調査 A 区 / ファイバーイノベーション・インキュベータ棟予定地 (東から)	
写真図版 2	103
発掘調査 B 区 / 先進植物工場研究センター予定地 (南東から)	
写真図版 3	104
発掘調査 A 区表土剥ぎ着手状況	
発掘調査 A 区表土剥ぎ進行状況	
遺伝子実験棟東側表土剥ぎ状況	
発掘調査 B 区表土剥ぎ進行状況	
表土剥ぎに伴う土砂の処理状況	
遺構検出作業	
写真図版 4	105
現場事務所設営	
基準点及びグリッド杭設置測量状況	
基準点杭 (BM) 設置状況	
空中写真測量実施状況	
発掘調査 B 区埋め戻し完了状況	
発掘調査 A 区埋め戻し完了状況	
写真図版 5	106
第 99・100 号竪穴建物跡 (西から)	
S B 100 遺物出土状況 (北から)	
第 102・114 号竪穴建物跡 (東から)	
S B 102 出入口遺構検出状況 (北から)	
S B 102-1 ピット内土器出土状況	
S B 102-1 ピット内土器取上げ後の状況	
写真図版 6	107
第 103 号竪穴建物跡 (上空から)	

第 105 号竪穴建物跡（南から）	
S B 105-3、13 ピット内土器出土状況	
S B 105 ピット内・上部の甕を取り外した状況	
第 106 号竪穴建物跡（上空から）	
第 107 号竪穴建物跡（東から）	
写真図版 7	108
第 108・109 号竪穴建物跡（上空から）	
第 108 号竪穴建物跡（南から）	
S B 108 土器出土状況	
第 109 号竪穴建物跡（西から）	
S B 109-11 土器出土状況	
S B 109 地床炉検出状況	
写真図版 8	109
第 110 号竪穴建物跡（東から）	
第 111 号竪穴建物跡（南から）	
第 113・120 号竪穴建物跡（上空から）	
第 113 号竪穴建物跡（南から）	
S B 113 遺物出土状況（南から）	
S B 113 遺物出土状況（東から）	
写真図版 9	110
S B 113 集石下焼土検出状況	
S B 113 掘下げ作業状況	
第 115 号竪穴建物跡（上空から）	
第 115・117 号竪穴建物跡遺物出土状況（東から）	
第 116 号竪穴建物跡（南から）	
第 117 号竪穴建物跡（東から）	
写真図版 10	111
S B 117-11 土器出土状況	
第 118 号竪穴建物跡（上空から）	
S B 118 炭化材検出状況	
S B 118-3 ピット内土器出土状況	
S B 118 ピット内土器取上げ後の敷磔の検出状況	
S B 118-5 土器出土状況	
写真図版 11	112
S B 118 地床炉検出状況	
S B 118 地床炉炉縁石取上げ状況	
S B 118-6 土器出土状況	
第 119 号竪穴建物跡（南から）	

S B 119-3 土器出土状況	
S B 119 土器出土状況	
写真図版 12	113
S B 119-8 土器出土状況	
第 120 号 竪穴建物跡 (上空から)	
S B 120 集石検出状況	
S B 120 集石と土器の混在状況	
S B 120-1 集石中からのガラス小玉出土状況	
S B 120 集石の実測状況	
写真図版 13	114
S B 120 発掘作業状況	
S B 120 集石解体状況	
S B 120 集石除去後の状況	
S B 120 集石下の覆土からのピット検出状況	
S B 120 覆土内ピットの検出状況	
S B 120 覆土内ピットの完掘状況 (1)	
写真図版 14	115
S B 120 覆土内ピットの完掘状況 (2)	
S B 120 堀下げ作業状況	
S B 120 遺物出土状況	
第 121 号 竪穴建物跡 (南から)	
第 122 号 竪穴建物跡 (北から)	
S B 122 地床炉検出状況	
写真図版 15	116
S B 122 地床炉内土器検出状況	
S B 122 地床炉完掘状況	
第 123・126 号 竪穴建物跡 (上空から)	
S B 123 地床炉内土器検出状況	
S B 126-9 土器出土状況	
第 125・127 号 竪穴建物跡 (上空から)	
写真図版 16	117
第 116 号 土坑土器出土状況	
第 124 号 土坑土器出土状況	
第 2 号 配石溝 (S D 06) 検出状況 (南から)	
S D 06 完掘状況 (南から)	
写真図版 17	118
S D 06 検出状況 (その 2)	
S D 06 検出状況 (その 3)	

S D 06 検出状況 (その 4)	
S D 06 完掘状況 (その 2)	
S D 06 完掘状況 (その 3)	
S D 06 完掘状況 (その 4)	
写真図版 18	119
発掘作業状況 (その 1)	
発掘作業状況 (その 2)	
発掘調査参加者	
写真図版 19	120
遺物番号 S B 99 (1,2) / S B 100 (1、3、4、5) / S B 102 (1)	
写真図版 20	121
遺物番号 S B 103 (1) / S B 105 (1、3、6、9、11、12)	
写真図版 21	122
遺物番号 S B 105 (13、16) / S B 106 (1) / S B 107 (1) / S B 108 (1、2)	
写真図版 22	123
遺物番号 S B 108 (3、4、5、8、9、13、15、16)	
写真図版 23	124
遺物番号 S B 108 (18、19、20、21) / S B 109 (1、2、6、7、11、13、16)	
写真図版 24	125
遺物番号 S B 109 (被熱痕のある深鉢、10、17、18、19、20) / S B 110 (1、2)	
/ S B 111 (1、3) / S B 113 (1、2)	
写真図版 25	126
遺物番号 S B 113 (3、4、5、9、12、13、16、17)	
写真図版 26	127
遺物番号 S B 114 (1、2) / S B 115 (1、3) / S B 117 (1、2)	
写真図版 27	128
遺物番号 S B 117 (3、4、5、6、7)	
写真図版 28	129
遺物番号 S B 117 (8、9、11、12、15、16、17)	
写真図版 29	130
遺物番号 S B 118 (1、2、3、4、6、7)	
写真図版 30	131
遺物番号 S B 118 (5)	
写真図版 31	132
遺物番号 S B 118 (8、9、12) / S B 119 (1、2、4、6)	
写真図版 32	133
遺物番号 S B 120 (9、10、13、14、23、24、26、27)	
写真図版 33	134

遺物番号 S B 120 (1、2、3、4) / S B 123 (1、2、5、6、炉体土器) / S B 125 (1、2、3)	
写真図版 34	135
遺物番号 S B 125 (6、7、9) / S B 126 (1、2、3)	
写真図版 35	136
遺物番号 S B 126 (8、7、9、10) / S K 124 (1、3、4)	
写真図版 36	137
第 108 号竪穴建物跡出土石器	
第 120 号竪穴建物跡出土石器	
第 99 号竪穴建物跡出土石器	
第 109 号竪穴建物跡出土石器	
第 109 号竪穴建物跡出土石器	

第一章 調査の経過

第1節 調査に至る経過

本書収録遺跡の発掘調査は、国立大学法人信州大学（以下、「信州大学」）による、繊維学部ファイバーイノベーション・インキュベータ棟、及び先進植物工場研究センター建設工事に伴って消滅する、常入遺跡群下町田遺跡の記録保存を目的として行われたものである。

本件については、平成20年7月に上田市教育委員会事務局文化振興課に信州大学繊維学部総務課管理係から、ファイバーイノベーション・インキュベータ棟の建設計画策定にあたり、下町田遺跡の保護について照会があった。建設予定地はこれまでに発掘調査を実施している、遺伝子実験棟（平成11年度）、上田市産学官連携支援施設（平成12年度）、ベンチャービジネスラボラトリー棟（平成15年度）に囲まれており、遺跡が存在することが明らかであったが、昭和40年代に木造平屋建の蚕室が移築されており、これが半地下構造の施設を有する建物であったことから、遺構が既に破壊されている可能性も考えられた。ただちに遺跡の保護措置について協議を行った結果、建設する建物は鉄筋コンクリート7階建て、基礎工事で数メートルの掘削を伴うことが判明した。工事が施工された際には遺跡の現状保存は不可能となることは明らかであったが、大学の研究施設という公益性の高い建物であることから、試掘調査を行い、埋蔵文化財が発見された場合には、記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。

試掘調査は平成21年2月に建設予定地内の農園で行い、蚕室解体後の8月に再度実施した。その結果、農園ではもちろんのこと、蚕室敷地においても埋蔵文化財が検出された。また、8月の試掘の際には、先進植物工場研究センターの建設予定地として、遺伝子実験棟東側の堆肥置き場付近においてもトレンチ調査を実施し、竪穴建物と推定される遺構と遺物を検出した。こうしたことから、再度保護協議を実施し、ファイバーイノベーション・インキュベータ棟及び先進植物工場研究センター建設予定地1,300㎡について、本発掘調査の実施に向けて準備を進めることとなった。平成21年9月3日に発掘調査経費の見積書を提出し、平成21年10月9日に信州大学と上田市の間で委託契約を締結し、10月30日に調査に着手した。

なお、先進植物工場研究センターについては、当初の建設計画地から、ベンチャービジネスラボラトリー棟の東側に建設地が変更となったため、改めて埋蔵文化財の保護協議を行った。その結果、変更後の計画地は桑畑として利用されており、これまでの調査の経過から遺跡の範囲である可能性が非常に高い場所であったことから、試掘調査を実施して地下の状況を確認したうえで、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。12月5日に試掘調査を実施したところ、竪穴建物と推定される遺構と遺物を検出したため、ただちに建設予定地400㎡について、12月7日から本発掘調査に着手した。

第2節 発掘調査の経過

1 ファイバーイノベーション・インキュベータ棟建設予定地

試掘調査（トレンチ掘削面積 合計 68 ㎡）

第1次 平成21年2月4日（トレンチ掘削面積 23 ㎡）

第2次 平成21年8月27日（トレンチ掘削面積45㎡）

現場発掘調査（発掘調査面積1,000㎡）

平成21年10月30日～平成22年1月13日

整理作業

平成22年1月18日～平成22年2月26日

（遺構図面及び写真等の整理、出土遺物の洗浄、注記）

整理作業及び報告書作成

平成22年7月1日～平成23年3月25日

（接合、図化、遺物データ処理、遺構遺物図面トレース、遺物写真撮影、報告書刊行）

2 先進植物工場研究センター建設予定地

試掘調査（トレンチ掘削面積72㎡）

平成21年12月5日

現場発掘調査（発掘調査面積400㎡）

平成21年12月7日～平成22年1月13日

整理作業

平成22年1月18日～平成22年2月26日

（遺構図面及び写真等の整理、出土遺物の洗浄、注記）

整理作業及び報告書作成

平成22年7月1日～平成23年3月25日

（接合、図化、遺物データ処理、遺構遺物図面トレース、遺物写真撮影、報告書刊行）

第3節 調査日誌（抄）

〈平成20年度〉

7月3日（木） ファイバー・イノベーション・インキュベータ棟建設予定地の現地確認。

12月15日（月） 長野県教育委員会あて文化財保護法第93条に基づく発掘調査の届出。

2月4日（水） 試掘調査を実施。竪穴建物跡と推定される落ち込みと弥生時代後期の土器が出土。

〈平成21年度〉

5月25日（月） 保護協議。建設予定地に存在する蚕室を解体後、直ちに跡地の試掘調査を実施することで合意。

8月27日（木） 2回目の試掘調査を実施。蚕室跡地から竪穴建物跡の床と推定される硬化面と弥生時代後期の土器が出土。併せて先進植物工場研究センター建設予定地の試掘を行ったところ、遺構と弥生時代後期の土器が出土。

9月3日（木） 保護協議。ファイバー・イノベーション・インキュベータ棟及び先進植物工場研究センター建設予定地として、1,300㎡を発掘調査し、記録保存することで合意。発掘調査の総事業費は13,000千円と見込む。ただし、時間的な事情から発掘調査報告書を21年度内に刊行することは困難であるため、22年度にこれを刊行することとし、事業を2ヶ年に分けて行うことで信州大学の了承を得る。なお、事業費は信州大

学に負担をお願いし、了承していただく

- 10月9日(金) 信州大学と平成21年度発掘調査受委託契約を締結(10,000千円)。
- 10月27日(火) 発掘調査に着手。バックホーによる表土剥ぎ開始。遺構検出作業開始。
- 10月30日(金) 発掘作業員6名で遺構の調査を開始。
- 11月5日(木) 繊維学部の学生が発掘作業に合流。新たに発掘作業員2名を雇用。
- 11月9日(月) 業者委託により、基準点とグリッドを設置(～10日)。
- 11月10日(火) ファイバー・イノベーション・インキュベータ棟予定地の表土剥ぎが終了。学生を補助員とし、竪穴建物跡の断面図等の作成に着手。
- 11月12日(木) 大型の竪穴建物跡が多く、掘下げ作業の遅れが目立ってきたため、新たに作業員6名を雇用して対応する。
- 11月13日(金) 第113号竪穴建物跡の集石の調査を開始。
- 11月15日(日) 第120号竪穴建物跡の集石の調査を開始。ガラス小玉が1点出土(16日)。
- 11月20日(金) 先進植物工場研究センター建設予定地の表土剥ぎに着手(～25日)。
- 11月26日(水) 先進植物工場研究センター建設予定地のグリッド設置。
- 12月2日(水) 先進植物工場研究センター建設予定地の変更について信州大学と協議。変更後の予定地はベンチャービジネスラボラトリー棟(第5次調査区)の東側400㎡の範囲。協議の結果、変更前の予定地は発掘作業をせずに埋め戻し、直ちに変更後の予定地の試掘を実施することで合意。
- 12月5日(土) 先進植物工場研究センター建設予定地(新)の試掘調査を実施。竪穴建物跡と推定される落ち込みと弥生時代後期の土器が出土。
- 12月7日(月) 先進植物工場研究センター建設予定地(新)の表土剥ぎに着手(～10日)。発掘現場で初結氷。
- 12月9日(水) ファイバー・イノベーション・インキュベータ棟予定地の遺構発掘作業が、第120号竪穴建物跡を残してほぼ完了。
- 12月17日(木) 発掘現場が初冠雪。
- 12月22日(火) 遺構の発掘作業がほぼ完了。
- 12月24日(木) 業者委託による空中写真測量を実施。学内向けの現地説明会を実施。約50名参加。午後から機材の撤収を開始。現場の埋め戻しを開始。
- 12月28日(月) 機材撤収を完了する。
- 1月12日(水) 埋め戻し完了。現場での作業を完了する。
- 1月18日(月) 信濃国分寺資料館で整理作業を本格的に開始。
- 1月19日(火) 埋蔵物発見届(上田市教育委員会21文第412号)を上田警察署に提出。
- 1月20日(水) 発掘調査終了届を長野県教育委員会に提出。
- 1月27日(水) 出土品が文化財に認定される(長野県教育委員会21教文第20-121号)。
- 2月15日(火) 信州大学と発掘調査受委託契約を変更(1,000千円減額し、9,000千円とする)。
- 2月26日(金) 平成21年度の整理作業を終了。

〈平成22年度〉

- 6月18日(金) 信州大学と平成22年度発掘調査受委託契約を締結(3,000千円)。

- 6月28日(月) 保護協議。ファイバー・イノベーション・インキュベータ棟の建設にあたり、建物の位置が発掘範囲とわずかにずれる部分があること、また、R-I実験棟を解体してアスファルト敷駐車場にすることの2点について協議する。工事着手前に施工業者から重機の提供を受けて試掘調査を実施することで合意。
- 7月1日(木) 上記内容について、長野県教育委員会あて文化財保護法第93条に基づく発掘調査(7月20日に実施予定)を届け出る。
- 7月1日(木) 信濃国分寺資料館作業室において整理作業を開始。
- 7月20日(火) R-I実験棟跡地及び生命工学実験実習棟北側の試掘調査を実施。埋蔵文化財は発見されなかった。
- 1月24日(木) 整理作業員の雇用終了。以後の編集作業は担当者が行う。
- 3月25日(金) 報告書(本書)を刊行し、業務を終了する。

第4節 調査の体制

事務局(上田市教育委員会文化振興課) 平成21～22年度

教育長 小山壽一

教育次長 小市邦夫

文化振興課長 中部通男

文化財保護係長 尾見智志(H22.4.30 退任)

久保田敦子(H22.5.1 着任)(第1、2、4、5次調査担当者)

文化財保護係 中沢徳士(第1、2、4次調査担当者)・小林伝・和根崎剛

調査組織(発掘調査・整理作業・報告書刊行)

担当者:和根崎剛

発掘作業:秋山八栄子、新井邦雄、上原祐子、内山仁志、川上京子、川上恒生、児玉和良、作原弘悦、関大子、滝澤百合香、竹内和好、田中八枝子、内藤文武、中村眞理子、中村洋子、宮澤秀昭、村松秋恵、柳沢克彦

(繊維学部学部生及び大学院生)赤嶺総哉、王毅、華陽、魏凱、佐藤慎一郎、徐雪珠、高橋淑子、田中つかさ、田中智子、趙鑫、張俊鋒、杜聰玲、西山健人、傅正海、ムハメド・ムサディック、梁島静香、李明

整理作業:関大子、田中智子、田中八枝子、中村眞理子、中村洋子

報告書作成:饗場奈那江、上原祐子、大井敬子、久保田夕佳、滝澤百合香、高橋和裕、高橋春美、萩野れい子、山本万里

第5節 調査の方法

1 発掘調査の方法

(1) 埋蔵文化財包蔵地の名称と記号

本包蔵地は長野県上田市文化財分布図(上田市教育委員会1996)には「常入遺跡群」という名称で

搭載されている。これは、『上田市の原始・古代文化』埋蔵文化財分布調査報告書（上田市教育委員会1977）に記載されている、堀の内、上町田、西町田、下町田、中村、手筒山、東町田、藤ノ森の各遺跡を出土品等の内容から遺跡群として捉え、総称したものである。各遺跡の名称は地字名を冠しているものと考えられるが、それぞれの範囲を明確に分けることは難しい。そのため、今回の発掘調査の主な範囲が、第2次、3次、5次調査区域に囲まれていることから、これまでの発掘調査で使用した「常入遺跡群下町田遺跡」の名称を用いた。なお、繊維学部構内の遺跡は「繊維学部敷地遺跡」「繊維学部構内遺跡」等の名称で呼ばれる場合もある。

調査にあたり、現場等での記録の便宜を図るために、アルファベット等を用いて次のように遺跡記号を設定した。これまでの調査で使用したSMD（下町田（S h i m o ・ M a c h i ・ D a）遺跡）を基に、今回の調査が第6次調査となることから「SMDVI」とし、遺物ラベルや図面の表題、遺物の注記などにこの記号を用いた。

（2）埋蔵文化財包蔵地の範囲

包蔵地の範囲は原則として分布図に記載されている区域とし、これまでの発掘調査及び試掘調査の結果を参考に発掘調査範囲を決定した。

（3）試掘調査

試掘調査は遺構の有無と遺構面までの深さ、出土遺物の有無を確認するために、バックホー（平積0.2級）を用いたトレンチ法で行った。

（4）本発掘調査

試掘調査で得た情報に基づき、発掘調査区を設定して面的な調査を行った。表土剥ぎはバックホー（平積0.4級）を用い、一部を人力で行った。なお、国土座標に基づき、調査区に3×3mを単位とするグリッドを設定し、遺構の実測及び遺物の取り上げ等に利用した。

遺構の名称は記録等の便を図るため略号を用い、遺構番号は第5次調査までの通し番号に続けて、時代等に関係なく種類ごと、検出順に付した。なお、今回の調査で使用した遺構の略号は次のとおりである。

S B・・・	竪穴建物跡（竪穴住居跡）	S D・・・	溝状遺構
S K・・・	土坑跡	p i t・・・	竪穴建物内の穴（柱穴、貯蔵穴等）

（5）遺物の取り上げ

包含層の遺物は、グリッド別、層位別に取り上げた。遺構内や遺物集中箇所からの出土遺物については、番号を付し、それぞれ座標と標高を記録して取り上げることを基本とした。第120号竪穴建物跡等の集石覆土は、フルイ（1mmメッシュ）を用いて、ガラス小玉等の検出を行った。

2 記録の方法

（1）座標とグリッドの設定

第1次及び3～5次調査までは同一の基準点により、日本測地系の座標に基づいて3×3mのグリッドを設定し、調査を実施した。ただし、平成12年に世界測地系に統一が図られていることから、今回は発掘現場では世界測地系によるグリッドを設定した。グリッドは北からA B C D・・・、西から0 1 2 3・・・とし、両者を組み合わせて名称を付した。

これまでの発掘調査区との整合を図るため、日本測地系によるグリッドを図上で設定し、本文の記述はすべてこれによっている。

（2）遺構の実測方法

個々の遺構の実測は、担当者及び作業員が簡易遣り方を用いて行った。竪穴建物跡や土層断面図は1／20、土坑や竪穴建物跡に付属する遺構は、原則的に1／10とした。また、遺跡の全体図は業者に委託して作成し、ラジコンヘリによる空中写真測量を実施した。

(3) 写真

発掘現場で遺構の撮影に使用した機材は、一眼レフカメラ Canon EOS 55 で、カラーフィルムのみを用いて撮影し、紙焼きを行なうとともに、デジタル化した画像をDVD-R等に記録して保存した。また、補完的にデジタルカメラを用いて遺構の撮影を実施した。

写真は台帳を作成して、整理しながら撮影を行った。なお、空中写真測量の際に、あわせて遺跡の空中写真撮影を業者に委託して行った。

(4) その他

発掘調査の経過は現場では適宜野帳に記録し、日誌を作成して保管した。遺構は遺構カードを作成して、所属時期や出土遺物等のデータを記入して保管した。

第6節 整理の方法

(1) 実測図等の整理と保管

整理作業は実測図等の整理から着手した。誤りを修正し、実測図には通し番号を付して台帳を作成した。写真はネガとベタ焼きをネガアルバムに整理し、プリントはポケット式台紙に整理してファイリングした。デジタル画像はプリントアウトせず、専用の記録媒体（USBメモリ）にデータを保存し、DVD-Rは収納袋に入れプリントとともに整理保管した。

(2) 遺物の整理と記録

全ての遺物は整理、記録のうえ、ビニール袋あるいは密閉容器に収納して、コンテナまたはダンボール容器に入れて保管した。

土器・陶器及び石器は作業員が水洗、乾燥の後、注記をし、コンテナに収納した。原則として白色絵具を用い、遺跡名、遺構名（グリッド名）、ナンバー等を略号で記入し、油性クリヤーラッカーで被覆した。接合作業、実測、採拓後、適宜ビニール袋に収め、土器・陶器・石器の別に、遺構ごとコンテナに収納した。

遺物の記録は発掘担当者が指導し、図化・計測の大部分を作業員が行った。なお、土器の一部は原寸写真から実測図を作成した。遺物の分類・観察は発掘担当者が行った。写真はデジタルカメラ Canon Powershot を用い、画質を1,000万画素に設定して発掘担当者が撮影した。なお、遺構写真と同様にデジタル画像はプリントアウトはせず、専用の記録媒体にデータを保存した。

第二章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

長野県東部に位置する上田市は、平成18年3月に上田市と小県郡丸子町、真田町、武石村が合併して発足した。長野市や松本市などと接するほか、群馬県嬭恋村とも隣接する。市域の北には菅平高原、南には美ヶ原高原が所在し、市街地との標高差は1,000 m以上あり、緩やかな播鉢状の地形を形成している。典型的な内陸性の気候で、年間降水量が1,000 mm程度と少なく、塩田地域では溜池をはじめとする灌漑施設が発達した。

太郎山や小牧山、独鈷山、殿城山などに囲まれた上田盆地には、千曲川や神川、産川、浦野川などが流れ、河岸段丘が発達している。このほか、断層活動による段丘状の崖地形もみられ、また盆地を囲む山々の谷口や崖地形が発達しているところでは扇状地が広がっている。上田盆地の南側には塩田平と呼ぶ平坦な地形が広がっていて、川筋などに湖成層が露出しているところがある。盆地内の地層や地形は、第四紀に湖や川、火山、断層、火砕流、火山泥流などによって形成されたものである。市域の中央を東西に千曲川が流れており、便宜的に右岸・左岸地域と大別している。

発掘調査した常入遺跡群下町田遺跡は、右岸の市街地東方に所在し、上田原湖成層の堆積物からなる上田原面に占地する。この地域の主な平坦面は、上田城面、上田原面、染屋面があり、さらに下段に千曲川および神川によって形成された段丘面がある。

遺跡はこのような環境の中に存在するのであるが、その概要について平成14年に上田市が刊行した「上田市誌自然編（1）上田の地質と土壌」の第1章を参考に以下に述べたいと思う。

1 上田盆地の湖に堆積してできた湖成層

第四紀に上田盆地には大きな湖が3回ほどできたと考えられる。これらに堆積した地層は古い順に古期上小湖成層・新期上小湖成層・上田原湖成層と呼ばれ、時代が古いものほど湖は大きい。古期上小湖成層は標高の高い盆地の周辺に分布しているのに対して、新期上小湖成層はそれより低い場所に分布している。上田原湖成層は千曲川に沿って細長く分布していて、染屋面の断丘下にできた小規模な湖であったといえる。千曲川の両岸に分布する染屋面の一部が活断層で大きく沈み、そこに湖ができたためと考えられる。

古期上小湖成層はおよそ90万年前に湖に堆積した地層であることがわかっている。新期上小湖成層は、東築地、八木沢及び室賀から採取された泥岩層や泥灰層に含まれている炭化木により、39,000年前、51,000前、61,000前という結果が出ている。上田原湖成層も炭化木の年代測定から28,000年前と報告されている。新期上小湖成層からは、ナウマンゾウやエゾシカ・ウマなどの化石が出ることから、この湖ができたころにはたくさんの動物がこの周辺に生息していたことが分かっている。

また、上田泥流が盆地に流れ込み、太郎山系の河川をせき止めたためにできた、上田湿地性堆積物と呼ばれる湖泥性の堆積物が市街地の部分に分布している。

2 上田盆地を覆った火砕流

殿城山の南の鷲場火山から火砕流が発生し、上田盆地全体を火山灰で覆い尽くしたことが分かっている。鷲場火山は60万年前から3万年前ごろまで活動した火山で、特に6万年前から4万年前にかけて活動し、新期上小湖成層が堆積した湖に軽石流を出して平井寺軽石層として残っている。また、それとは別に新期上小湖成層が形成された以後にも活動しており、染屋層や新期上小湖成層のうえに鷲場火砕流が堆積して

いる。少なくとも2度にわたって火砕流が発生しており、下位を第1鷲場火山灰流、上位を第2鷲場火山灰流と呼んでいる。

3 台地をつくる河岸段丘と段丘崖地形

〈染屋面〉 礫岩層を主とする染屋は千曲川上流や神川・依田川上流になる岩石が川によって運ばれて堆積してできた地層である。この染屋層の堆積物からできている平坦な地形を染屋面という。染屋面は盆地の北東側の大部分を占めて広がっている。染屋層は千曲川左岸地域にも広く分布していて、平坦な地形を形成している。

〈上田原面〉 上田原湖成層からできている平坦な地形面を上田原面と呼ぶ。この面は染屋面より低く、上田城面より高い。千曲川左岸では国分の国露津穂神社から始まり、国分付近では染屋面の崖下を取り囲むように分布し、向きを変えて、信州大学繊維学部・科野大宮社・日輪寺方面に広がっている。千曲川左岸では、上田原、狐塚の地形面が上田原面である。

〈上田城面〉 上田城面は千曲川上流から上田盆地に流れ込んだ泥流の堆積物からできている。千曲川左岸は侵食されてしまったので現在は見ることはできない。右岸地域では塩尻の国道18号線とバイパスが交差する付近から始まり、千曲川に沿って見られる。千曲川との比高は15～17mもあり、右岸地域はかなり隆起していることを示している。

〈下郷面〉 下郷面は隆起する染屋面を神川が侵食する結果できた段丘で、上田盆地では数少ない侵食面である。この面の上には鷲場第2火山灰流が堆積している。

〈塩田平の段丘〉 産川沿いの左岸下流では比高5mの段丘崖が上田交通別所線の大学前駅西方から神畑駅西方にかけて連なっている。しかし、追開沢川や尻無川などの川沿いには、歴史時代からの開拓やほ場整備事業などにより段丘崖が壊され、段丘地形が見られない。しかし、最新の調査では、ため池や産川の川底から鷲場火山灰流が観察された。この地域は段丘上にあり、下小島方面に半球状に伸びている。

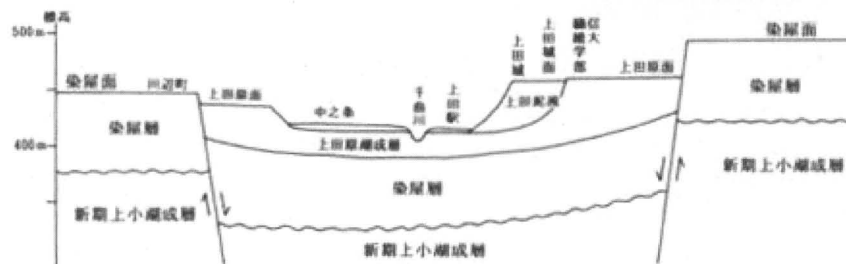
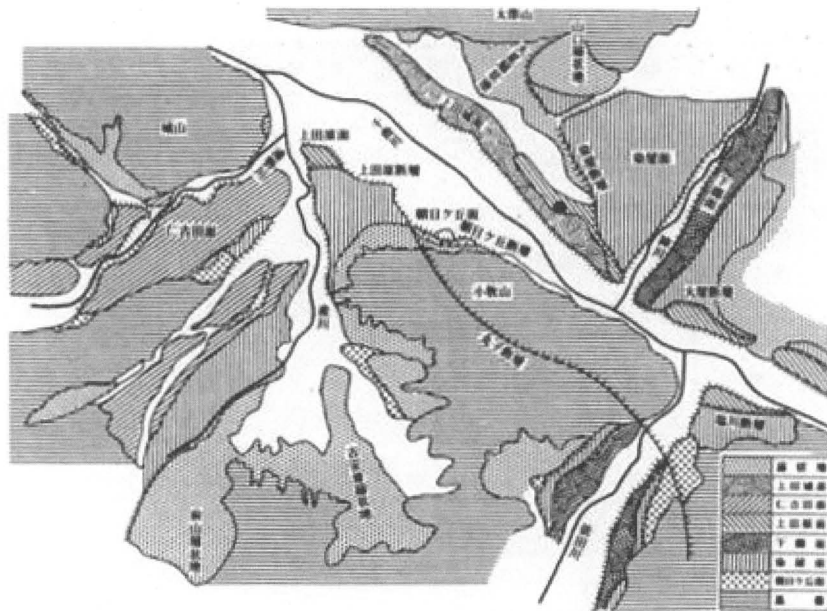
産川のように大きな川が段丘上を流れている例は他にほとんどない。本郷面上を産川が流れるようになったのは、新町から鈴子にかけて走る断層が活動した結果、塩田平側が大きく沈んだためだと考えられている。それに加えて神戸川の押し出しにより上本郷の染屋面との段差が無くなり、染屋面下の尻無川に流されていた産川が段丘上を流れるようになったと考えられる。深い谷を染屋面上に形成していないことから、沖積時代にこのようになったものと考えられる。朝日が丘・国分・大屋等の断層崖 朝日が丘西方には染屋面・上田原面が形成されているのに対して、朝日が丘付近には新期上小湖成層があるだけである。これはこの地域に東西に延びる断層が活動して北側が落ち込んだからである。この西から西北に延びる崖は断層崖と考えられる。

染屋面より下に位置する国分や上田東高等学校付近、大屋などの平坦な面は染屋面が落ち込んで、その上に上田原湖成層が堆積してできたものと考えられている。染屋台地を取り囲む崖は断層崖と考えられ、このほか川辺町の北側の段丘崖も同様な理由から断層崖と考えられている。

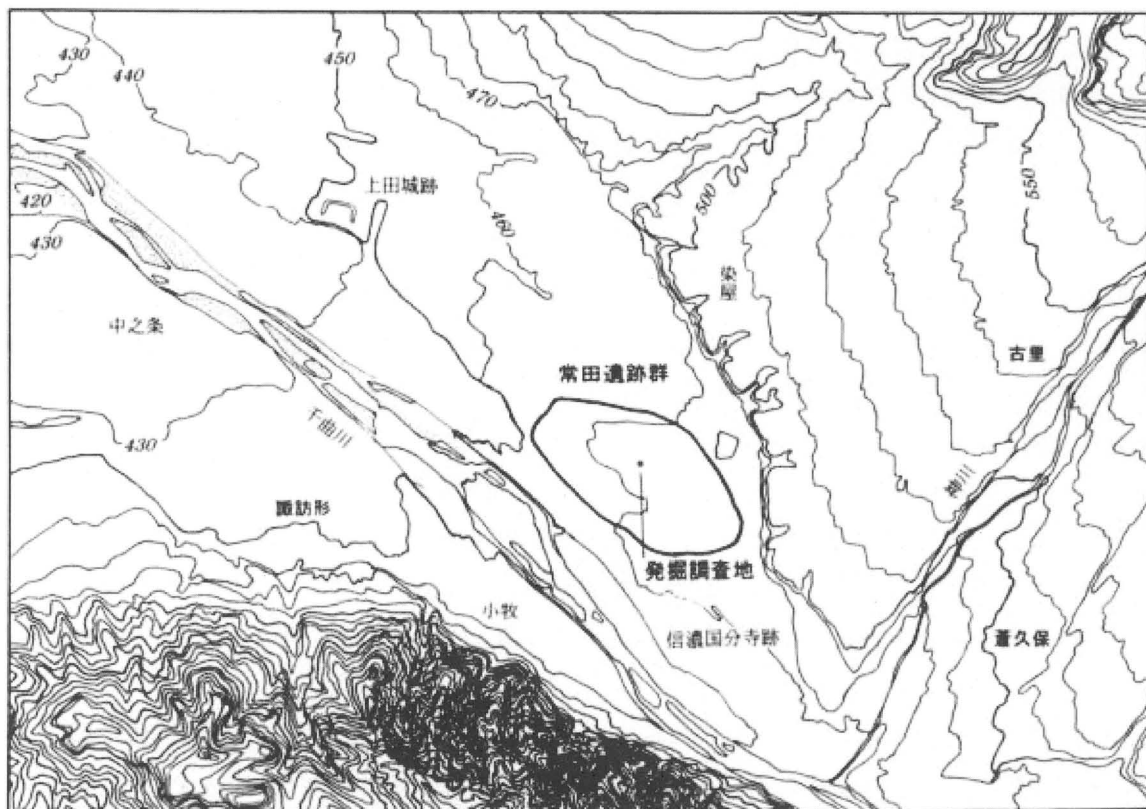
〈仁古田面〉 浦野川によって形成された段丘面が仁古田面で、仁古田層からできている。この層は新期上小湖成層の上に堆積している。この層の上には粘土層が重なっているが、鷲場火山灰層に含まれる鉱物が入っていない。このことから、仁古田面は鷲場火山灰流が堆積後に形成された段丘面といえる。

4 上田をおそった火山泥流

上田泥流は、上田地域に最も厚く広く分布していることからそう呼ばれている。この泥流は千曲川に沿って帯状に分布し、低い段丘を造っている。噴火で火口湖が壊され泥流となって流れたものと考えられ、



第1図 地形区分図 (『下町田遺跡』から転載)



第2図 遺跡周辺の地形図 (『下町田遺跡』から転載)

年代区分				地層区分		主な火成活動		大型動物化石						
17000年前	代	紀	新	四	完 新 世	古 代 弥 生 縄 文	扇 状 地、 崖 跡 堆 積 物	上 田 泥 流	ナ ウ マ ン ゾ ウ (下木郷、青木村当郷) ア ジ ア ノ ロ バ (上室賢)、エ ソ シ カ (神郷)、ヤ ベ オ オ ツ ノ シ カ (青木村当郷) ア ケ ボ ノ ゾ ウ (丸子町塩川)					
										更 新 世	旧 石 器 時 代	上田原湖成層	湖 沼 の 堆 積 物	鷺 場 火 山 灰 流 鳥 帽子 岳 輝 石 安 山 岩 神 科 虚 空 山 輝 石 安 山 岩
												新期上小湖成層		
										鮮 新 世	大 抗 層	古期上小湖成層	海 の 堆 積 物	半 通 岩 鼻 角 閃 石 石 英 ひ ん 岩 太 郎 山 天 狗 岩 流 紋 岩 弘 法 山 石 英 安 山 岩
			茂 沢 溶 結 凝 灰 岩											
			生	第	三	中 新 世	小川層	小 泉 凝 灰 岩 独 結 山 玄 武 岩 質 安 山 岩 緑 色 凝 灰 岩	シ ナ ノ イ ル カ (小泉)、ク ジ ラ (小泉、伊勢山) ホ オ ジ ロ ザ メ (丸子町和子)					
							青木層							
							別所層							
							内村層							
			65000年前	代	紀	漸 新 世	漸新世							
始新世														
晩新世														

第1表 上田地域の地層区分図 (『下町田遺跡』から転載)

含まれている岩石や爆裂口の大きさ等から三方ヶ峰と高峰の間にある馬蹄形をした窪地の深沢爆裂火口が泥流の発生した場所と推測されている。泥流には軽石と赤岩が取り込まれている。軽石流は、小諸懐古園付近にある浅間軽石流といわれるもので、この上部は約11,000年前の噴出物と年代が推定されていることから、上田泥流はそれ以降に発生したことになる。また、赤岩は三方ヶ峰の監視小屋付近にも多く転がっており、噴火したときに飛ばされた岩石である。このことから、水ノ登の南側が火山活動を始めて赤岩を噴出し、大爆発により深沢爆裂口ができ、池の平火口湖跡の水が一気に流れ出て、深沢川を流れ下り浅間軽石流を泥流の中に取り込んで、千曲川の流に沿って上田方面へ流れたものと考えられる。そして泥流が流れ込んだ千曲川沿いの場所は周囲の土地より標高が高くなり、太郎山系の川が南下して千曲川に流れ込むことができなくなり、風呂川に注ぐようになったと考えられる。

5 上田ロームのふるさと

上田盆地に分布するローム層は、北アルプスにある古い地質時代に活動した火山や、今も活動している御嶽山の噴火によって、火山灰や軽石が地上に降ってできている。これらのローム層は古いほうから古期下部ローム層、伊勢山ローム層、曙ローム層、古期上部ローム層、中期ローム層、新期ローム層と区分され、このうち市内で観察できるのは伊勢山ローム層、古期上部ローム層、中期上部ローム層、新期ローム層である。

〈伊勢山ローム層〉市内では伊勢山で見られる。大変硬いローム層で、岩質は流紋岩質であるといえる。降った当時は軽石層があったと考えられる。古期上小湖成層に不整合に重なっている。この火山灰を降らせた火山は約90万年前に北アルプスにあった火山で、現在は侵食されて存在しない。

〈古期上部ローム層〉黄褐色ローム層に黒雲母軽石層が3層はさまれてできている。南安曇郡三郷村・松本市・長野市・北佐久郡等からさらに関東地方まで分布が広がっていて、上田では古安曾、穴平、長入で見られる。関東地方では多摩ローム層の中にはさまっている。

30万年前から60万年前に噴火した火口のローム層であることが分かっている。

〈中期ローム層〉別所温泉から野倉へ通じる道路で見られる。黒褐色をしたやや粘り気のある火山灰層である。

〈新时期ローム層〉最下位から立山軽石層、御岳第1軽石層、始良火山灰層等が積み重なってできている。

立山軽石層：立山カルデラが造られたときの噴火によって上田まで飛んできたものである。軽石と火山砂からできている。地質年代は、約12万年前とされている。

御岳第1軽石層：御嶽山が7万年前に大噴火し、伊那谷を中心に甲府盆地関東平野の南部まで降らせている。分布範囲の北限に当たるのが上田市で、保福寺峠、別所温泉、独鈷山、室賀峠に見られる。

始良火山灰層：鹿児島湾にかつてあった始良カルデラから約22,000年前に飛んできた火山灰で東北地方まで分布している。市内では小泉にみられ、白色の火山灰でガラス片がたくさん入っている。

6 遺跡の地形・地質環境

常入遺跡群は長野県東部の上田盆地における千曲川右岸に位置し、上田城面と上田原面にまたがって展開する。甲田三男先生のご教示によると、常入遺跡群における下町田遺跡の今回の発掘調査地周辺は上田城面により一段高い地形面を形成しており、上田泥流堆積物と比較すると堆積物に軽石が入っていないことから、調査地の地質は上田原湖成層の泥流質凝灰礫岩であるということである。

第2節 歴史的環境

下町田遺跡は、常入遺跡群を構成する8つの遺跡（堀之内、上町田、下町田、西町田、東町田、中村、手筒山、藤之森遺跡）のうちの一つである。遺跡群は信州大学繊維学部の敷地周辺を主な分布域としているが、近世城下町以来の市街地と重なる部分があり、その範囲は明確ではない。

上田城面の西端と東端、すなわち秋和地区とこの常入地区には、弥生時代から平安時代の遺跡が集中している。中心部には近世上田城と城下町の遺構が散見できるが、それ以外の遺跡については、市街化のためもあり不明である。

〈縄文時代〉

上田城面の北端にあたる太郎山山麓には、縄文時代前・中・後期の遺跡が分布する。なかでも、太郎山に源を発する黄金沢扇状地の扇端に位置する八幡裏遺跡群思川遺跡は、上田地域を代表する該期の遺跡の一つとして挙げられる。昭和27年に病棟の改築に伴って五十嵐幹雄氏によって発掘調査が行なわれた。調査では明確な遺構は確認されなかったものの、中期から後期の土器や石器とともに、ニホンジカやイノシシを中心とする多量の動物遺存体（骨）が出土した。平成6年の八幡裏遺跡第2次発掘調査では国立長野病院の建設工事に伴い約8,000㎡を調査した。その結果、柄鏡形敷石建物を含む竪穴建物跡7軒と土壇、集石遺構などを検出した。なかでも、土壇から検出された屈葬人骨は、遺存状態も良く、貴重な調査例となった。出土した遺物は、中期の加曾利E式、後期の称名寺式、堀之内式、加曾利B式などの土器のほか、石器類、土偶、大珠、獣骨など多岐にわたっている。平成8年度に行なわれた国立長野病院看護婦宿舎建設に伴う第3次発掘調査でも、中期後葉から後期前葉の土器を伴う3軒の敷石建物跡が見つかった。

ている。

〈弥生時代〉

弥生時代の遺跡であるが、上田盆地では前期・中期の遺跡は僅かしか確認されていない。大正14年に上田温泉電軌北東線の敷設工事が行われた際に、八幡裏遺跡群から中期の栗林式土器の壺形土器2点と大型蛤刃石斧が出土している。このように表採や工事中の出土例はあるものの、遺構に伴って出土した例は確認されていない。

後期では、国分寺周辺遺跡群が平成6～7年度に市道踏入大屋線及び北陸新幹線建設に伴って発掘調査され、後期箱清水式期から古墳時代前期の集落と溝跡が確認された。また、国分遺跡群上沢沖遺跡からも箱清水式土器が表採されている。

今回調査した常入遺跡群は、小山真夫や五十嵐幹雄ら先学諸氏により弥生土器や土師器が採集され、報告されるなど、古くから土器が出土することが知られていたため、信州大学の多大な協力のもと、平成8年から5次にわたり、合わせて約4,400㎡の発掘調査を実施した。その結果、多量の土器や91軒にもものぼる竪穴建物跡をはじめ、ベンチャービジネスラボラトリー棟（平成15年度調査）敷地からは全国でも類例の少ない弥生時代後期の井戸跡が検出されるなど、大きな成果があった。

〈古墳時代〉

古墳時代になると、上田城面では太郎山麓に特徴的な古墳を見ることができる。方墳としては県内最古級とみられる、4世紀末から5世紀前半の築造とされる大蔵京古墳や、東信地域では唯一の前方後円墳である6世紀前半の二子塚古墳がその例である。後期の典型的な群集墳は太郎山麓では確認されていないが、下水道工事中に発見された豊原古墳の例もあり、太郎山から押出された土砂で埋もれている可能性もある。常入遺跡群周辺にはかつて藤ノ森古墳と呼ばれる古墳があったという。

集落は中～後期のものが、太郎山麓や国分寺周辺に分布しており、常入遺跡群でも竪穴建物跡が発見されている。また、繊維学部手筒山宿舎周辺では前期に属する土師器が出土している。

〈奈良・平安時代〉

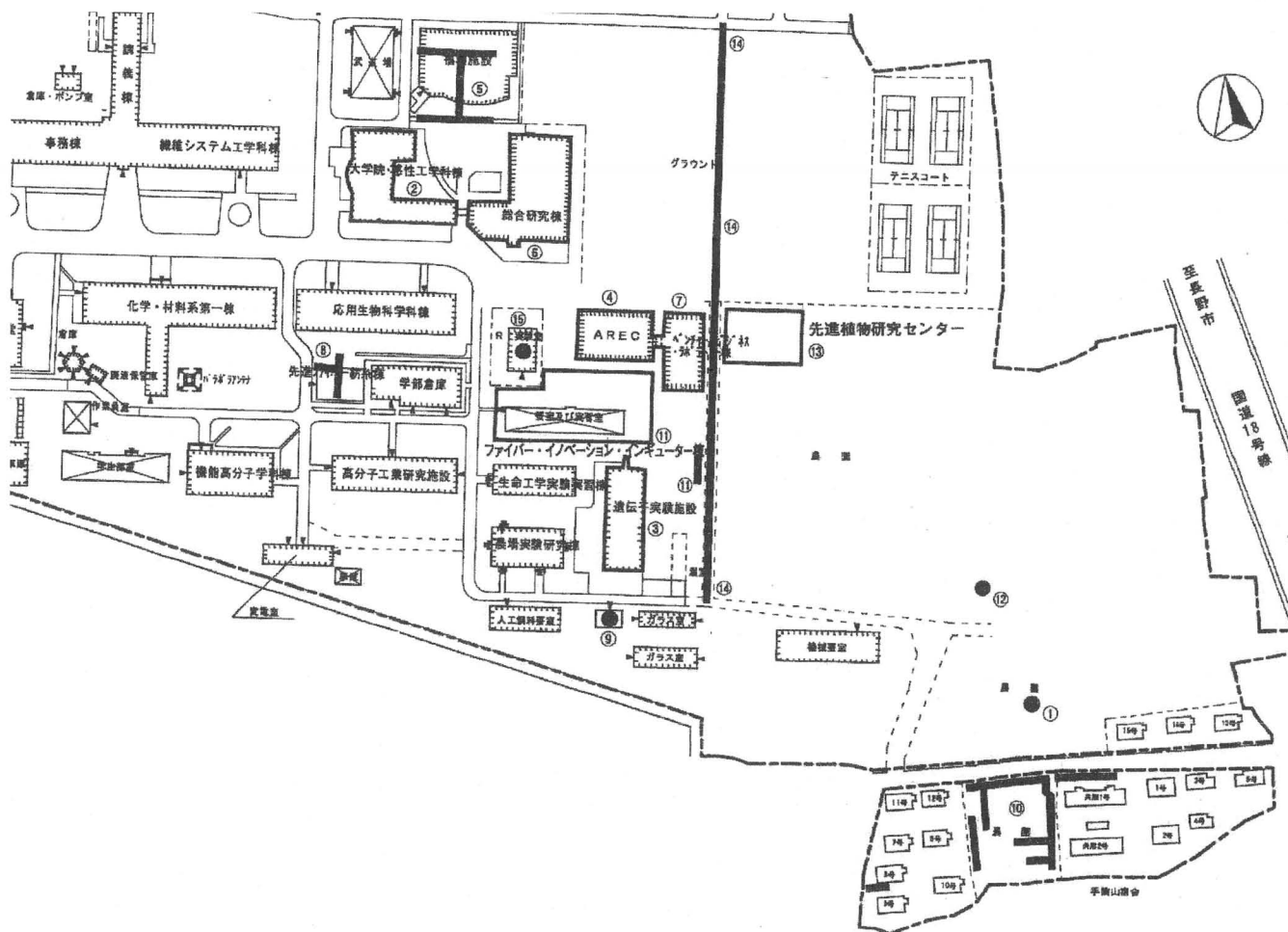
上田城面では、この時代の遺跡も比較的多く分布している。発掘調査を行った八幡裏遺跡や国分寺周辺遺跡群からは、建物跡が多数見つかっている。周知のとおり、上田城面の直下の段丘には信濃国分寺跡が所在し、関連する集落などが周辺に広がっている。こうした環境から、初期の信濃国府が上田地域にあった可能性が以前から論じられているが、現在のところ、考古学的には結論を得ていない。今回発掘調査した繊維学部構内は、染屋台などともに有力な候補地としてされてきたが、これまでの調査ではそれを裏付ける遺構、遺物の検出には至っていない。

番号	遺跡名	所在地	時代	備考
9	二子塚古墳	秋葉裏	古墳	市史跡
12	信濃国分寺跡	国分字仁王堂・明神前ほか	奈良	国史跡
13	上田城跡	二の丸	近世	国史跡
44	熱泰寺遺跡	住吉字熱泰寺	縄文	
52	染屋台条里水田跡遺跡	上野・住吉・古里・国分	平安～近世	
53	向田古墳	古里字向田	古墳	
54	国分遺跡群	国分字古城・堂浦・屋敷	弥生～平安	
56	国分寺周辺遺跡群	国分字仁王堂・明神前ほか	縄文～平安	
57	常入遺跡群	常入字堀之内	縄文～平安	
58	金井裏遺跡	上田字金井裏・蟹原	縄文～平安	
60	二子塚古墳群	上田市秋葉裏	古墳	
62	雁堀遺跡	上田字雁堀	弥生・平安	
63	西丘遺跡	上田字西丘	平安	
64	八幡裏遺跡群	緑が丘字思川・大星前ほか	縄文～平安	
65	海野遺跡	中央・大手	弥生・平安	
66	上田城跡（三の丸）	中央・中央西・大手・北大手	近世	
84	六句古墳	小牧字六句	古墳	
86	初太郎古墳	小牧字花水	古墳	
95	渋取田遺跡	諏訪形字渋取田・中堰	縄文～平安	
96	中沢遺跡	諏訪形字中沢	平安	
423	小牧遺跡	小牧字城山	近世	
457	染屋城跡	古里字英	近世	

第2表 下町田遺跡周辺の遺跡一覧



第3図 常入遺跡群の位置と周辺の遺跡分布図（数字は第2表に対応）



	実施年月	調査の原因	保護措置	時代	遺構その他
①	S41.10	上田小県誌編纂に係る学術調査	発掘調査	古墳中期～後期	竪穴建物跡2軒など
②	H8.3 ~ H8.4	大学院・感性工学科棟建設	発掘調査Ⅰ	弥生後期	竪穴建物跡10軒など
③	H11.4 ~ H11.6	遺伝子実験施設建設	発掘調査Ⅱ	弥生後期～古墳前期	竪穴建物跡25軒など
④	H13.2 ~ H13.3	上田市産学官連携支援施設建設	発掘調査Ⅲ	弥生後期	竪穴建物跡32軒など
⑤	H12.1	福利施設建設	試掘調査		なし
⑥	H14.4 ~ H14.7	総合研究棟建設	発掘調査Ⅳ	弥生後期	竪穴建物跡9軒など
⑦	H15.4 ~ H15.7	ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー棟建設	発掘調査Ⅴ	弥生後期	竪穴建物跡15軒、井戸跡1など
⑧	H20.4	先進ファイバー紡糸棟建設	試掘調査		なし
⑨	H20.8	車庫施設(カーポート)設置	工事立会		なし
⑩	H21.9	手筒山地区再開発計画	試掘調査	弥生後期～古墳前期	竪穴建物跡2軒など
⑪	H21.10 ~ H22.1	ファイバー・イノベーション・インキュベータ棟建設	発掘調査Ⅵ	弥生後期	竪穴建物跡16軒など
⑫	H21.11	堆肥舎設置	工事立会		なし
⑬	H21.12 ~ H22.1	先進植物工場研究センター建設	発掘調査Ⅵ	弥生後期～古墳中期	竪穴建物跡6軒など
⑭	H22.1 ~	水道本管敷設替え	工事立会		なし
⑮	H22.3	RI棟解体工事	工事立会		なし

※発掘調査を実施した箇所の試掘調査は割愛した。

第4図 信州大学繊維学部構内の発掘調査の履歴

第3節 遺跡の層序

今回調査した下町田遺跡の標準土層は下記のとおりである。

I層 5YR2 / 1 黒褐色土層

表土。層厚は10～15cmあり、もともとは畑の耕作土である。建物敷となっていた箇所においては硬く締まっていた。

II層 7.5YR4 / 2 灰褐色土層

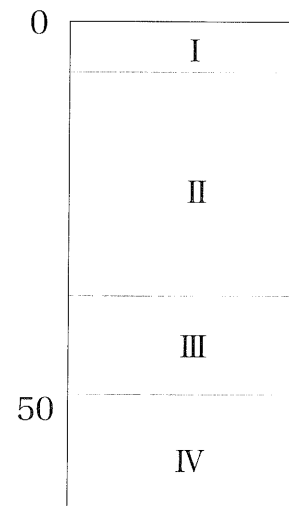
層厚は25～35cmあり、硬く締りのある層で、粘性がある。

III層 7.5YR3 / 3 暗褐色土層

層厚は15～25cmあり、硬く締りのある層で、粘性がある。ロームブロックや炭化物粒を含む。

IV層 5YR5 / 6 明赤褐色土層

地山層で本層を遺構検出面とした。砂礫層で、地表から40～50cmの深さから始まる。千曲川火山泥流層と呼ばれるものである。検出された竪穴建物跡は、この層まで掘り込んでいる事例が多い。



第5図 基本土層図

第三章 調査の結果

第1節 調査の概要

本調査で検出した遺構は、第7図の遺構配置図に示したとおり、竪穴建物跡が26軒（弥生時代後期26）、土坑が70基（弥生時代後期2、古墳時代中期1、近現代4、時期不明63）、溝状遺構1基（近世以降か？）であった。これらの遺構の詳細については本章第2節で報告する。なお、遺構番号は第5次調査までに用いた一連の番号に引き続いて付した。また、土坑及びピットの分類方法は第5次調査までのものを変更した。調査では上田蚕糸専門学校開校（明治11年）以降の建物建設や、耕作等による掘り込みや攪乱も多く確認されたが、これらの報告は本書では割愛する。

出土した遺物は、土器、石器、土製品、陶磁器、鉄滓等である。これらは、遺構から出土した実測可能な遺物を中心に、第3節で報告する。

なお、便宜的にファイバーイノベーション・インキュベータ棟建設予定地を調査区A、先進植物工場研究センター建設予定地を調査区Bと呼称する。

第2節 遺構と遺物

1 竪穴建物跡（竪穴住居跡）

25基の遺構を竪穴建物跡とした。柱穴や地床炉等の付属施設の有無から竪穴建物かどうかの判定を行った。ただし、隣接する発掘調査区で検出された竪穴建物跡と同一の遺構であると判断したものについてはこの限りではない。遺構検出作業の際に竪穴建物跡と想定した遺構には、第99～127号の番号を付したが、調査の進行に伴って、第101・105・112号としたものは竪穴建物跡ではないと判断したため、欠番とした。なお、時間的制約により、竪穴建物内施設の実測や床面の剥ぎ取りが一部を除いて十分にできなかったことを予めお詫び申し上げたい。

第99号竪穴建物跡〈S B 99〉（第8・9・32図）

調査区Aの西端部に位置する。遺構全体が調査区内に存在している。S B 100と重複している。S B 99がS B 100の床面を破壊しており、S B 99が新しい遺構であると判断した。平面形は隅丸長方形であるが、北西部分は床面と壁が失われており、遺構の掘方が辛うじて残存していた。長軸9.1m、短軸4.6mを測る。床面は若干堅緻な程度であった。主軸方向はN 53°Wを指す。覆土は第8・9図に示した。p i t 1～4が支柱穴とみられる。地床炉を検出したが、焼土のみで、炉縁石はなかった。地床炉が北寄りの支柱穴p i t 3・4の間に存在することから、出入口は南東方向に想定され、p i t 5・6が出入口に関連した穴と思われる。なお、p i t 7は底部から平石を1個検出した。本遺跡では竪穴建物の出入口の右横に貯蔵穴と推定されるやや大きめのp i tが作られることが多いが、この建物跡の事例は礎石を伴う柱穴である可能性も考えられる。

遺物は床面と覆土中から弥生時代後期の遺物が出土した。土器は箱清水式土器が出土したが、全体形をうかがえるものはほとんどなかった（第32図）。ほかに石器が1点と土器片を転用した土製円盤が1点出土している。

第100号竪穴建物跡〈S B 100〉(第8・9・37図)

調査区Aの西端部付近に位置する。検出当初は第52号土坑〈S K 52〉として扱っていたが、堅い床面を検出したことから、竪穴建物跡とし、番号を付した。S B 99との重複により床面の大部分が破壊されていた。平面形は残存部から方形であることが推定でき、弥生後期の遺物を出土していることから、隅丸長方形と考えられる。覆土は第8・9図に示した。

遺物は床面と覆土中から出土した。弥生時代後期の箱清水式土器が出土した(第37図)。検出面積は狭いが、遺物は良好に残存しているものが多い。

(第101号竪穴建物跡〈S B 101〉欠番)

検出面精査の際に、近代の攪乱孔を竪穴建物跡と誤認したため、欠番とした。

第102号竪穴建物跡〈S B 102〉(第11・33図)

調査区Aの西端部付近に位置する。S B 114と重複するが、平面プランの検出時に遺構の重複に気付くことができず、また、床面レベルもほぼ同様であったため、S B 114の支柱穴と炉を検出するまで、遺構の新旧関係を誤認したまま調査を進めてしまった。そのため、出土品の所属はできる限り訂正したが、帰属が明確な遺物のみ報告することをご容赦願いたい。

調査時には、遺構の北部分1/3程度が調査区外(R-I実験棟敷地内)に存在するものと考えたが、R-I実験棟の解体後に行った試掘調査の結果、既に破壊されていることが判明した。残存率が悪くデータの正確性に欠けるが、遺構の短軸は5.2m程度と推定される。床面は堅緻であった。主軸方向は概ねN15°Eを指すものと推定される。覆土は第11図に示したとおりである。p i t 1~2は支柱穴とみられる。p i t 3・4から出入口は南壁に想定した。p i t 5の底部からは高坏の坏部が出土した(第33図)。建物跡の西側部分は、攪乱と近代の土坑(電柱のアンカー坑)であるS K 57により破壊されていた。

遺物は床面と覆土中から出土したが、図化しえたものはほとんどなかった。弥生時代後期の箱清水式土器が出土した(第33図)。

第103号竪穴建物跡〈S B 103〉(第12・34図)

調査区Aの中央付近に位置する。ガス埋設管が遺構を東西に貫通していたため、調査ができなかった箇所がある。北側で重複するS B 105により床面が破壊されており、S B 103が古い遺構であると判断した。また、南東部分がS K 58と重複して失われている。遺構の半分程度が重複により破壊されているが、平面形は残存部から方形であることが推定でき、弥生後期の遺物を出土していることから、隅丸長方形を呈していたと考えられる。床面は堅緻である。ピットは3基を確認したが、p i t 1、2はやや大きなものである。覆土は第12図に示した。

床面が浅かったせいもあろうか、遺物は小破片がほとんどであった。弥生時代後期の箱清水式土器が出土した(第34図)。

(第104号竪穴建物跡〈S B 104〉欠番)

検出面精査の際に、竪穴建物跡が2軒重複しているものと誤認してしまった。調査の途中でこれらが1

軒の建物跡であることが判明したため、S B 104 を欠番とし、S B 105 とした。当初、S B 104 出土品として取り上げた遺物は、整理作業の際に帰属を訂正した。

第 105 号 竪穴建物跡 〈S B 105〉 (第 12・39・40 図)

調査区 A の北部に位置する。建物跡の南側で S B 103 と重複し、前述のとおり、本建物跡の方が新しいものと判断した。遺構の北部分 1 / 4 程度が調査区外 (第 3 次調査区との間隙地) に存在するものと想定した。建物内に p i t が多く存在するが、p i t 3、5 の位置から出入口を東壁に想定した。これを前提に長軸 6.1 m、主軸方向は N 68°W と推定した。床面は若干堅緻であった。覆土は第 12 図に示した。p i t 2、6 及び 10 ~ 13 が柱穴である可能性がある。ただし、p i t 2 は土器が収納されていたことから貯蔵穴とも考えられる。p i t 内の土器は正位の鉢 (第 40 図 13) の上に、もう 1 個体、甕 (第 39 図 3) を横位に乗った状態で検出された (写真図版 6)。

遺物は床面と覆土中から出土し、図化しえたものが多かった。弥生時代後期の箱清水式土器が出土した (第 39・40 図)。器台 (第 40 図 12) の出土が目を引く。

第 106 号 竪穴建物跡 〈S B 106〉 (第 10・35 図)

調査区 A の南部分に位置する。近代の陶器片を出土する S K 60 と重複する。覆土は第 10 図に示した。出土遺物がごく少ないが、床面から壺の底部が正位で出土した。床面を検出したことから、竪穴建物跡とし、番号を付した。調査時には遺構の大半が調査区外に存在するものと考えたが、隣接する生命工学実験棟との間はガス、上下水道管、排水溝などが密集しており、工事直前に行った確認調査では、遺構は破壊されていることが判明した。

遺物は床面と覆土中から出土したが、その量は少ない。弥生時代後期の箱清水式土器が出土した (第 35 図)。

第 107 号 竪穴建物跡 〈S B 107〉 (第 13・36 図)

調査区 A の中央付近に位置する。床面が浅く、出土品もごく少ない。床面と支柱穴を検出したことから、竪穴建物跡とし、番号を付した。他の遺構との重複はない。

平面プランは隅丸長方形を呈している。長軸 4.8 m、短軸 3.7 m を測る。主軸方向は N 57°W である。p i t 1、2、6、7 を支柱穴とし、主軸ラインからずれるが、p i t 3 ~ 5 の位置から出入口は南壁にあった可能性がある。床面は若干堅緻であった。覆土は第 13 図に示した。出土遺物はごく少なかったが、北寄りの主軸上で土器の底部が 1 点床面直上から出土した (第 36 図)。焼土や掘り込みは確認できなかったが、炉である可能性もあろうか。

第 108 号 竪穴建物跡 〈S B 108〉 (第 14・15・41・42 図)

調査区 A の中央付近に位置する。重複する S B 109 を破壊しているものの、掘方はその床面までは達していない。長軸は 6.0 m、短軸 5.0 m を測り、今回の発掘調査で検出した竪穴建物跡のなかでは、規模が大きいもののひとつである。主軸方向はほぼ真北と推定した。床面は著しく堅緻であった。覆土は第 14・15 図に示した。p i t 1 ~ 2 は柱穴とみられるが、奥側の柱穴が判然としなかったが、p i t 3・4 から出入口は南壁に想定した。p i t 4 の周辺から 4 個体の土器が出土した (写真図版 7)。

遺物は床面と覆土中から出土した。弥生時代後期の箱清水式土器が出土した（第41・42図）。土製円盤が5点（無孔のものが2点と中心に孔をもつものが3点）、胎土から弥生時代の所産と考えられる用途不明の土製品が出土している（第42図16～21）。

第109号竪穴建物跡〈SB109〉（第14・15・43・44図）

調査区Aの中央付近に位置する。前述したようにSB108により破壊されているものの、床面はほぼすべて残存しており、遺構が良好なままで保存されていた。ガス管幹線が遺構を東西に貫通し、調査できなかった部分があったことが残念である。長軸9.2m、短軸6.6m、主軸方向はN14°Wである。今回の調査で発見された建物跡のなかでも最大級の建物跡である。床面は著しく堅緻であった。覆土は第14・15図に示した。pit1～4が支柱穴とみられる。地床炉がピットNo.1と2の間に設けられていたが、4回にわたり場所を変えていたことが判明した。最も古い炉以外の炉は、東側のものには炉縁石が3つ、西側のものには1つが残っていた。また、炉の位置とpit5・6から出入口は南壁に想定した。

遺物は床面と覆土中から出土した。弥生時代後期の箱清水式土器が出土した（第43・44図）。頸部に突帯を巡らせる壺（第43図7）や、円盤状の蓋（第43図10）、脚部に三角透し孔を有する高坏（第44図15）の出土が目を引く。また、土製紡錘車が1点と、土製円盤が3点（無孔のものが3点）、覆土と床面から出土している（第44図17～20）。

第110号竪穴建物跡〈SB110〉（第16・38図）

調査区Aの中央南付近に位置する。調査区外に存在する部分があり、全体像を掴むことは難しい。床面から更に一段掘り込んだ浅いpit1から箱清水式土器が2点出土した（第38図）。

第111号竪穴建物跡〈SB111〉（第17・45図）

調査区Aの北部分に位置する。調査区外に存在する部分があり、遺構の一部を検出したのみである。覆土中に拳～人頭大の石が多量に混入しているが、焼土や炭化物などは確認できなかった。ピット等の施設が検出されなかったため、土坑、あるいは竪穴状遺構として扱うべきかもしれないが、平面プランと床面レベルから推定すると、第3次調査で検出された「第72号住居址（SB-72）」と同一の遺構である可能性がある。なお、北側に隣接する第3次調査区との間は、既存校舎の安全上、幅2m程度の間隙地を設けて発掘調査を実施せざるをえなかった。そのため、敢えて新しい遺構番号を付してある。

遺物は覆土中から出土した。弥生時代後期の箱清水式土器が出土した（第45図）。頸部にT字文を有する壺が出土したが、文様帯に縦の無文帯（赤色塗彩あり）が交差するやや特異な事例である（第45図1）。

（第112号竪穴建物跡〈SB112〉欠番／SK58に名称変更）

検出面精査の際に、竪穴建物跡を想定したが、調査の過程で土坑に変更して採番したため、欠番とする。なお、当初にSB112出土品として取り上げた遺物は、整理作業の際に帰属を訂正した。

第113号竪穴建物跡〈SB113〉（第18・47・48図）

調査区Aの南東付近に位置する。他の遺構との重複がなく、遺存状態は良好である。検出面精査の際、竪穴建物跡内部に黒色土と拳大の石が混じる楕円形の落ち込みを認めた。周辺には近代の攪乱がいくつか

あり、当初はこれをそれらと同様のものと判断し、建物跡にセクションベルトを設定して掘り下げを始めた。しかし、途中で石（以下、集石と称す）が遺構覆土の緩やかな落ち込み上に意図的に投入されている可能性を認め、さらに調査を進めた結果、集石の下から焼土と炭化物の層が検出され、やや大きめの土器の破片が集石の間に見られるようになり、この集石を竪穴建物廃絶後に形成された弥生時代後期の遺構として捉えるに至った。そのため、当初は集石の覆土を廃棄してしまったが、後述する S B 120 で検出された同様の集石の覆土中からはガラス小玉が複数検出されており、当初から慎重な調査を行わなかったことが悔やまれる。時間的な制約があったにせよ、猛省すべき点であり、今後の調査で教訓として活かしていきたい。

竪穴建物跡は長軸 4.4 m、短軸 3.8 m を測る。主軸方向は N 21° E である。床面は若干堅緻であった。覆土は第 18 図に示した。p i t 1 ~ 4 が支柱穴とみられる。炉は p i t 1 と 2 の間に設置されていた。炉の位置と p i t 5・6 から出入口は南壁に想定した。

遺物は床面と覆土中、及び集石中から出土した（第 47・48 図）。いずれも弥生時代後期の箱清水式土器であるが、床面と集石中の遺物には明らかな時間的前後関係があると考えられる。ただし、SB120 でも同様であったが、集石中の遺物には図化し得る土器片がほとんどなかった。そのため、両者に明確な様式差は確認できなかった。建物跡が廃絶後、集石が形成されるまでの時間がどのくらいあったかについては、今後の検討課題としたい。ただ、集石下の覆土に他質土がブロック状、あるいはマーブル状に混じるようなことは確認できなかったため、集石を形成する前に人為的に土が搬入された可能性は低いものと考えている。

今回の調査では甕の胴部に櫛描斜走文を有する事例はごく僅かしか確認できなかったが、本建物跡から図化が可能な個体が出土した。胴部は緩やかな球形を呈し、頸部に櫛描簾状文が施されるもの（第 47 図 4）や、口縁部から胴中位にかけて櫛描直線文を施文する事例が見られる（第 47 図 5）。外面と口縁部の内面を赤色塗彩する深鉢が複数出土した。図化し得た個体は 2 点あり、1 点は口縁部に 2 孔を有する（第 48 図 16）。もう 1 点は頸部に櫛描簾状文が見られるものであるが、等連止めあるいは 2 連止めを意識しながら、線を描かずに櫛の先端を器面に刺突させるだけである（第 48 図 17）。本例は台付甕の器形になるのかもしれない。

第 114 号竪穴建物跡〈S B 114〉（第 11・46 図）

調査区 A の西端部付近に位置する。S B 102 と重複するが、平面プランの検出時に遺構の重複に気付くことができず、また、床面レベルもほぼ同様であったため、本竪穴建物跡の支柱穴と炉を検出するまで、遺構の新旧関係を誤認したまま調査を進めてしまった。

遺構の北部分 1 / 3 程度が調査区外（R - I 実験棟敷地内）に延びるが、SB102 の項で述べたとおり、既に破壊されているものと考えられる。主軸方向は N 72° W である。長軸 7.3 m を測る。床面は堅緻であった。覆土は第 9 図に示した。p i t 1、2、5 が支柱穴とみられる。p i t 5 の脇に地床炉が存在する。炉縁石を用いたものであったが、担当者の指示が至らず、実測・撮影前に石を抜いてしまうというミスを行ったため、記録が残っていないことをご容赦願いたい。p i t 3・4 から出入口は南東壁に想定した。西の壁際に周溝と思われる施設を検出した。

遺物は床面と覆土中から出土した。弥生時代後期の箱清水式土器が出土した（第 46 図）。

第115号竪穴建物跡〈SB115〉(第19・49図)

調査区Aの北東隅に位置する。SB117と重複しているものの、東隅部分が僅かに破壊されている程度で遺構の遺存状態は良好である。ただし、この建物跡もガス管幹線が遺構を東西に貫通している。長軸7.2m、短軸5.1mを測る。主軸方向はN44°Wである。床面は著しく堅緻であった。覆土は第19図に示した。pit2、4、7が支柱穴とみられ、pit3、5、6は控え柱の穴とも考えられる。

遺物は床面と覆土中から出土した。弥生時代後期の箱清水式土器が出土した(第49図)。

第116号竪穴建物跡〈SB116〉(第19図)

調査区Aの中央北部に位置する。大部分が調査区外に存在するものと推定される。ピット等の施設が検出されなかったため、土坑、あるいは竪穴状遺構として扱うべきかもしれないが、平面プランと床面レベルから推定すると、第3次調査で検出された「第63号住居址(SB-63)」と同一の遺構である可能性がある。

遺物は覆土中から僅かに出土したが、図化し得るものはなかった。弥生時代後期の箱清水式土器が出土した。

第117号竪穴建物跡〈SB117〉(第20・50・51・52図)

調査区Aの東北隅に位置する。SB115・118・121と重複する。SB121が北側隅を破壊している。また、SB118は南隅で重複するものの、床面までは破壊していない。遺構の新旧関係は新しい順に、SB121・118→117→115と判断した。重複のわりに遺構の保存状態は比較的良好である。長軸5.9m、短軸4.2mを測る。主軸方向はN48°Wである。床面は堅緻であった。覆土は第17図に示した。pit1～3、6が柱穴とみられるが、6は支柱穴にしては規模が小さい。また、壁面に沿ってpit7～11を検出したが、これらも柱穴であるかもしれない。pit2と5の間に地床炉が存在する。一部壁際に周溝と思われる施設を検出した。

遺物は床面と覆土中から出土し、図化し得たものが多かった。弥生時代後期の箱清水式土器が出土した(第50～52図)。土器様式を構成する器種セット(甕・壺・高坏・蓋・無頸壺・台付甕)に外来系の要素が加わる良好な資料である。SB109等でも見られる、頸部に突帯を巡らせる壺も1点出土している(第52図12)。

外来系土器と考えられる、頸部に2連止めの櫛描簾状文を有する甕で、櫛描波状文に代えて縄文が施文される事例が出土した(第50図7)。文様帯構成は箱清水式土器の甕に似ているが、胎土は本遺跡で一般的に見られる土器の胎土とは異なり、全体的に黒っぽい。縄文は原体(RLか?)を器面の下から上に3～4回転させて波状文を模している。櫛描簾状文を挟んで口縁と胴上位には縄文が施文され、胴中位以下は無文(ミガキ調整を残す)となるようである。尾見智志氏の教示によれば、本例は北関東地域に分布する赤井戸式土器・吉ヶ谷式土器と関連があるのではないかとのことである。下町田遺跡ではこれまで北陸地域の土器の影響は指摘されていたが、関東地域との関連性については類例が少なく、注目される。なお、この他に口唇部に刻みを有する無文の小型甕も出土している(第50図6)。本遺跡の出土品の中では極めて異質なものであり、胎土も地元の土器と異なることから、外来系土器として捉えられるのかもしれない。

第 118 号竪穴建物跡〈S B 118〉(第 21・53・54 図)

調査区 A の東隅付近に位置する。S B 115・117・119 と重複する。遺構の東部 1 / 4 程度が調査区外に存在すると考えられる。重複する竪穴建物跡のなかでは一番新しい遺構と判断した。遺構内から炭化材が多量に検出されたことから、廃絶時に上屋に火をかけたか、火災にあった可能性が考えられる。この建物跡もガス管幹線が遺構を東西に貫通しているが、遺構の保存状態は比較的良好であった。短軸 4.5 m を測る。主軸方向は N 52°W である。床面は堅緻であった。覆土は第 21 図に示した。支柱穴とみられるピットは確認できなかった。p i t 8 は土器収納施設で、ピットの底に小石を並べて、その上に小型甕(第 53 図 3) が正置された状態で検出された(写真図版 10)。

第 5 次調査の「第 88 号住居跡(S B - 88)」がこの建物跡に近接した場所から検出されており、遺構内から炭化材が発見されているが、同一の竪穴建物跡と考えるには規模が大き過ぎるため、異なる遺構と判断した。

遺物は床面と覆土中から出土した。弥生時代後期の箱清水式土器が出土した(第 53・54 図)。折り返し口縁の甕(第 53 図 5 及び写真図版 30) は、本遺跡では初めて全体の器形を知りえる資料が出土した。口縁部を折り返す以外は、器形、文様構成が大きく異なることはないようだが、無文となる口縁部もあり、注意されよう。

第 119 号竪穴建物跡〈S B 119〉(第 21・55・56 図)

調査区 A の東隅付近に位置する。遺構の南東部が調査区外に存在する。北側で S B 118 と重複し、この遺構に床面を破壊されているため、本竪穴建物跡のほうが古い遺構と判断した。床面は堅緻であった。覆土は第 18 図に示した。p i t 1 ~ 2 が支柱穴とみられる。

検出面積の割に遺物は多く、床面と覆土中から弥生時代後期の箱清水式土器(第 55・56 図) が出土した。なかでも注目されるのは、胴下半部が壺のような器形をとる事例である第 56 図 7 及びカラー写真図版 3)。調査期間終了を目前にして、出土状況を図に記録することができなかったが、横位で潰れており、破片の遺存状況は良好であった。調査区の境界で出土したため、区外にまだ口縁部付近が残っている可能性もあろう。たまたま全体の器形が判明する資料がこれだけなのかもしれないが、胴部に明瞭な稜線を持つため、「櫛描波状文を有する壺」であるかのような錯覚を覚えた特異な甕である。土器製作技法における規制から外れた本事例は、箱清水式土器様式が解体していくなかで見られる事例の一つなのかもしれない。

第 120 号竪穴建物跡〈S B 120〉(第 22・23・57・58 図)

調査区 A の東南付近に位置する。S B 113 に近接し、同様に竪穴建物跡の平面プラン内に石を含む黒色土の落ち込みを確認した。S B 113 での反省を踏まえ、当初から集石の覆土を慎重に掘り下げていたところ、集石に接してガラス小玉が 1 点出土した。そのため、発掘現場で集石の覆土を篩にかけ、遺物の検出を行ったが、時間的制約と寒い屋外での作業が困難を極めたことから、覆土を土のう袋に入れて持ち帰ることとした。これらを整理作業の際に篩にかけた結果、更にガラス小玉 2 点と土玉 1 点、石英の小破片等を検出した。

〈集石について〉

集石は竪穴建物が廃絶され、一定期間をおいて覆土がある程度堆積した後に形成されたものと思われる。建物跡の覆土に客土された形跡はなく、自然堆積した覆土上に石を集めて形成された遺構と考えられる。

石は大小さまざまであるが、拳大のものがほとんどで、窪んだ建物跡に石を投げ込むという行為を想定しても無理のない大きさにとどまっている。石の間から出土する土器はすべて小破片であり、接合を試みたが、成果があがらなかった。このことから、完形土器ではなく、破片を石とともに投入したのではないかと考えた。ガラス小玉もおそらく同様で、出土個数が極めて少ないことから、首飾り等の装飾品をそのまま投げ込んだというよりも、紐から外して「置く」あるいは「撒く」ような行為があったのではないかと推定した。

集石の下から焼土と炭化材が出土した。建物跡内で火が焚かれた後、集石が形成されたものと考えた。集石の覆土は竪穴建物跡の覆土に比べてかなり黒いものであったことから、有機物が多量に混入している可能性もある。なお、集石の周囲を竪穴建物跡の覆土まで掘り下げたところ、直径15cm、深さ20cm程の小型のピットを2基確認した(写真図版13)。竪穴建物跡の覆土を掘り込んでおり、集石に付属する遺構である可能性がある。柱穴のような機能を想定できそうであるが、類例を知らない。

遺構からは祭祀、あるいは埋葬に関する行為等が想定されるが、後述するように、遺物の出土状況は、該期の木棺墓等で見ることができ、副葬品としての土器やガラス小玉とはやや性格が異なるものと考えたい。墓跡である可能性を全く否定するものではないが、後考を待ちたい。

〈竪穴建物跡について〉

長軸5.1m、短軸4.0mを測る。主軸方向はN15°Eである。床面は若干堅緻であった。覆土と集石の断面図は第22図に示した。pit1~4が支柱穴とみられる。炉はpit1と2の間に設置されていたが、掘り込みはなく、床面が赤変していたのみである。炉の位置とpit5・6から出入口は南壁に想定した。西北の隅が現代の便槽により破壊されている。南西隅の床面から、土器がまとまって出土している。

〈出土品について〉

遺物は床面と覆土、集石上から出土した(第57・58図)。いずれも弥生時代後期の箱清水式土器であるが、出土状況から床面と集石上部の遺物には明らかに時間差があると考えられる。ただ、集石上の出土土器には小破片が多く、器形を窺えるものは少ないため、両者の様式差についての検討はできなかった。

まず、集石上からの出土品であるが、ガラス小玉3点と土玉1点の出土が注目される。下町田遺跡でのガラス小玉・土玉の出土は初例である。ガラス小玉は淡いコバルトブルーを呈し、面取りをして丁寧な製作をしている。土玉はガラス小玉とセットで使用されていたものであろうか。検出数が少ないが、ほとんどが篩による検出であることから、発掘作業中の見落としはほとんどなかったと考えたい。集石上からは土器片も出土しているが、図化できるような大きなものはない。破片の接合が芳しくないことから、集石に完形土器が関わることはなかったと考えた。また、土器片は底部や口縁部など特定の部位が多く検出されてはおらず、赤色塗彩された土器片が特に多いということもない。

床面上からは建物跡の南西隅を中心にして、多くの遺物が出土した。特に高坏は括れ部に2条の沈線が施される例(第58図21)や括れ部が直線的に脚部に移行するもの(第58図22)など、バラエティに富んでいる。また、摘み部に3孔を有する蓋(第58図26)やミニチュア土器(手捏ね土器)(第58図27)が出土している。

床面から黒曜石製の打製石鏃が1点出土した(第67図1)。縄文時代の遺物が混入した可能性も考えたが、周辺の遺跡でも弥生時代後期の事例と考えられるものがあることから、本事例も弥生時代後期の遺物として報告しておく。

第 121 号竪穴建物跡〈S B 121〉(第 24・59 図)

調査区 A の東北隅に位置する。遺構の北側の大部分が調査区外に存在する。南側で S B 117 と重複し、この遺構を破壊している。床面は堅緻であった。覆土は第 24 図に示した。平面プランと床面レベルから推定すると、第 3 次調査で検出された「第 59 号住居址 (S B - 59)」と同一の遺構である可能性がある。

遺物は床面と覆土中から出土した。弥生時代後期の箱清水式土器が出土した (第 59 図)。

第 122 号竪穴建物跡〈S B 122〉(第 25・60 図)

調査区 B の西南隅に位置する。遺構の西側の大部分が調査区外に存在する。他の遺構との重複はない。床面は堅緻であった。覆土は第 25 図に示した。柱穴とみられるピットは確認できなかった。炉縁石を 1 つ有する地床炉を検出した。

遺物は床面と覆土中から出土した。弥生時代後期の箱清水式土器が出土した (第 60 図)。

第 123 号竪穴建物跡〈S B 123〉(第 26・64 図)

調査区 B の中央付近に位置する。遺構の東側で S B 126 と重複し、この遺構に床面を破壊されているため、本遺構のほうが古い遺構と判断した。長軸 7.8 m、短軸 6.0 m、主軸方向は N 14°W である。床面は堅緻であった。覆土は第 26 図に示した。p i t 1 と 3 は支柱穴の可能性はある。炉は北側支柱穴間にあり、掘窪めた床面に土器片を敷き、そのうえに壺の頸部を正置した形態をとる (写真図版 33)。土器片と壺の頸部は接合し得なかった。

遺物は床面と覆土中から出土した。弥生時代後期の箱清水式土器が出土した (第 64 図)。

第 124 号竪穴建物跡〈S B 124〉(第 27・61 図)

調査区 B の南部分に位置する。遺構の南側半分程度が調査区外に存在する。第 2 号配石溝 (S D 06) と重複する。短軸 5.6 m を測る。床面は堅緻であった。覆土は第 27 図に示した。

遺物は床面と覆土中から出土した。弥生時代後期の箱清水式土器が出土した (第 61 図)。

第 125 号竪穴建物跡〈S B 125〉(第 28・65 図)

調査区 B の中央に位置する。東側で S B 127 と重複し、この遺構の床面を破壊しているため、S B 127 のほうが古い遺構と判断した。長軸 6.2 m、短軸 4.3 m を測る。主軸方向は N 09°E となる。床面は堅緻であった。覆土は第 28 図に示した。p i t 1 ~ 4 が支柱穴とみられる。

遺物は床面と覆土中から出土した。弥生時代後期の箱清水式土器が出土した (第 65 図)。

第 126 号竪穴建物跡〈S B 126〉(第 26・64 図)

調査区 B の北部分に位置する。西側で S B 123 と重複し、この遺構の床面を破壊しているため、本建物跡のほうが新しい遺構と判断した。長軸 6.2 m、短軸 4.4 m を測る。主軸方向は N 35°E と推定した。床面は堅緻であった。覆土は第 26 図に示した。p i t 1、2 のいずれかと、5、7、9 が柱穴とみられる。p i t 17、18 が出入口に関連するピットと考えられる。

遺物は床面と覆土中から出土した。弥生時代後期の箱清水式土器が出土した (第 64 図)。土製紡錘車が 1 点出土している。

第 127 竪穴建物跡〈S B 127〉(第 28 図)

調査区 B の北部分に位置する。西側で S B 125 と重複し、この遺構に床面を破壊されているため、本建物跡のほうが古い遺構と判断した。第 2 号配石溝 (S D 06) とも重複する。短軸は 3.2 m を測る。主軸方向は N 67° E と推定した。床面は若干堅緻な程度であった。覆土は第 28 図に示した。

遺物はわずかに床面と覆土中から出土した。弥生時代後期の箱清水式土器が出土したが、すべて小片であり、図化し得たものはなかった。

2 土坑

今回の発掘調査では、69 基 (弥生時代後期 2、古墳時代中期 1、近現代 3、時期不明 63) の遺構を土坑とした。遺構検出の際に土坑と想定したもの (当初竪穴建物跡と誤認した遺構を含む) には第 52 ~ 124 号 (S K 52 ~ 124) の番号を付したが、調査の進行に伴い、第 52・53・54・61 号の 4 つは遺構ではないと判断したため、欠番とした。弥生土器を埋設したと考えられる土坑は 2 基検出した。第 57・115 号土坑は電柱のアンカーとして丸太を埋設したもので、近代以降の所産である。また、第 62 号土坑は、蚕室の便槽を埋設したものである。その他の土坑は出土遺物がなく、時期が明確ではない。そのため、個々の遺構の説明は遺構一覧表の記載をもって代えさせていただく。

明確に掘立柱建物跡と推定できる遺構は確認できなかったが、調査区 A の第 83・87・89・90・97 号が直線上に存在することから、掘立柱建物跡の一部である可能性がある。また、調査区 B の 105 ~ 113、118 も遺構の一部である可能性がある。全体像を掴むことができないことから、時期不明の土坑として報告しておく。

第 102 号土坑〈S K 102〉(第 62 図)

弥生時代後期の土器の底部が正位で検出された。土器を埋設したものと推定される。S K 59 に一部破壊されている。

第 116 号土坑〈S K 116〉

弥生時代後期の土器が横位で検出された。土器を埋設したものと推定される。

第 124 号土坑〈S K 124〉(第 63 図)

弥生時代後期の竪穴建物跡 S B 126 と重複しているが、調査の際に建物跡の覆土内で土質・色の違いがはっきり区別できず、平面プランは不明である。土坑としたが、竪穴建物跡であった可能性が高い。出土した土器は古墳時代中期の土師器である。

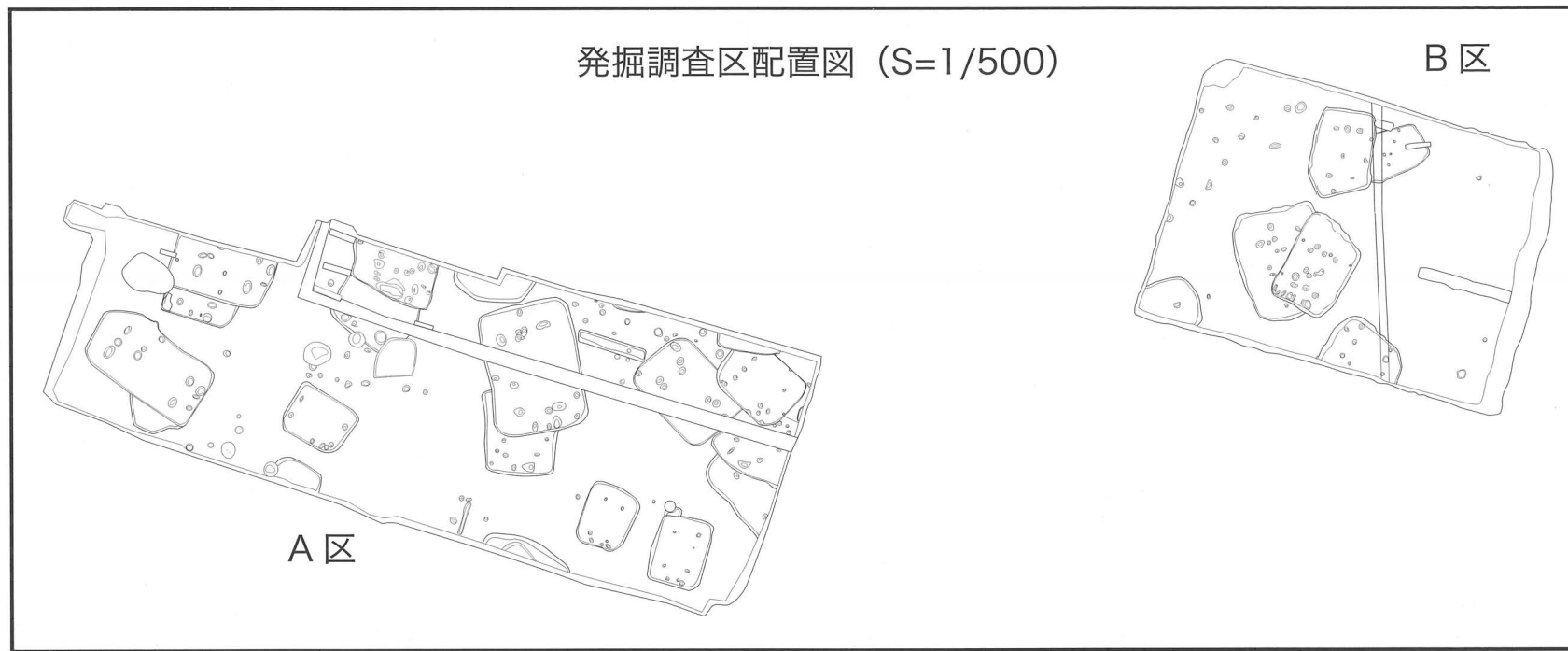
3 溝状遺構

第 2 号配石溝〈SD06〉(第 31 図)

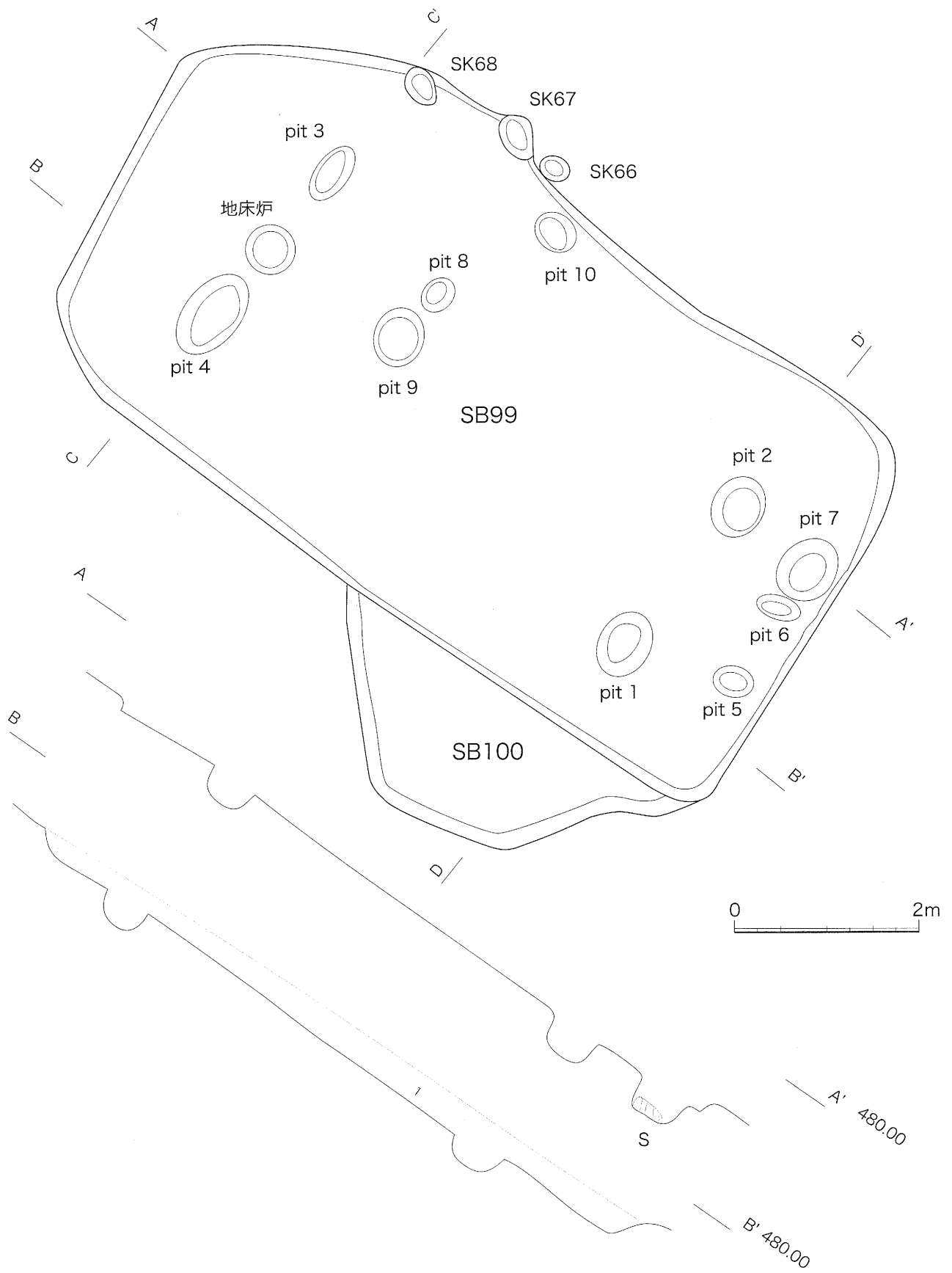
調査区 B を南北に縦断するように位置し、主軸方向は N 2° W を指す。弥生時代後期の竪穴建物跡を破壊しているため、少なくとも遺構の所属時期はこれ以降である。第 4 次調査の際に検出された第 1 号配石溝 (SD05) と同様のもので、断面が四角い溝を掘り、壁に沿って川原石を 2 列に並べ、さらに上に川

原石を渡して蓋のようにしている。覆土の状況も第4次調査の際の見解と違うものではなく、2層に分層した下層は、にぶい赤褐色の砂質土に暗茶褐色土をブロック状に含むことから、石組みを密封するように埋立てがされたものと考えられる。石組みの天井石を外すと、中はトンネル状に空洞となっていた。内部にはわずかに土の堆積が見られ、ごく少量の遺物（弥生土器の破片や近代の陶器）が出土したが、遺構の明確な所属時期を決定するものではない。調査区外においてSD05とつながっているものと考えられる。なお、時間的な制約もあり、遺構の実測が十分にできなかったため、図面に乏しいことをお詫びしたい。巻末の写真図版を参考にされたい。

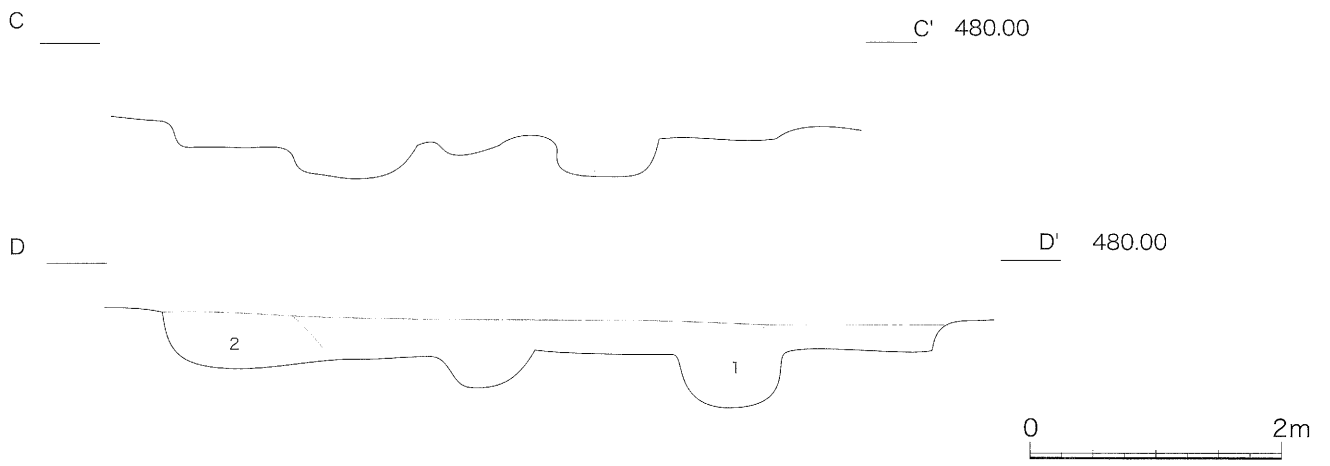
遺構の性格については第4次調査報告書でも検討されたが、類例に乏しく、明確にはなっていない。今回も遺構の報告に留め、今後の研究に期待したい。



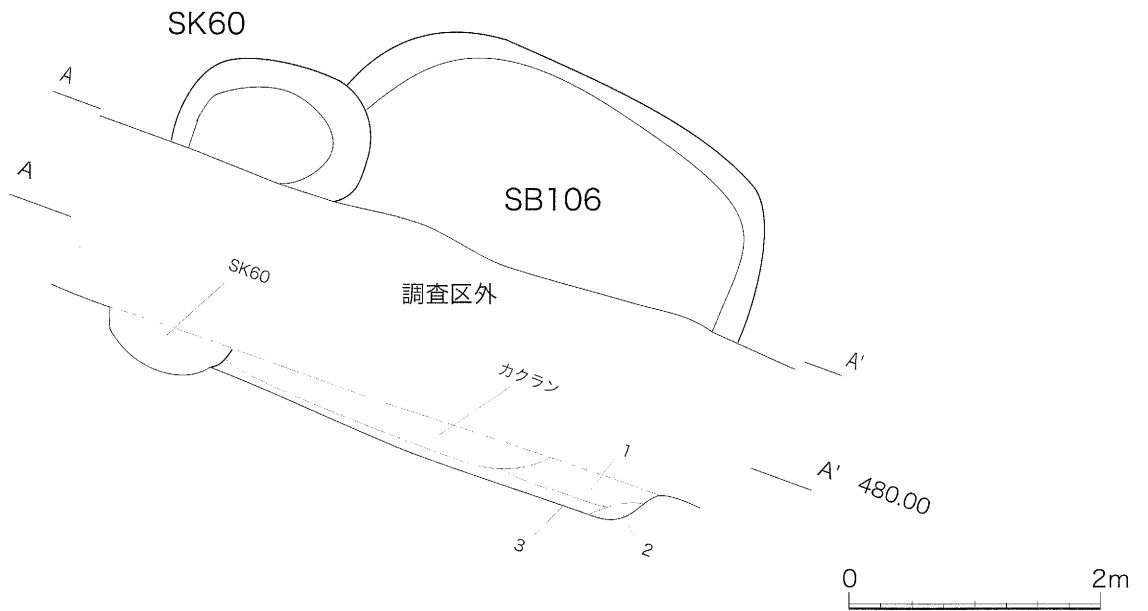
第7図 発掘調査区配置図 (S=1/500) 及び遺構全体図 (S=1/200)



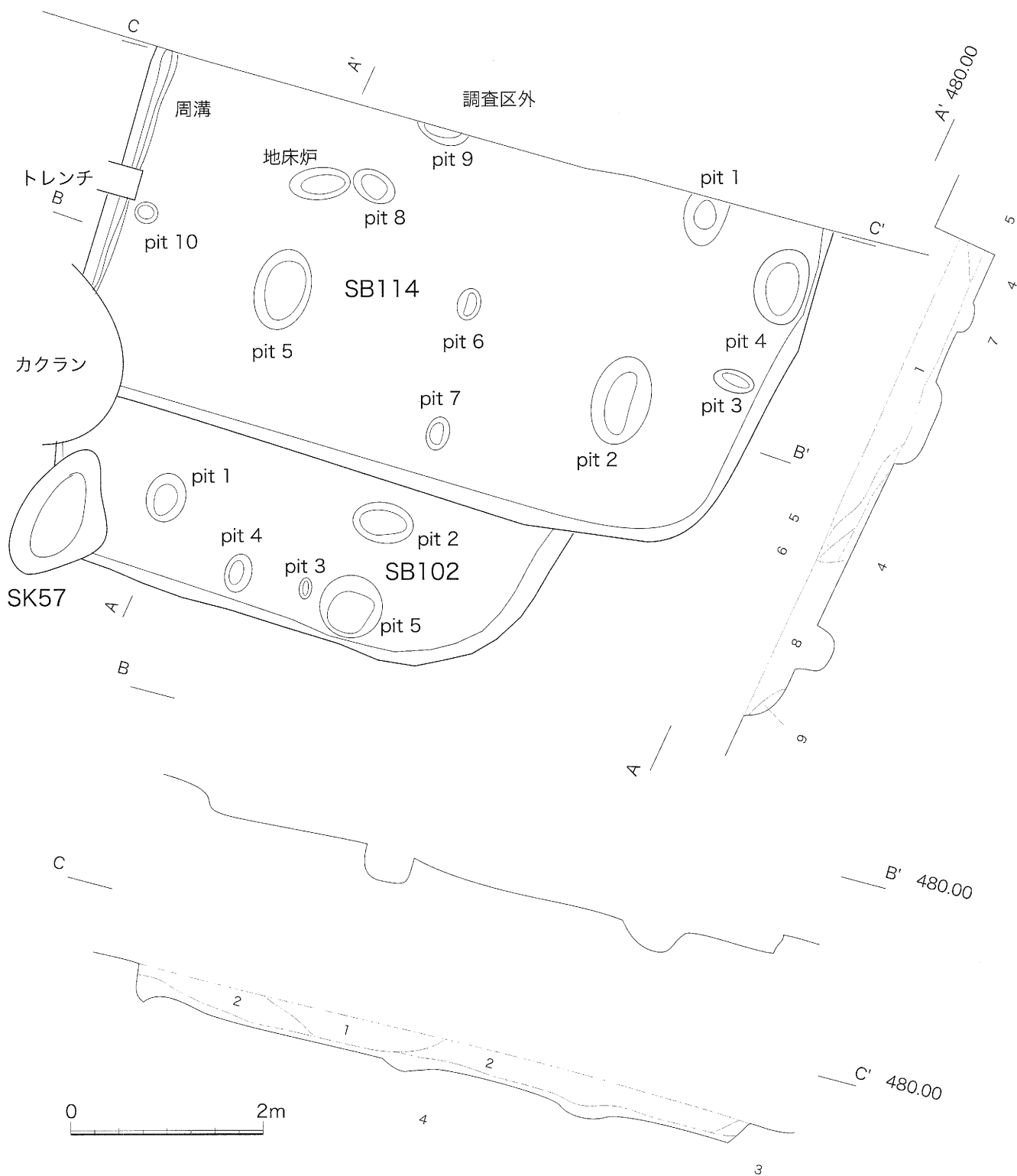
第 8 图 第 99・100 号竖穴建物迹実测图 (1) (60:1)



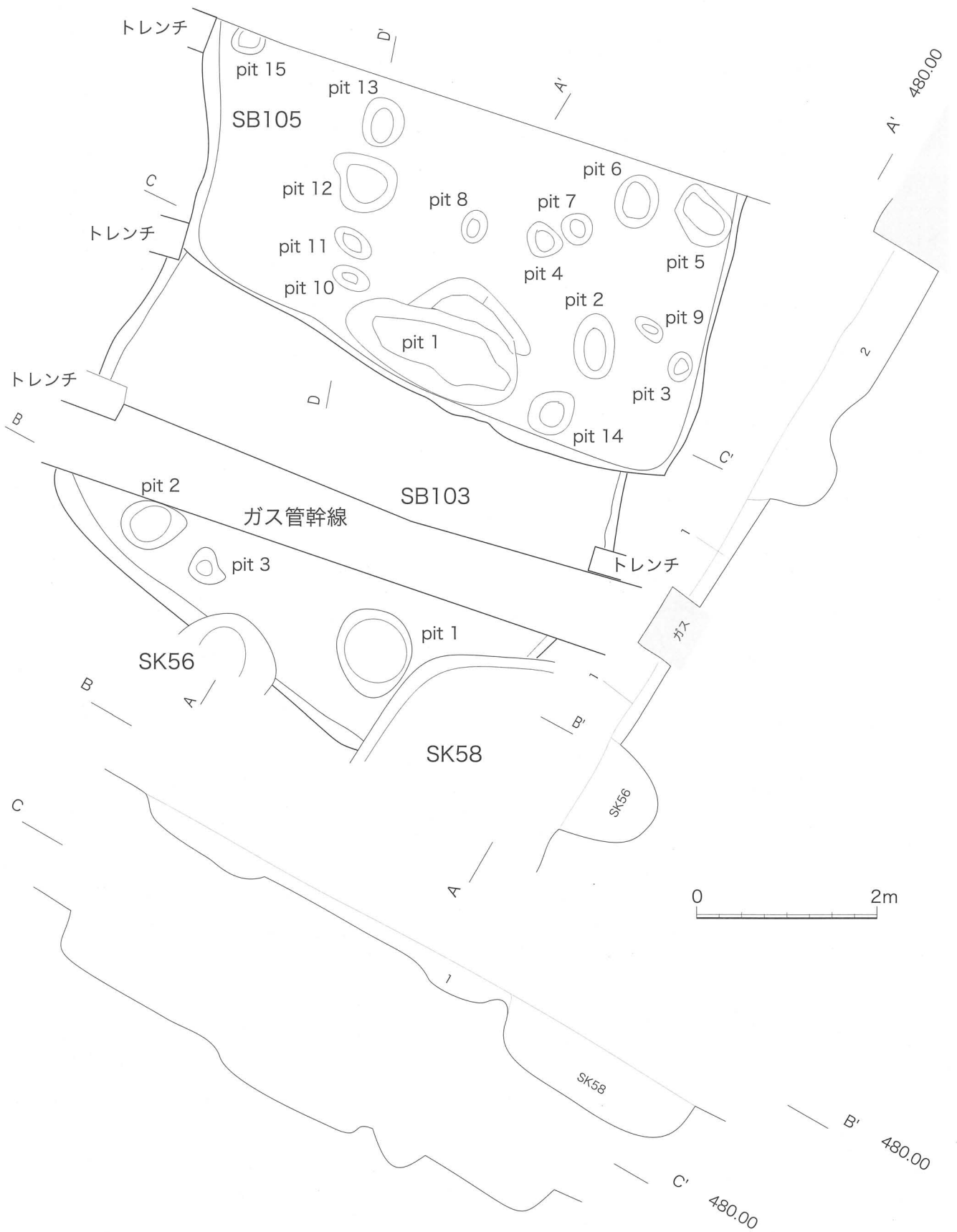
第9図 第99・100号竪穴建物跡実測図(2) (60:1)



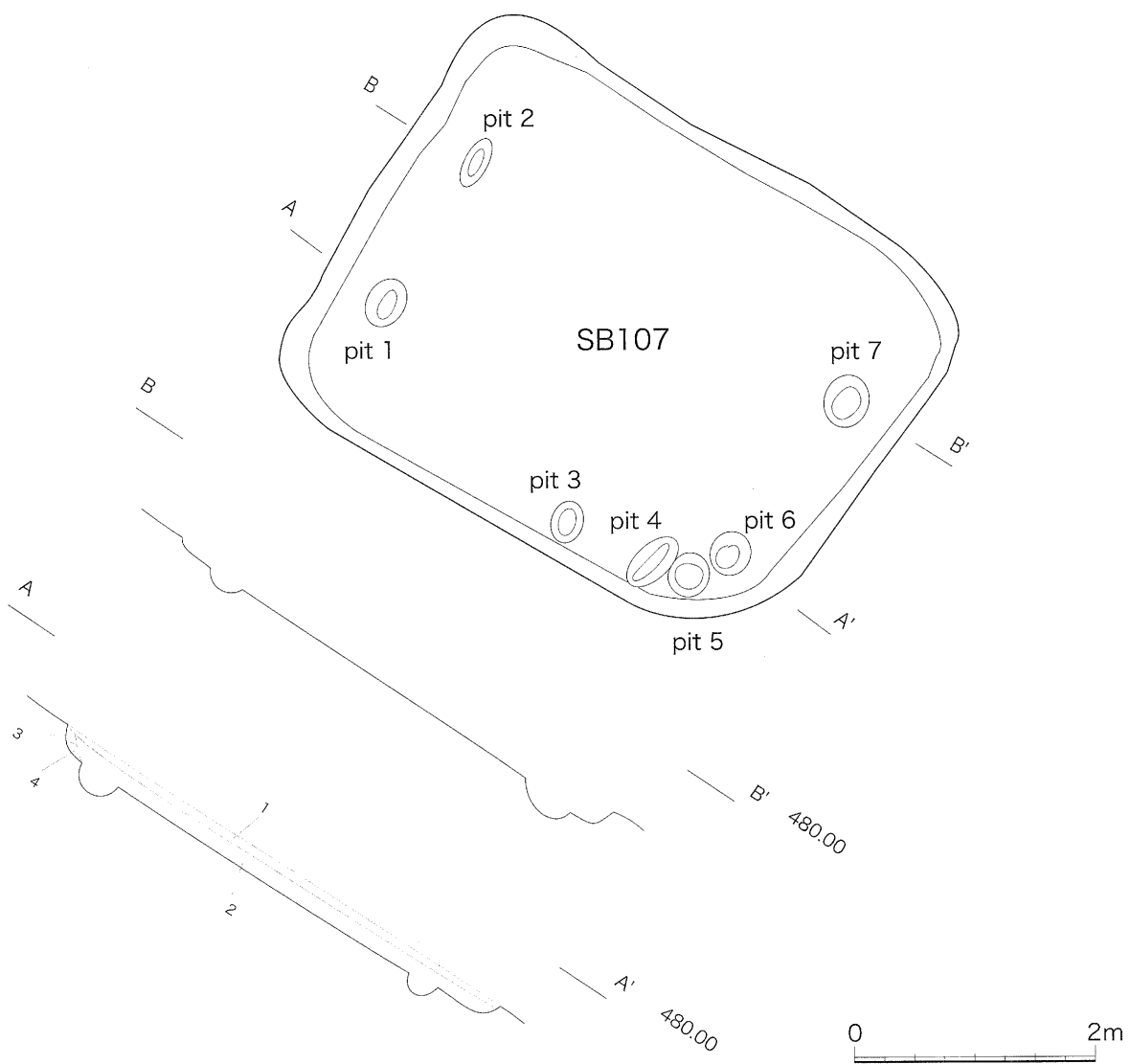
第10図 第106号竪穴建物跡実測図 (60:1)



第 11 図 第 102・114 号竪穴建物跡実測図 (60:1)



第12図 第103・105号竪穴建物跡実測図 (60:1)



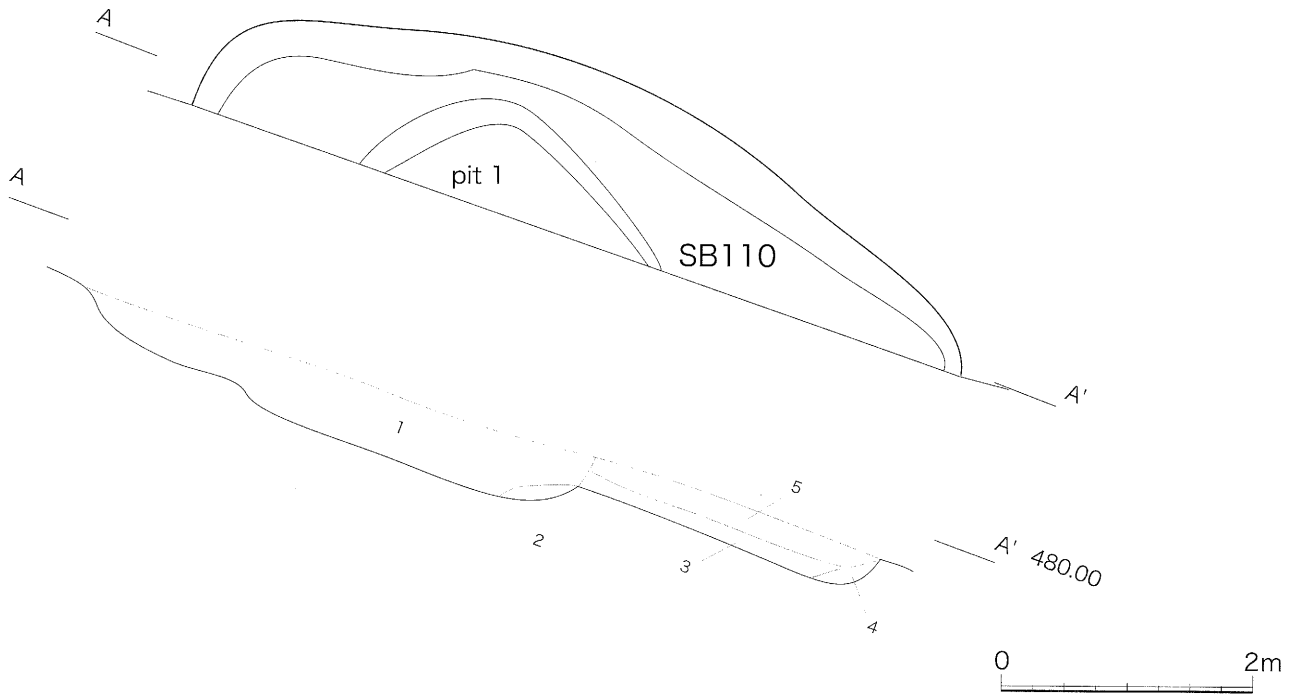
第 13 图 第 107 号竖穴建物跡実測図 (60:1)



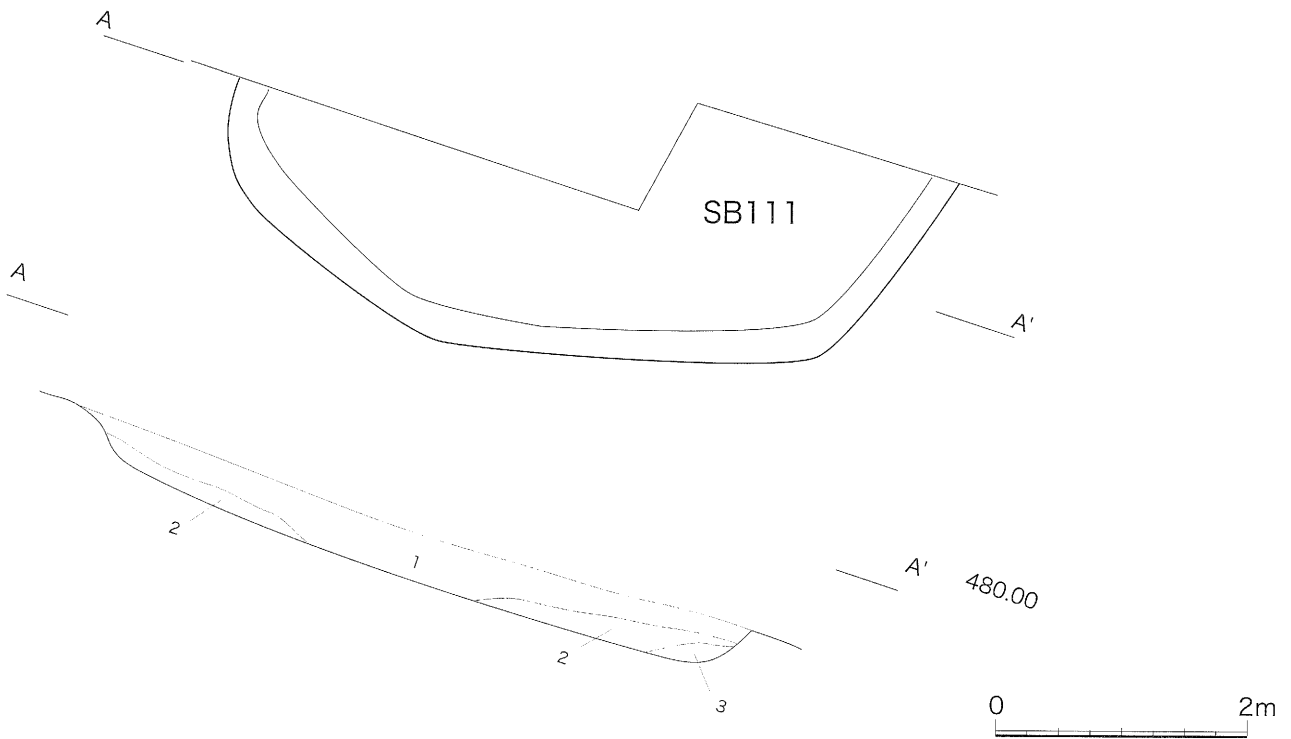
第14図 第108・109号竪穴建物跡実測図(1) (60:1)



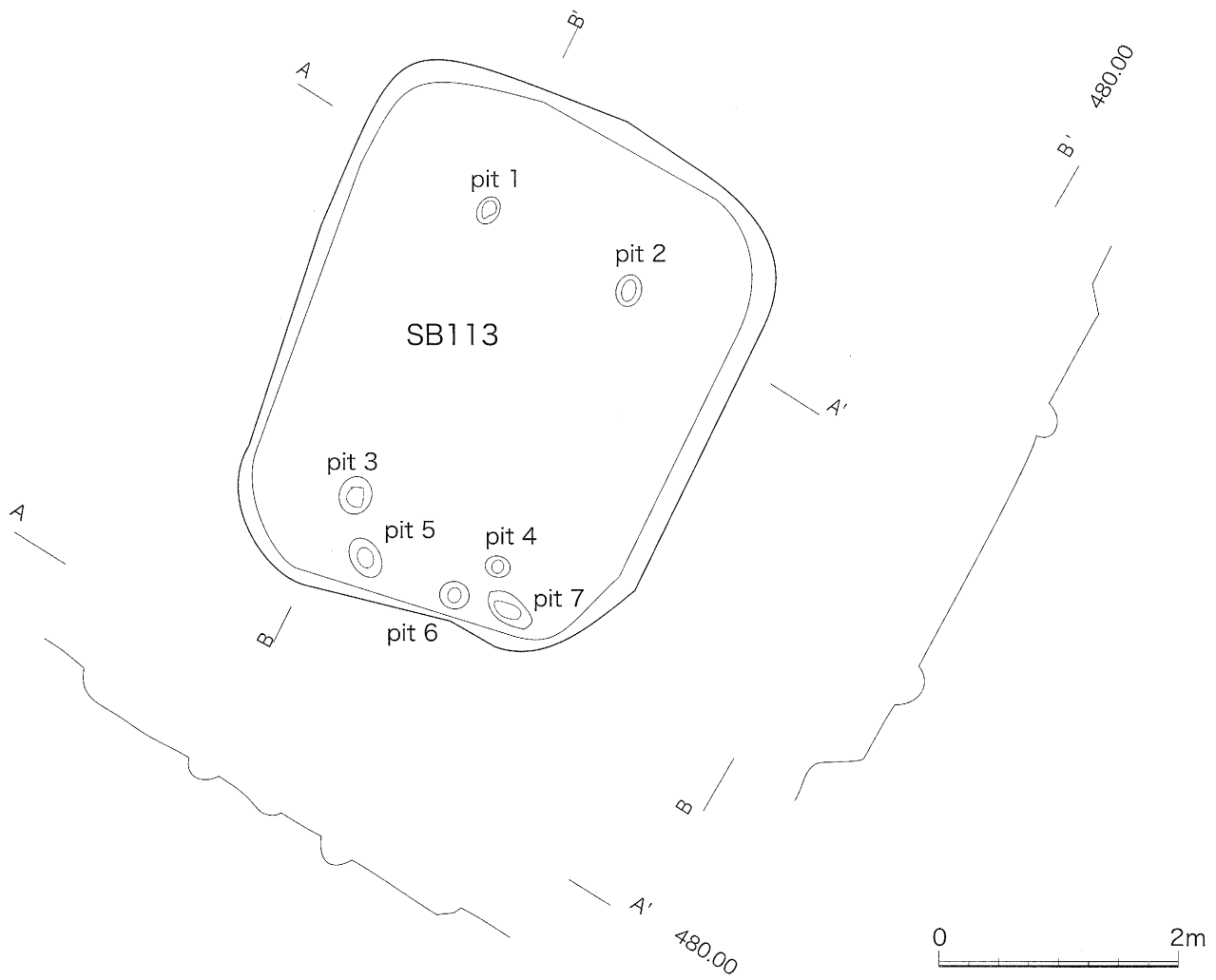
第 15 图 第 108 · 109 号竖穴建物跡実測图 (2) (60:1)



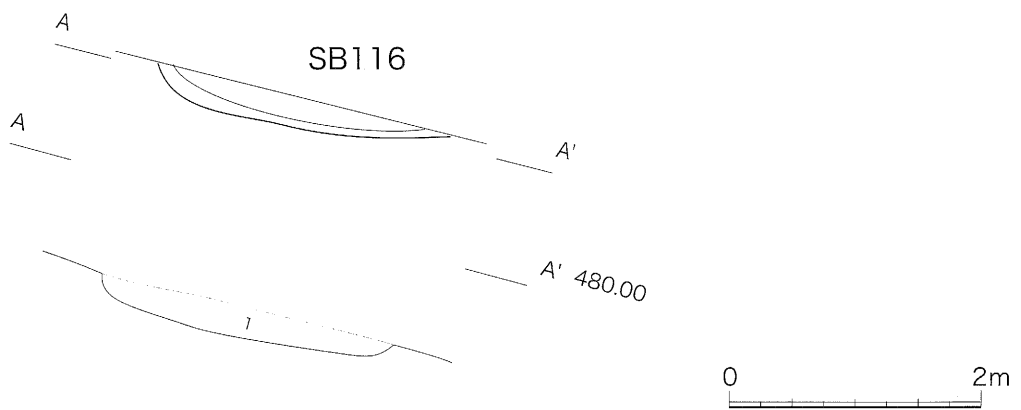
第 16 図 第 110 号竖穴建物跡実測図 (60:1)



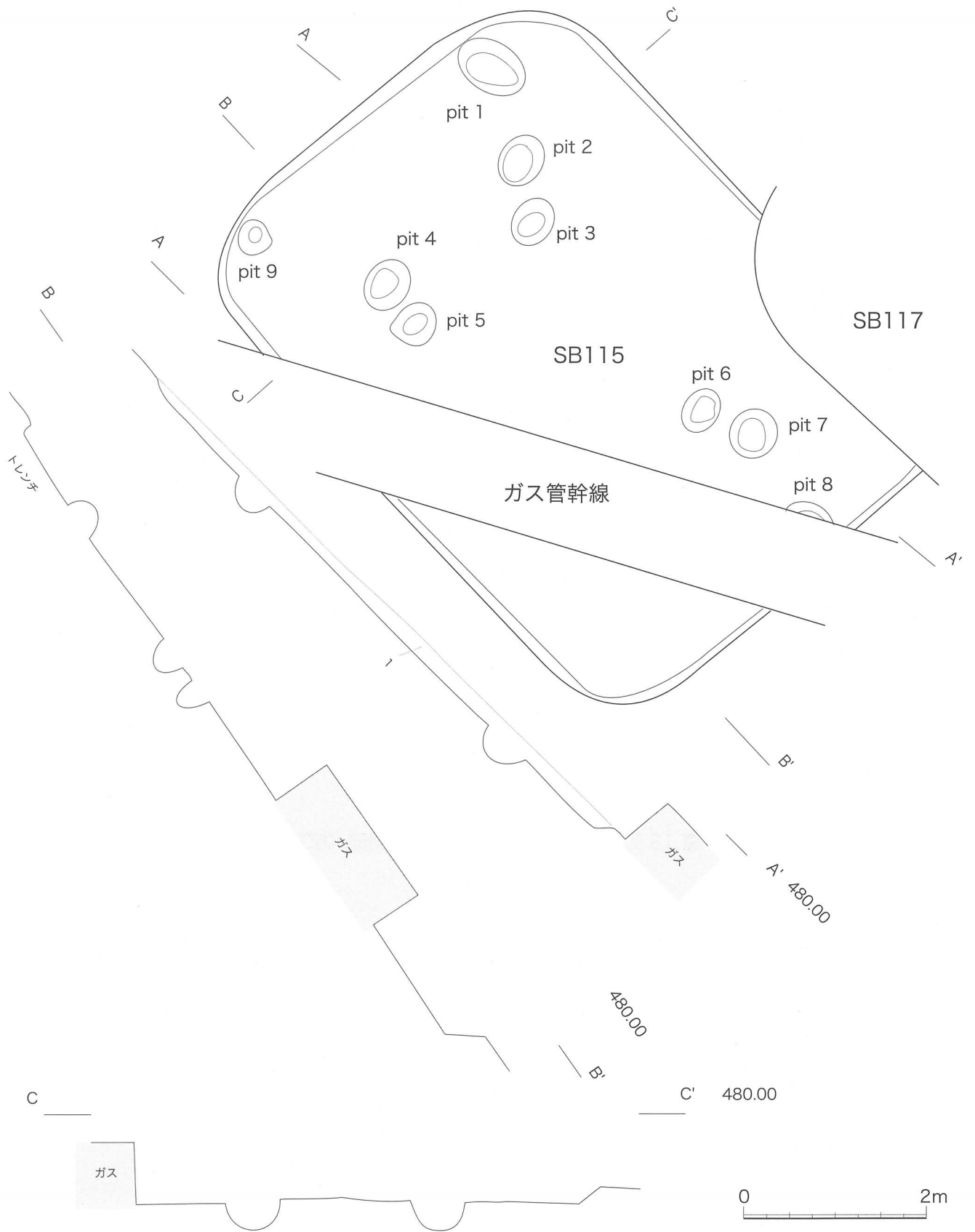
第 17 図 第 111 号竖穴建物跡実測図 (60:1)



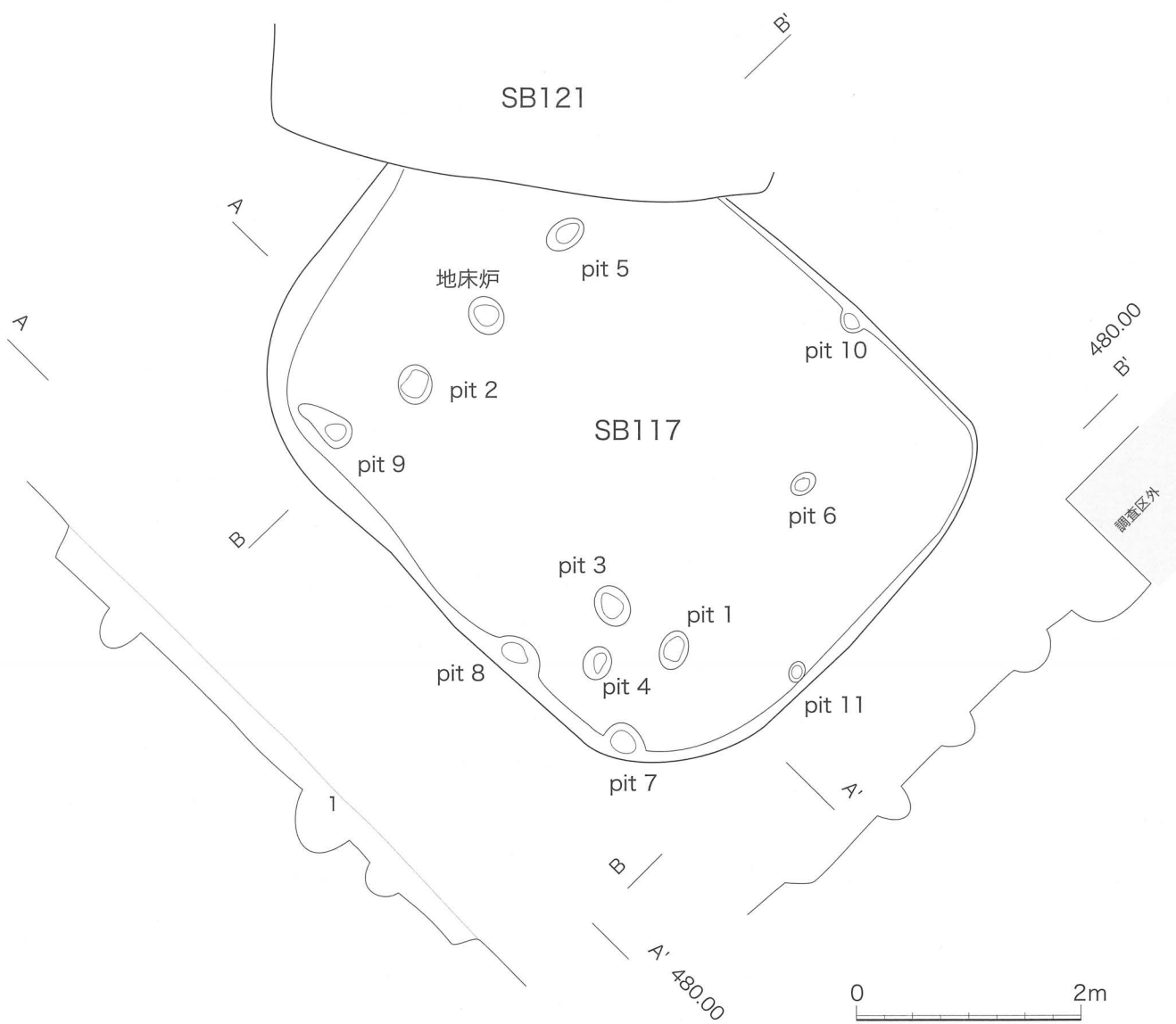
第 18 図 第 113 号竖穴建物跡実測図 (60:1)



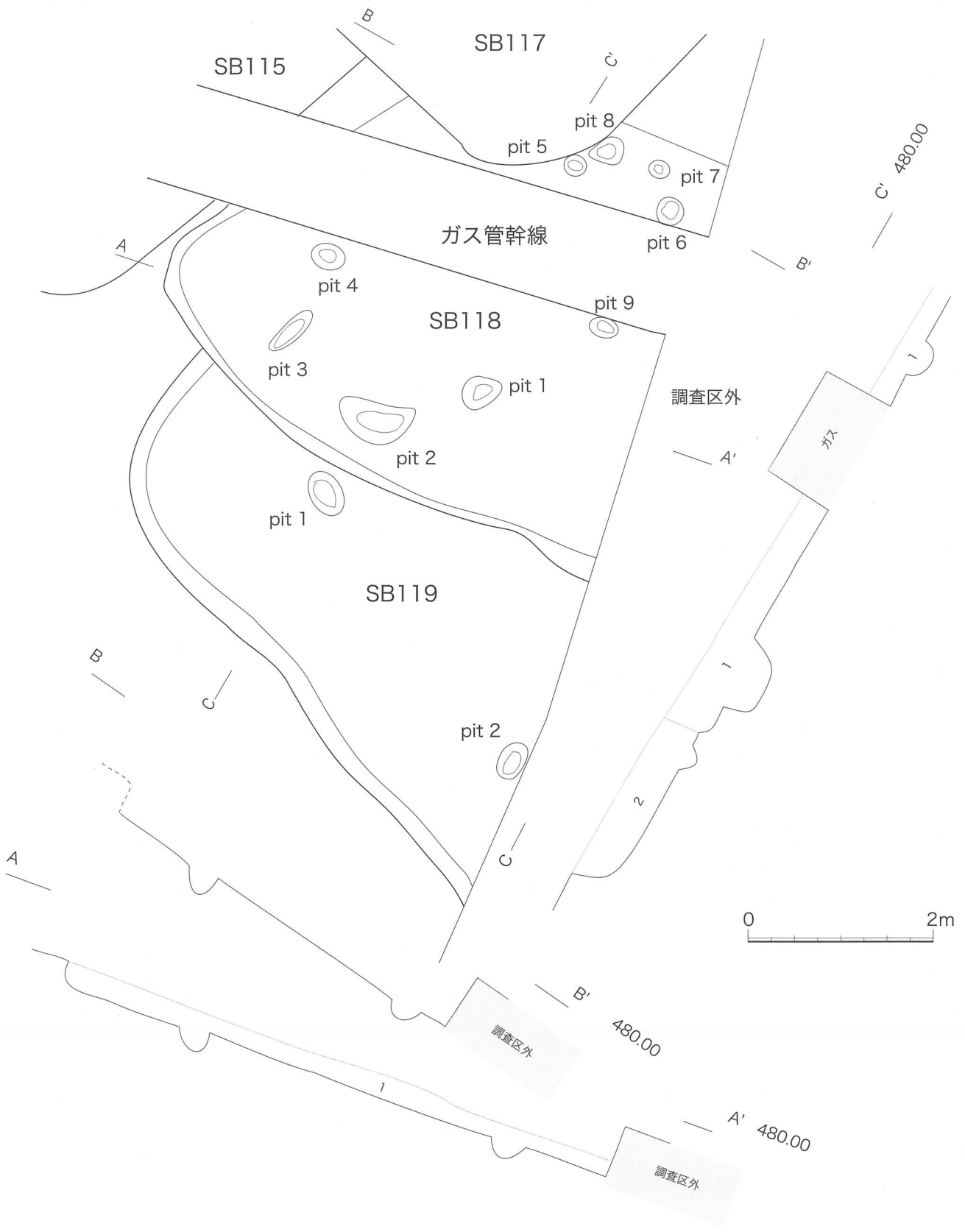
第 19 図 第 116 号竖穴建物跡実測図 (60:1)



第 20 図 第 115 号竪穴建物跡実測図 (60:1)



第 21 図 第 117 号竪穴建物跡実測図 (60:1)



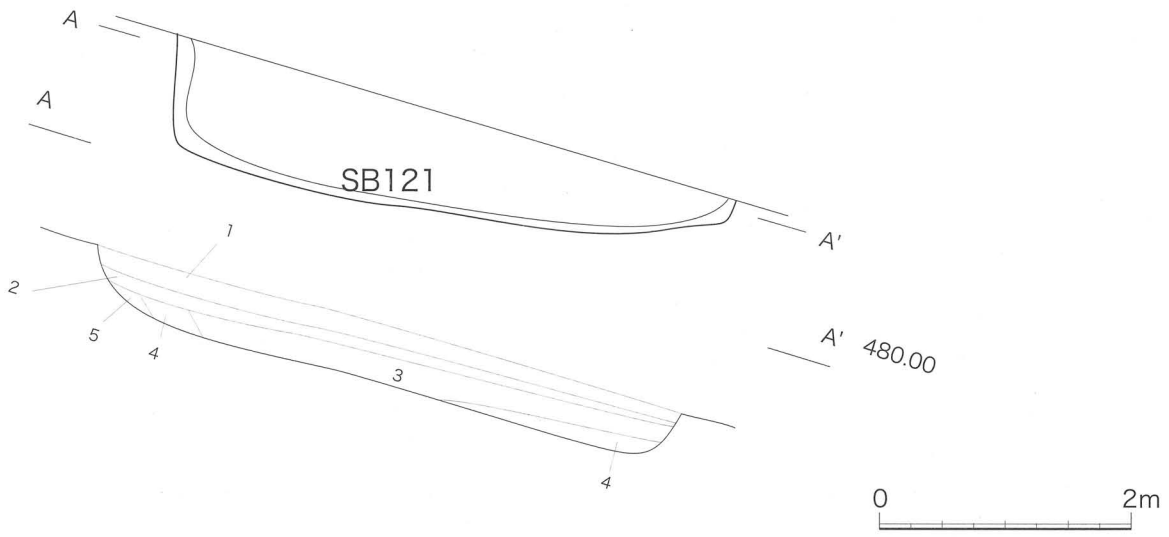
第 22 図 第 118・119号竪穴建物跡実測図 (60:1)



第 23 图 第 120 号竖穴建物跡実測图 (60:1)



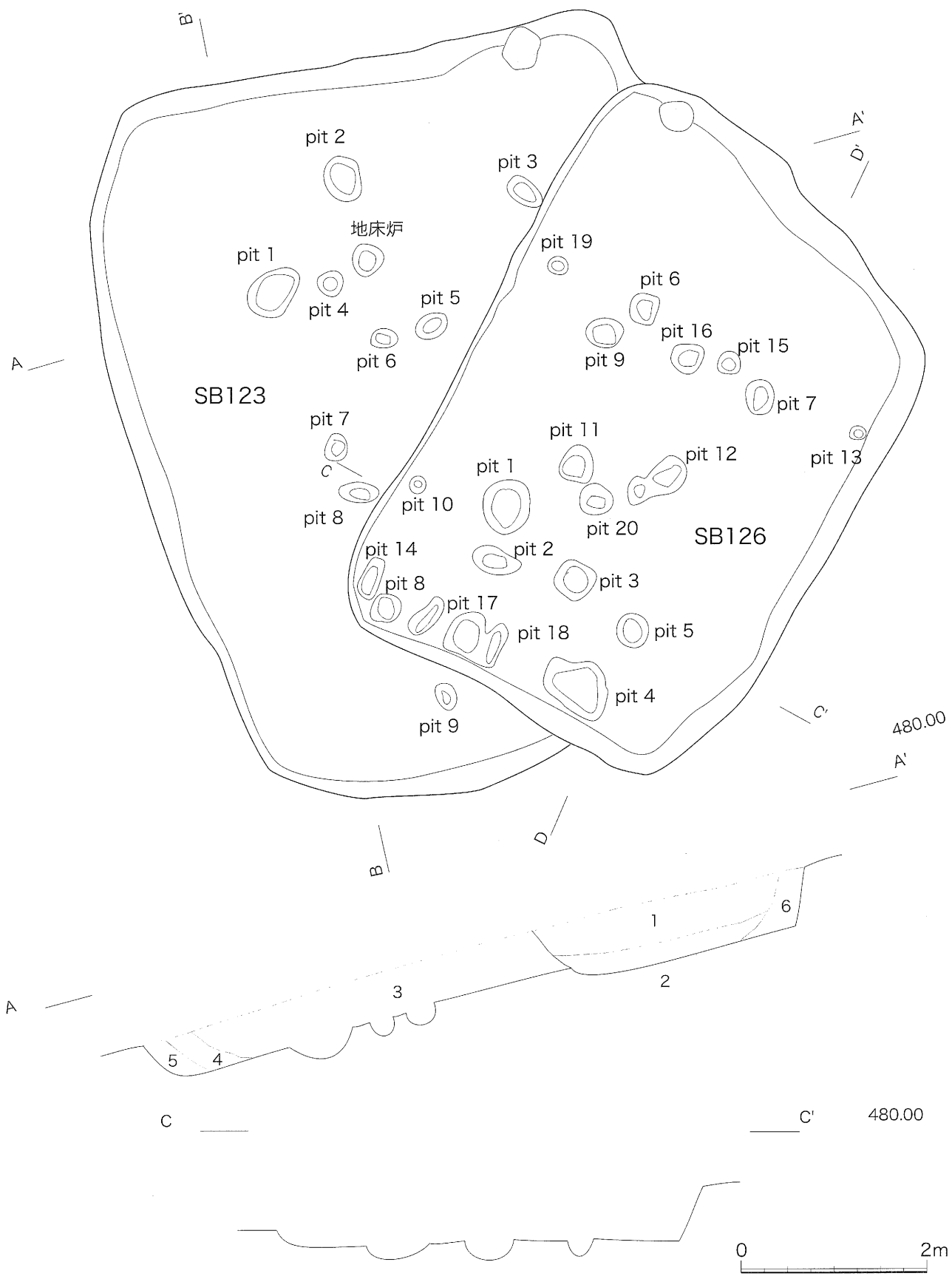
第 24 図 第 120 号竖穴建物跡 (集石) 実測図 (60:1)



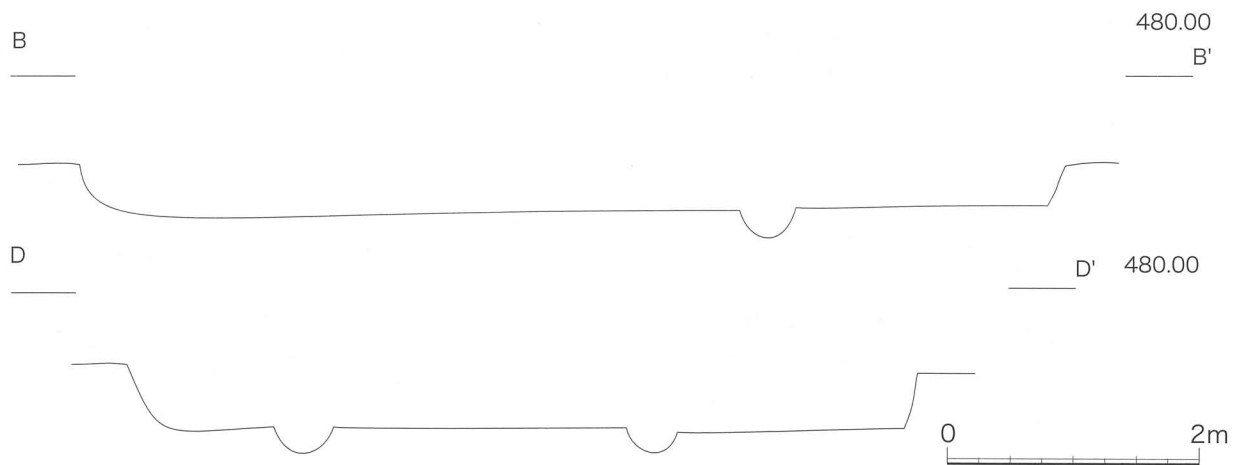
第 25 図 第 121 号竖穴建物跡実測図 (60:1)



第 26 図 第 122 号竖穴建物跡実測図 (60:1)



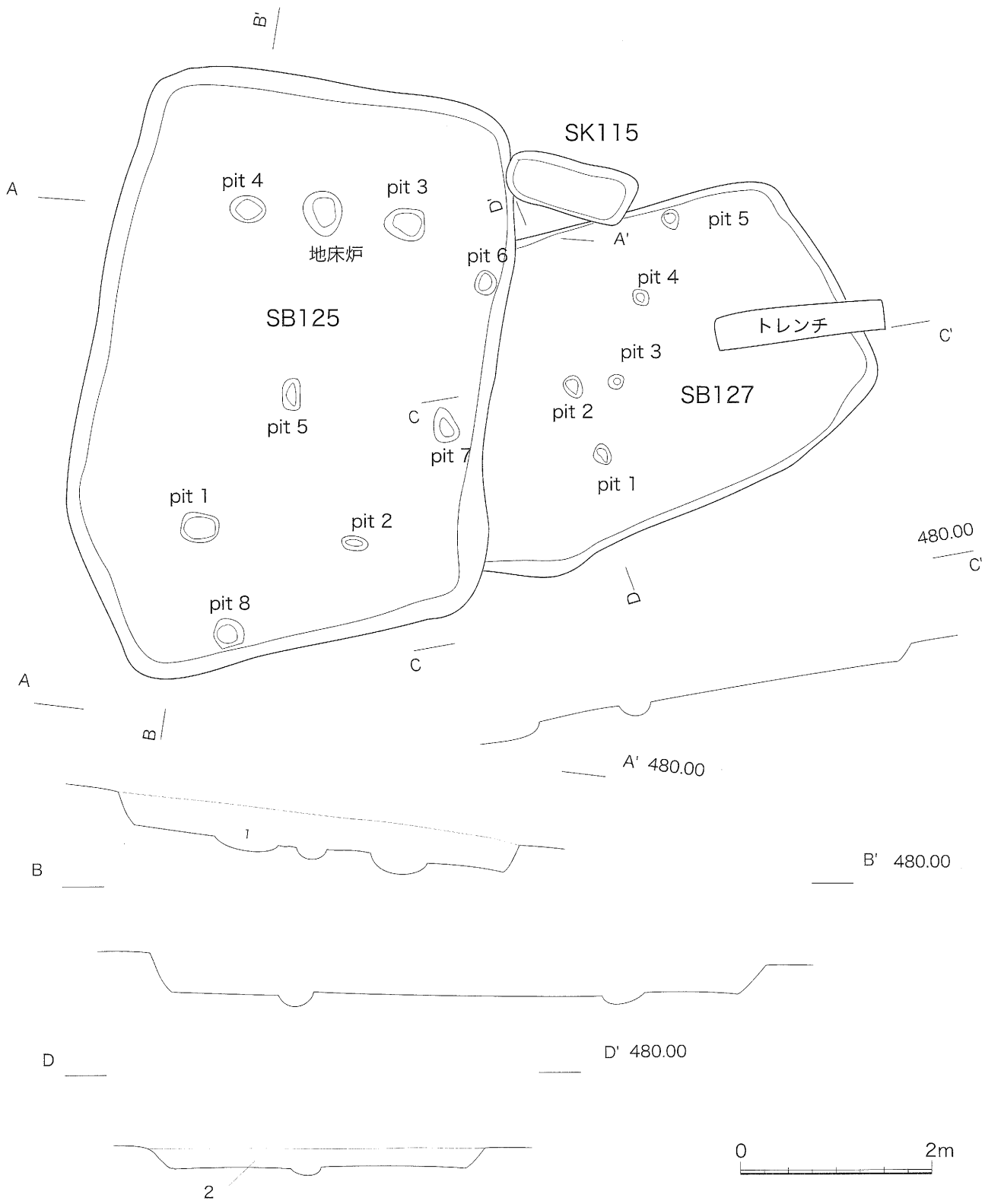
第 27 图 第 123·126 号竖穴建物迹实测图 (1) (60:1)



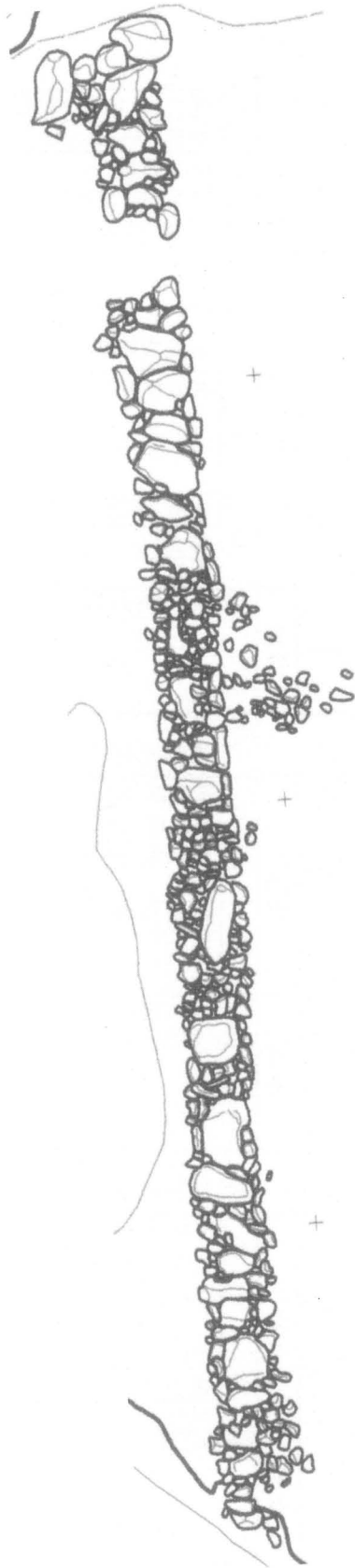
第 28 图 第 123 · 126 号竖穴建物跡実測図 (2) (60:1)



第 29 图 第 124 号竖穴建物跡実測図 (60:1)



第 30 図 第 125・127 号竪穴建物跡実測図 (60:1)



第 31 図 第 2 号配石溝 (SD06) 実測図 (50:1)

第 99 号竪穴建物跡 遺構実測図 (第 8 .9 図)

遺物実測図 (第 32 図)

位置	グリッド	S35E47,S35E48,S35E49,S36E47,E36E48, S36E49,S36E50,S37E48,S37E49,S37E50		その他	ピット 主柱穴 pit 1,2,3,4 出入口 pit 5,6 その他 pit 7,8,9,,10,11
	床面標高	470.11~470.27m			
規模	規模	9.1×4.6m	床面積	41.5 m ²	炉 位置 北側主柱穴間 規模 0.48×0.44×0.10m 覆土 1) 5YR2/2 黒褐、2) 2.5YR4/8 赤褐 形態 浅い掘り込み
	壁高	0.26~0.29m			
覆土	1 7.5YR3/3 暗褐 ローム粒、小石を含む、しまりあり				備考 SB100を切る pit7の底部に礎石状の平石を検出 床面堅緻となる
形態	平面形態	隅丸長方形	主軸方位	N 53° W	
	その他	出入口を東壁に想定			

第 100 号竪穴建物跡 遺構実測図 (第 8 .9 図)

遺物実測図 (第 37 図)

位置	グリッド	S37E48,S37E49,S37E50,S38E48,S38E49, S38E50		その他	ピット 検出せず
	床面標高	470.26m			
規模	規模	不明	床面積	(4.5) m ²	炉 位置 不明 規模 覆土 形態
	壁高	0.38m			
覆土	2 7.5YR4/6 褐 しまりあり、粘性あり				備考 SB99に切られる
形態	平面形態	不明	主軸方位	不明	
	その他				

第 102 号竪穴建物跡 遺構実測図 (第 11 図)

遺物実測図 (第 33 図)

位置	グリッド	S34E49,S34E50,S35E49,S34E50,S34E51		その他	ピット 主柱穴 pit 1,2 出入口 pit 3,4 その他 pit 5
	床面標高	469.98~470.12m			
規模	規模	2×5.2m	床面積	(8.3) m ²	炉 位置 不明 規模 覆土 形態
	壁高	0.28~0.35m			
覆土	8 7.5YR4/6 褐 しまりあり、粘性あり				備考 SB114に切られる 床面堅緻となる
	9 7.5YR3/4 暗褐 しまりあり、粘性あり				
形態	平面形態	(隅丸長方形)	主軸方位	(N 15° E)	
	その他	出入口を南壁に想定			

第 103 号竪穴建物跡 遺構実測図 (第 12 図)

遺物実測図 (第 34 図)

位置	グリッド	S34E53,S34E54,S35E53,S35E54,S35E55, S36E54,S36E55		その他	ピット 主柱穴 pit 1,2 その他 pit 3,4
	床面標高	470.13~470.33m			
規模	規模	不明	床面積	(18.6) m ²	炉 位置 不明 規模 覆土 形態
	壁高	0.10~0.17m			
覆土	1 7.5YR3/2 黒褐 しまりあり、粘性あり、ローム粒を含む、赤色粒、炭化物粒を含む				備考 SB105,SK56,SK58に切られる
形態	平面形態	(隅丸長方形)	主軸方位	不明	
	その他				

第 3 表 竪穴建物跡観察表 (その 1)

第 105 号竪穴建物跡

遺構実測図 (第 12 図)

遺物実測図 (第 39.40 図)

位置	グリッド	S33E53,S33E54,S34E53,S34E54,S34E55 S35E55			その他	ピット	主柱穴 pit (2),6 出入口 pit 3 その他 pit 1,4,5,6,7,8,9,10,11,12,13,14		
	床面標高	469.93~470.03m					炉	位置	不明
規模	規模	6.1×?m	床面積	(18.0) m ²	覆土	覆土			
	壁高	0.34~0.39m				形態			
覆土	2 7.5YR3/4 暗褐色 しまりあり、粘性あり、 ローム粒を含む、小石を含む				形態	SB103を切る pit 2 は土器を2個体納めた(正置、横置)施設か?			
形態	平面形態	(隅丸長方形)	主軸方位	N 68° W					
その他	出入口を東壁に想定								

第 106 号竪穴建物跡

遺構実測図 (第 10 図)

遺物実測図 (第 35 図)

位置	グリッド	S38E52,S39E51,S39E52,S39E53			その他	ピット	検出せず		
	床面標高	469.97~470.20m					炉	位置	不明
規模	規模	不明	床面積	(5.2) m ²	覆土	覆土			
	壁高	0.15~0.25m				形態			
覆土	1 5YR3/1 黒褐 しまりあり、粘性あり				備考	SK60に切られる			
	2 7.5YR3/3 暗褐 しまりあり、粘性あり								
	3 7.5YR4/4 褐 しまりあり、粘性あり								
形態	平面形態	(隅丸長方形)	主軸方位	不明					
	その他								

第 107 号竪穴建物跡

遺構実測図 (第 13 図)

遺物実測図 (第 36 図)

位置	グリッド	S37E52,S37E53,S38E52,S38E53			その他	ピット	主柱穴 pit 1,2,6,7 その他 pit 3,4,5		
	床面標高	470.12~470.22m					炉	位置	不明
規模	規模	4.8×3.75m	床面積	16.7 m ²	覆土	覆土			
	壁高	0.17~0.21m				形態			
覆土	1 5YR4/2 灰褐 しまりあり、粘性あり、 小石やローム粒を多く含む				備考				
	2 5YR4/3 にぶい赤褐 しまりあり、粘性あり、 赤色粒や炭化物粒を多く含む								
	3 5YR5/6 明赤褐色 しまりあり、粘性あり								
	4 5YR5/4 にぶい赤褐 しまりあり、粘性あり								
形態	平面形態	隅丸長方形	主軸方位	N 57° W					
	その他								

第 108 号竪穴建物跡

遺構実測図 (第 14.15 図)

遺物実測図 (第 41.42 図)

位置	グリッド	S37E57,S37E58,S38E57,S38E58,S39E57, S39E58			その他	ピット	主柱穴 pit 1,2 出入口 pit 3 その他 pit 4,5,6,7,8		
	床面標高	469.92~470.09m					炉	位置	中央西寄り
規模	規模	6.0×5.0m	床面積	(15.6) m ²	覆土	覆土		1) 7.5YR3/3 暗褐、2) 5YR2/2 黒褐、 3) 2.5YR4/8 赤褐	
	壁高	0.30~0.37m				形態	浅い掘り込み		
覆土	1 7.5YR3/2 黒褐 しまりあり、粘性あり				備考	東南隅から完形土器が3個体出土 床面堅緻となる SB109に切られる			
	2 5YR5/3 にぶい赤褐 しまりあり、粘性あり、 ローム粒、炭化物粒、礫を含む								
	3 5YR4/4 にぶい赤褐 しまりあり、粘性あり、 ローム粒、炭化物粒、小石を多く含む								
	4 5YR5/4 にぶい赤褐 しまりあり、粘性あり								
形態	平面形態	隅丸長方形	主軸方位	ほぼ真北					
	その他	出入口を南壁に想定							

第 4 表 竪穴建物跡観察表 (その 2)

第 109 号 竪穴建物跡

遺構実測図 (第 14.15 図)

遺物実測図 (第 43.44 図)

位置	グリッド	S35E56,S35E57,S35E58,S35E59,S36E57, S36E58,S36E59,S37E57,S37E58,S37E59, S38E57,S38E58		ピット	主柱穴 pit 1,2,3,4 出入口 pit 5,6 その他 pit 7,8,9,10,11			
	床面標高	469.75~469.87m			位置	北側主柱穴間に4基重複 ①~④ 中央西寄りに2基 ⑤~⑥		
規模	規模	9.2×6.6m	床面積	58.6 m ²		規模	① 0.55×0.40×0.12m ② 0.53×0.38×0.05m ③ ?×0.40×0.09m ④ ?×?×0.07m ⑤ 0.34×0.23×0.02m ⑥ 0.24×0.21×0.01m	
	壁高	0.44~0.46m		覆土	1) 10YR5/6 黄褐、2) 7.5YR3/3 暗褐、 3) 5YR2/2 黒褐			
覆土	1 5YR3/4 暗赤褐 しまりあり、粘性あり、 ローム粒、炭化物粒を含む				形態	① 炉縁石3個残存、② 炉縁石1個残存 ③ 炉縁石なし、④ 炉縁石なし ⑤ 炉縁石1個残存、⑥ 炉縁石なし ⑤、⑥は掘り窪みわずか		
	2 7.5YR4/6 褐 しまりあり、粘性あり ロームブロック 炭化物粒を含む					備考	SB108を切る 床面堅緻となる	
	3 7.5YR3/4 暗褐 しまりあり、粘性あり ローム粒 炭化物粒を多く含む							
	4 7.5YR3/3 暗褐 しまりあり、粘性あり ローム粒 炭化物を多く含む 小石を含む							
	5 7.5YR4/3 褐 しまりあり、粘性あり ローム粒 炭化物粒を多く含む							
	6 5YR3/3 暗赤褐 しまりあり、粘性あり ローム粒 炭化物粒を多く含む							
	7 7.5YR3/2 黒褐 しまりややあり、粘性あり、 こぶし大の石を含む							
形態	平面形態	隅丸長方形	主軸方位	N 14° W				
	その他	出入口を南壁に想定						

第 110 号 竪穴建物跡

遺構実測図 (第 16 図)

遺物実測図 (第 38 図)

位置	グリッド	S40E57,A40E58,S41E58		ピット	その他 pit 1		
	床面標高	470.23~470.39m			位置	不明	規模
規模	規模	不明		床面積		(5.7) m ²	
	壁高	0.06m		覆土			
覆土	1 5YR4/2 灰褐 しまりあり、粘性あり、含 炭化物粒				形態		
	2 5YR3/3 暗赤褐 しまりあり、粘性あり、含 炭化物粒						
	3 2.5YR3/2 暗赤褐 しまりあり、粘性あり						
	4 5YR3/2 暗赤褐 カクラン						
	5 7.5YR3/3 暗褐						
形態	平面形態	不明		主軸方位	不明		
	その他						
				備考	大型のピット状の施設が存在するが、全容は不明		

第 111 号 竪穴建物跡

遺構実測図 (第 17 図)

遺物実測図 (第 45 図)

位置	グリッド	S34E56,S34E57,S34E58		ピット	検出せず		
	床面標高	469.94~470.08m			位置	不明	規模
規模	規模	不明		床面積		(7.4) m ²	
	壁高	0.25~0.32m		覆土			
覆土	1 7.5YR3/3 暗褐 しまりあり、粘性あり、 小石やローム粒を多量に含む				形態		
	2 7.5YR4/3 褐 しまりあり、粘性あり						
	3 7.5YR4/4 褐 しまりあり、粘性あり						
形態	平面形態	不明		主軸方位	不明		
	その他						
				備考	第3次調査 第72号住居址 と同一の遺構か？		

第 5 表 竪穴建物跡観察表 (その 3)

第 113 号 竪穴建物跡

遺構実測図 (第 18 図)

遺物実測図 (第 47.48 図)

位置	グリッド	S39E59,S39E60,S40E59,S40E60		
	床面標高	470.15~470.22m		
規模	規模	4.4 × 3.8m	床面積	15.5 m ²
	壁高	0.19~0.26m		
覆土	1	5YR4/3 にぶい赤褐 しまりあり、粘性あり		
	2	5YR4/4 にぶい赤褐 しまりあり、粘性あり、炭化物 焼土粒を含む		
	3	2.5YR3/2 暗赤褐 しまりなし、粘性なし、炭化物 焼土粒を多量に含む		
	4	2.5YR4/6 赤褐 焼土		
	5	2.5YR2/3 極暗赤褐 しまりなし、粘性なし、炭化物粒 焼土粒を多く含む		
	6	2.5YR2/2 極暗赤褐 しまりなし、粘性なし、炭化物粒 焼土粒を多く含む		
	7	2.5YR4/4 にぶい赤褐 しまりなし、粘性なし、炭化物粒 焼土粒を多く含む		
	8	2.5YR4/4 暗赤褐 しまりなし、粘性なし、炭化物粒 焼土粒を多く含む		
	9	2.5YR2/1 赤黒 炭化物主体の層、焼土粒を多く含む		
形態	平面形態	隅丸長方形	主軸方位	N 21° E
	その他			
その他	ピット	主柱穴 pit 1,2,5		
		出入口 pit 4		
	その他 pit 3,6,7,8,9			
炉	位置	北側主柱穴間	規模	
	覆土			
備考	形態	浅い掘り込み、炉縁石あり		
	覆土中に土器が混じる集石あり 床面堅緻となる			

第 114 号 竪穴建物跡

遺構実測図 (第 11 図)

遺物実測図 (第 46 図)

位置	グリッド	S33E49,S33E50,S34E49,S34E50,S34E51,S34E52,S35E50,S35E51		
	床面標高	469.98~470.09m		
規模	規模	7.3 × 2m	床面積	(25.4) m ²
	壁高	0.27~0.29m		
覆土	1	7.5YR5/6 明褐 しまりあり、粘性あり、礫やロームブロックを多く含む		
	2	5YR5/4 にぶい赤褐 しまりあり、砂や石を含む		
	3	7.5YR3/4 暗褐 しまりあり、硬化		
	4	5YR3/6 暗赤褐 しまりあり、粘性あり		
	5	5YR4/4 にぶい赤褐 しまりあり、粘性あり		
	6	7.5YR3/2 黒褐 しまりなし、粘性あり		
形態	平面形態	隅丸長方形	主軸方位	N 72° W
	その他	出入口を南壁に想定		
その他	ピット	主柱穴 pit 1,2,3,4		
		出入口 pit 5,6		
	その他 pit 7			
炉	位置	(北側主柱穴間)	規模	0.60 × 0.32 × 0.06m
	覆土	7) 2.5YR4/8 赤褐		
備考	形態	ごく浅い掘り込み		
	SB102を切る 一部に周溝と思われる施設を検出 床面堅緻となる			

第 115 号 竪穴建物跡

遺構実測図 (第 19 図)

遺物実測図 (第 49 図)

位置	グリッド	S35E61,S36E60,S36E61,S36E62,S37E60,S37E61,S37E62,S37E63,S38E61,S38E62		
	床面標高	469.96~470.11m		
規模	規模	7.1 × 5.1m	床面積	(32.8) m ²
	壁高	0.11~0.28m		
覆土	1 7.5YR3/3 暗褐 しまりあり、粘性あり、ローム粒や炭化物粒を含む			
形態	平面形態	隅丸長方形	主軸方位	N 44° W
	その他	出入口を南壁に想定		
その他	ピット	主柱穴 pit 2,4,7		
		出入口 pit 8		
	その他 pit 1			
炉	位置	不明	規模	
	覆土	控え柱? pit 3,5,6		
備考	形態			
	SB117,SB118に切られる 床面堅緻となる			

第 6 表 竪穴建物跡観察表 (その 4)

第 116 号 竪穴建物跡 遺構実測図 (第 19 図)

位置	グリッド	S35E60			その他	ピット	検出せず		
	床面標高	470.06m							
規模	規模		床面積	(0.7) m ²	炉	位置		規模	
	壁高	0.16m				覆土		形態	
覆土	1 7.5YR3/3 暗褐 しまりあり、粘性あり								
形態	平面形態	不明	主軸方位	不明	備考	第3次調査 第63号住居址 と同一の遺構か？			
	その他								

第 117 号 竪穴建物跡 遺構実測図 (第 20 図) 遺物実測図 (第 50.51.52 図)

位置	グリッド	S36E62,S36E63,S36E64,S37E62,S37E63,S37E63			その他	ピット	主柱穴 pit 1,2,5,6 その他 pit 3,4,7,8,9,10,11 ※壁面に接する pit 7,8,9,10,11は柱穴か？		
	床面標高	469.84~469.99m							
規模	規模	5.9 × 4.2m	床面積	(21.7) m ²	炉	位置	北側主柱穴間	規模	0.45 × 0.26 × 0.10m
	壁高	0.15~0.20m				覆土	1) 5YR2/2 黒褐		
覆土	1 7.5YR3/3 暗褐 しまりあり、粘性あり								
形態	平面形態	隅丸長方形	主軸方位	N 48° W	備考	一部に周溝と思われる施設を検出 SB115を切る SB118、121に切られる 床面堅緻となる			
	その他								

第 118 号 竪穴建物跡 遺構実測図 (第 21 図) 遺物実測図 (第 53.54 図)

位置	グリッド	S37E62,S37E63,S37E64,S38E62,S38E63,S38E64,S39E63			その他	ピット	その他 pit 1,2,3,4,5,6,7,8,9 ※pit 3 は小型甕が収納された状態を保持していた		
	床面標高	470.06~470.21m							
規模	規模	? × 4.5m	床面積	(21.5) m ²	炉	位置	北寄り	規模	0.44 × 0.40 × 0.10m
	壁高	0.14~0.15m				覆土	1) 5YR2/2 黒褐		
覆土	1 2.5YR2/1 赤黒 炭化物主体の層、 焼土粒を多く含む								
形態	平面形態	(隅丸長方形)	主軸方位	N 52° W	備考	SB115、SB117、SB119を切る 遺構内から多量の炭化材を検出			
	その他								

第 119 号 竪穴建物跡 遺構実測図 (第 21 図) 遺物実測図 (第 55.56 図)

位置	グリッド	S38E62,S39E62,S39E63,S40E63			その他	ピット	主柱穴 pit 1,2		
	床面標高	470.06~470.21m							
規模	規模		床面積	(13.3) m ²	炉	位置	不明	規模	
	壁高	0.28~0.36m				覆土		形態	
覆土	2 7.5YR3/3 暗褐 しまりあり、粘性あり								
形態	平面形態	(隅丸長方形)	主軸方位	不明	備考	SB118に切られる			
	その他								

第 7 表 竪穴建物跡観察表 (その 5)

第 120 号竪穴建物跡

遺構実測図 (第 22.23 図)

遺物実測図 (第 57.58 図)

位置	グリッド	S40E61,S40E62,S41E60,S41E61,S41E62			その他	ピット	主柱穴 pit 1,2,3,4 出入口 pit 5,6 その他 pit 7			
	床面標高	470.01~470.14m								
規模	規模	5.1×4.0m	床面積	(18.4) m ²	その他	炉	位置	北側主柱穴間	規模	0.60×0.38×0.10m
	壁高	0.30~0.39m					覆土	1) 5YR2/2 黒褐、2) 2.5YR4/8 赤褐		
覆土	1	7.5YR2/2 黒褐 赤色粒、炭化物粒を多く含む			備考	炉	形態	炉縁石なし		
	2	10YR3/3 暗褐 赤色粒を多く含む、炭化物粒をわずかに含む、しまりあり、粘性あり					覆土中に土器片の混じる集石を検出、ガラス小玉出土 SK62に切られる 床面堅緻となる			
	3	7.5YR4/3 褐 しまりあり、粘性あり								
	4	7.5YR1.7/1 黒 炭化物が主体となる土、しまりなし、粘性あり								
	5	7.5YR3/2 黒褐 しまりあり、粘性なし								
	6	7.5YR3/3 暗褐 しまりあり、粘性あり								
	7	10YR3/3 暗褐 しまりあり、粘性あり								
	8	7.5YR4/3 褐 赤色粒を多く含む、しまりあり、粘性あり								
形態	平面形態	隅丸長方形	主軸方位	N15° E	その他					
	その他	出入口を南壁に想定								

第 121 号竪穴建物跡

遺構実測図 (第 24 図)

遺物実測図 (第 59 図)

位置	グリッド	S35E62,S35E63,S36E62,S36E63			その他	ピット	検出せず			
	床面標高	469.56~469.88m								
規模	規模	不明	床面積	(2.9) m ²	その他	炉	位置	不明	規模	
	壁高	0.36m					覆土			
覆土	1	7.5YR4/4 褐 ローム粒、炭化物粒を含む、小石、拳大の石を多く含む、しまりあり、粘性あり			備考	炉	第3次調査 第59号住居址 と同一の遺構か？			
	2	7.5YR2/2 黒褐 礫や小石を多く含む、炭化物粒を多く含む、しまりあり、粘性ややあり								
	3	7.5YR4/3 褐 赤色粒を多く含む、炭化物粒を含む、しまりあり、粘性あり								
	4	7.5YR3/3 暗褐 しまりあり、粘性あり								
	5	7.5YR3/4 暗褐 しまりあり、粘性あり								
形態	平面形態	不明	主軸方位	不明	その他					
	その他									

第 122 号竪穴建物跡

遺構実測図 (第 25 図)

遺物実測図 (第 60 図)

位置	グリッド	S35E74,S35E75,S36E74,S36E75			その他	ピット	検出せず			
	床面標高	469.85~469.90m								
規模	規模	不明	床面積	(10.8) m ²	その他	炉	位置	北寄り	規模	0.52×0.55×0.15m
	壁高	0.28~0.32m					覆土	1) 5YR2/2 黒褐、2) 10YR5/6 黄褐、 3) 7.5YR3/3 暗褐、 4) 2.5YR4/8 赤褐		
覆土	1	7.5YR3/3 暗褐 しまりあり、粘性あり			備考	炉	形態	炉縁石1個		
形態	平面形態	不明	主軸方位	不明			床面堅緻となる			
その他										

第 8 表 竪穴建物跡観察表 (その 6)

第 123 号竖穴建物跡

遺構実測図(第 26 図)

遺物実測図(第 64 図)

位置	グリッド	S33E76,S33E77,S33E78,S34E76,S34E77 S35E76,S35E77,S36E76,S36E77		その他	ピット 主柱穴 pit 1,3 その他 pit 2,4,5,6,7,8,9,10,11
	床面標高	469.89~469.99m			
規模	規模	7.8×6.0m	床面積	(27.8) m ²	炉
	壁高	0.27~0.47m			
覆土	3	10YR3/4 暗褐 しまりあり、粘性あり、赤色粒を多く含む、小石を含む			備考
	4	7.5YR4/3 褐 しまりあり、粘性あり			
	5	7.5YR4/6 褐 しまりあり、粘性あり、赤色粒を多く含む			
形態	平面形態	隅丸長方形	主軸方位	N 14° W	SB126に切られる 床面堅緻となる
	その他				

第 124 号竖穴建物跡

遺構実測図(第 27 図)

遺物実測図(第 61 図)

位置	グリッド	S36E78,S36E79,S36E80,S37E78,S37E79, S37E80		その他	ピット その他 pit 1,2,3,4,5,6,7,8,
	床面標高	469.75~469.87m			
規模	規模	?×5.6m	床面積	(16.4) m ²	炉
	壁高	0.32~0.46m			
覆土	1	7.5YR3/3 暗褐 しまりあり、粘性あり			備考
形態	平面形態	隅丸長方形	主軸方位		
	その他				

第 125 号竖穴建物跡

遺構実測図(第 28 図)

遺物実測図(第 65 図)

位置	グリッド	S31E78,S31E79,S32E78,S32E79,S33E78, S33E79		その他	ピット 主柱穴 pit 1,2,3,4 その他 pit 5,6,7,8
	床面標高	469.84~469.92m			
規模	規模	6.2×4.3m	床面積	24.2 m ²	炉
	壁高	0.31~0.37m			
覆土	1	10YR3/4 暗褐 しまりあり、粘性あり、赤色粒を多く含む			備考
形態	平面形態	隅丸長方形	主軸方位	N 9° E	
	その他	出入口を南壁に想定			

第 126 号竖穴建物跡

遺構実測図(第 26 図)

遺物実測図(第 64 図)

位置	グリッド	S33E78,S34E77,S34E78,S34E79,S35E77, S35E78,S36E78		その他	ピット 主柱穴 pit 2,5,7,9 出入口 pit 17,18 その他 pit 1,3,4,6,8,10,11,12,13,14,15,16,19
	床面標高	469.84~469.90m			
規模	規模	6.2×4.4m	床面積	27.5 m ²	炉
	壁高	0.41~0.51m			
覆土	1	10YR3/2 黒褐 しまりあり、粘性あり、赤色粒を多く含む、小石を含む			備考
	2	10YR3/4 暗褐 しまりあり、粘性あり			
	6	7.5YR3/4 暗褐 しまりあり、粘性あり			
形態	平面形態	隅丸長方形	主軸方位	N 35° E	SB123を切る 床面堅緻となる
	その他	出入口を南壁に想定			

第 9 表 竖穴建物跡観察表(その 7)

第 127 号 竪穴建物跡 遺構実測図 (第 28 図)

位置	グリッド	S31E79,S31E80,S32E79,S32E80			その他	ピット	その他 pit 1,2,3,4,5		
	床面標高	470.02~470.09m							
規模	規模	2 × 3.2m	床面積	(11.5) m ²	その他	炉	位置	不明	規模
	壁高	0.07~0.14m					覆土		
覆土	2 10YR3/2 黒褐 しまりあり、粘性あり、赤色粒を多く含む				備考	炉	形態		
形態	平面形態	隅丸長方形	主軸方位	N 67° E			SB125Iに切られる		
	その他								

第 10 表 竪穴建物跡観察表 (その 8)

遺構 No.	位置	規模 (m)			所属時期	出土遺物	特徴等
		長径	短径	深さ			
SK53	S38E50	0.56	(0.56)	0.40	不明	なし	
SK56	S35E53 ほか	1.18	1.07	0.56	"	"	
SK57	S35E49	1.28	0.68	0.26	近代以降	木製アンカー	電柱のアンカー坑
SK58	S36E54 ほか	2.73	2.70	0.38	不明	なし	
SK59	S36E52 ほか	1.93	1.64	0.55	近代以降	ガラス片等	ごみ穴か？
SK60	S39E51 ほか	0.75	0.72	0.34	不明	なし	
SK62	S39E61	1.21	1.07	0.84	近代以降	塩ビ製便槽	トイレ
SK63	S38E51	0.54	0.51	0.05	不明	なし	
SK64	S38E50	0.45	0.32	0.06	"	"	
SK65	S37E51	0.30	0.26	0.04	"	"	
SK66	S35E49	0.21	0.19	0.07	"	"	
SK67	S35E49	0.48	0.32	0.08	"	"	
SK68	S35E48	0.47	0.27	0.04	"	"	
SK69	S36E50 ほか	0.51	0.43	0.15	"	"	
SK70	S36E53	0.38	0.31	0.05	"	"	SK70~75・101が直列
SK71	S36E53	0.31	0.27	0.04	"	"	"
SK72	S36E53 ほか	0.52	0.16	0.05	"	"	"
SK73	S37E54	0.60	0.36	0.04	"	"	"
SK74	S37E55	0.52	0.43	0.09	"	"	"
SK75	S37E55	0.32	0.29	0.07	"	"	"
SK76	S34E53	0.51	0.39	0.08	"	"	
SK77	S40E56	0.57	0.36	0.13	"	"	
SK78	S39E56	0.33	0.30	0.12	"	"	
SK79	S39E56	0.37	0.32	0.05	"	"	
SK80	S40E57	0.36	0.32	0.05	"	"	
SK81	S39E59	0.35	0.23	0.11	"	"	
SK82	S39E61	0.22	0.14	0.13	"	"	
SK83	S35E59	0.44	0.37	0.19	"	"	SK83・87・89・91・97が直列
SK84	S35E59	0.36	0.31	0.15	"	"	
SK85	S35E59	(0.22)	0.16	0.05	"	"	
SK86	S35E59	0.36	0.28	0.14	"	"	
SK87	S35E59	0.40	0.40	0.12	"	"	SK83・87・89・91・97が直列
SK88	S35E60	0.27	0.23	0.10	"	"	
SK89	S35E60	0.47	0.37	0.07	"	"	SK83・87・89・91・97が直列
SK90	S35E61	0.64	0.53	0.04	"	"	
SK91	S35E61	0.33	0.27	0.13	"	"	SK83・87・89・91・97が直列
SK92	S35E61	0.29	0.23	0.10	"	"	
SK93	S36E60	0.36	0.33	0.27	"	"	
SK94	S36E60	0.40	0.33	0.12	"	"	
SK95	S35E62	(0.54)	0.48	0.10	"	"	
SK96	S35E61 ほか	0.24	0.17	0.03	"	"	

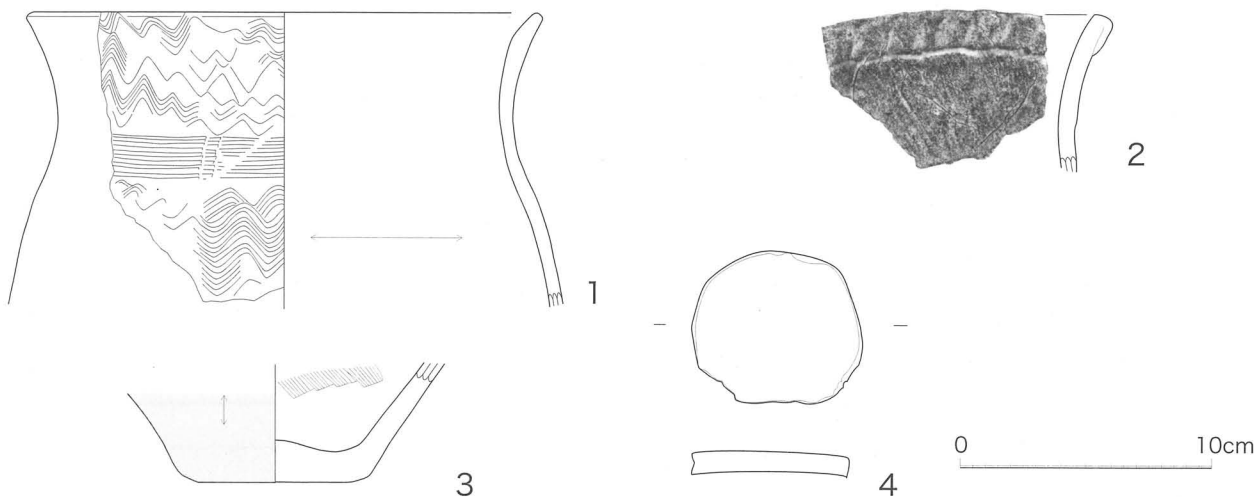
第11表 土坑跡観察表 (その1)

遺構 No.	位置	規模 (m)			所属時期	出土遺物	特徴等
		長径	短径	深さ			
SK97	S36E62	0.64	0.56	0.19	"	"	SK83・87・89・91・97が直列
SK99	S36E60	0.32	0.23	0.07	"	"	
SK100	S36E53	0.48	0.33	0.08	"	"	
SK101	S36E52	0.36	0.31	0.04	"	"	SK70~75・101が直列
SK102	S36E52 ほか	0.56	(0.31)	0.06	弥生時代後期	土器底部	
SK103	S38E50 ほか	1.07	1.04	0.11	不明	なし	
SK104	S36E54	0.42	0.22	0.12	"	"	
SK105	S33E74	0.61	(0.43)	0.22	"	"	SK105・107・108・109・112・113が直列
SK106	S32E75 ほか	(0.61)	0.53	0.25	"	"	
SK107	S33E75	0.43	0.38	0.17	"	"	
SK108	S32E75 ほか	0.67	0.37	0.11	"	"	
SK109	S32E76	0.45	0.39	0.14	"	"	
SK110	S31E75	0.32	0.31	0.13	"	"	
SK111	S31E76	0.50	0.41	0.15	"	"	
SK112	S31E76 ほか	0.46	0.43	0.12	"	"	
SK113	S31E76	0.31	0.24	0.10	"	"	
SK114	S32E77	0.77	0.36	0.15	"	"	
SK115	S31E79	1.34	0.49	0.26	近代以降	木製アンカー	電柱のアンカー坑
SK116	S31E77 ほか	0.84	0.62	0.35	弥生時代後期	土器	
SK117	S31E77	0.47	0.43	0.14	不明	なし	
SK118	S32E75	0.48	0.28	0.13	"	"	
SK119	S36E82	0.29	0.29	0.07	"	"	
SK120	S37E81	0.62	0.57	0.13	"	"	
SK121	S33E82	0.38	0.24	0.14	"	"	
SK122	S39E56 ほか	0.29	0.23	0.25	近代以降	"	
SK123	S36E60	0.26	0.25	0.05	不明	"	
SK124	S34E78 ほか	-	-	-	古墳時代中期	土師器	竪穴建物跡か？

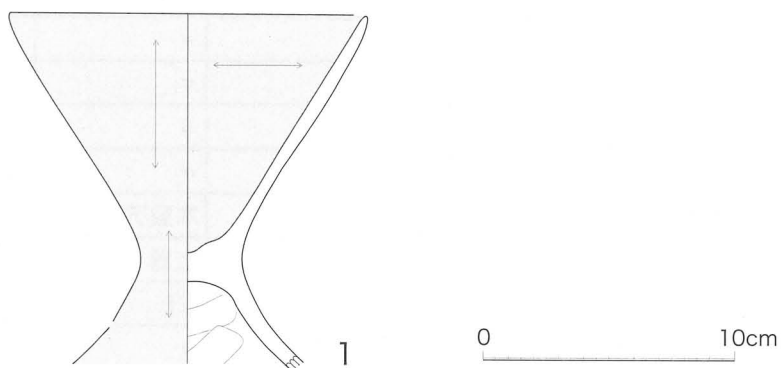
第12表 土坑跡観察表 (その2)

遺構 No.	位置	規模 (m)			所属時期	出土遺物	特徴等
		長さ	幅	深さ			
SD06	S30E79 ほか	(19.670)	0.50 程度	0.30 程度	不明 (弥生時代 後期以降)	弥生土器、近代陶磁 器 ほか	第4次調査の第1号配石溝 (SD05)と同じ遺構と推定される。

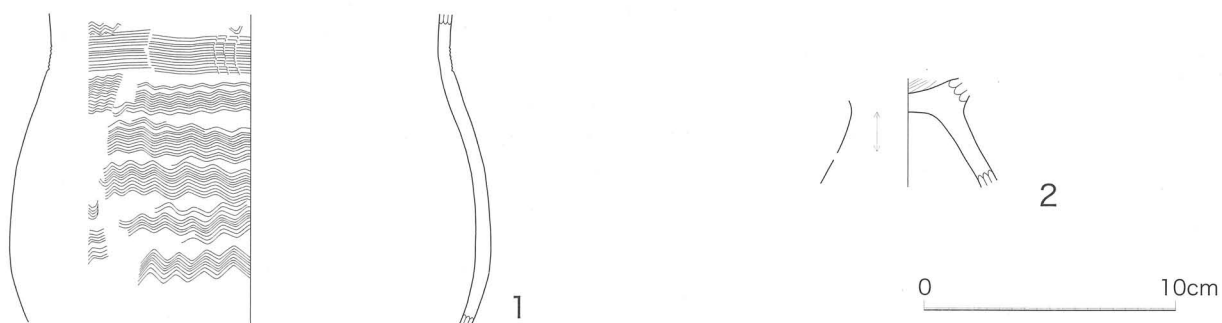
第13表 配石溝跡観察表



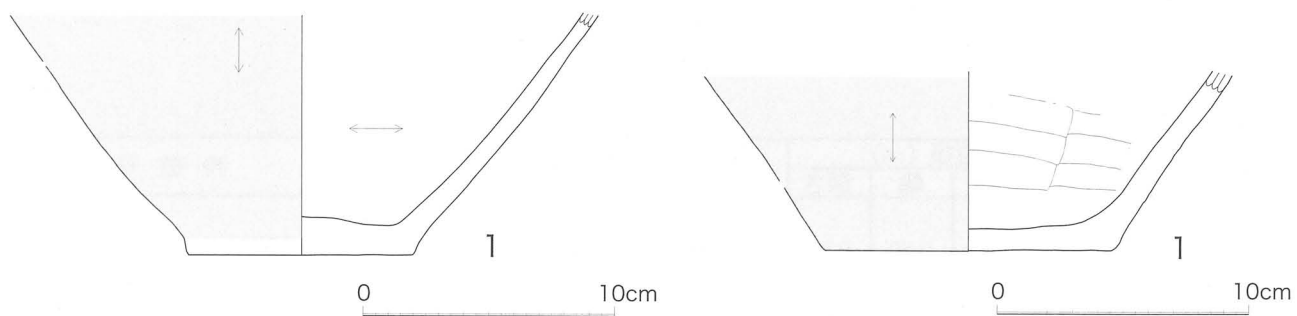
第 32 图 第 99 号竖穴建物跡出土遺物 (3:1)



第 33 图 第 102 号竖穴建物跡出土遺物 (3:1)

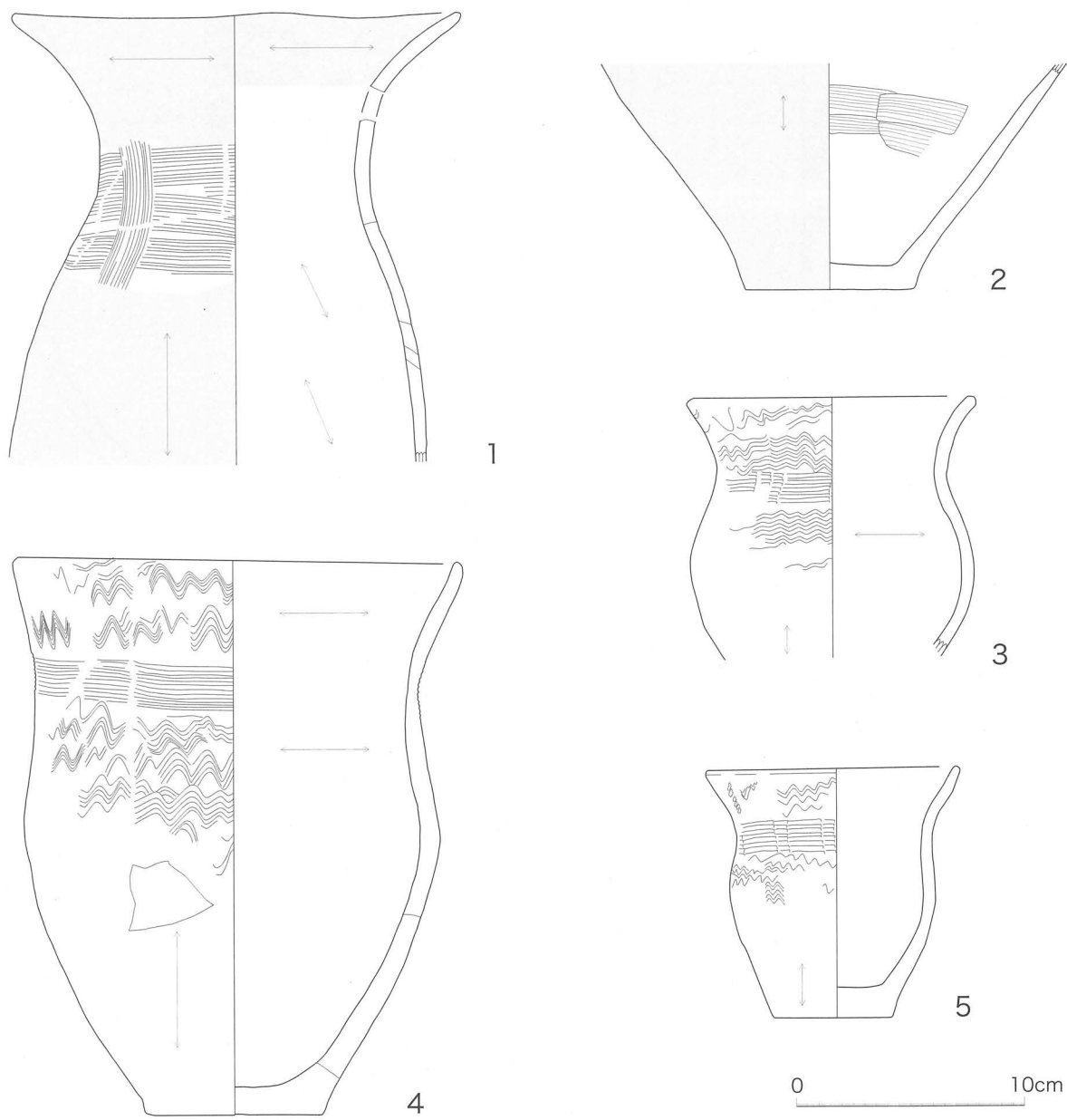


第 34 图 第 103 号竖穴建物跡出土遺物 (3:1)



第 35 图 第 106 号竖穴建物跡出土遺物 (3:1)

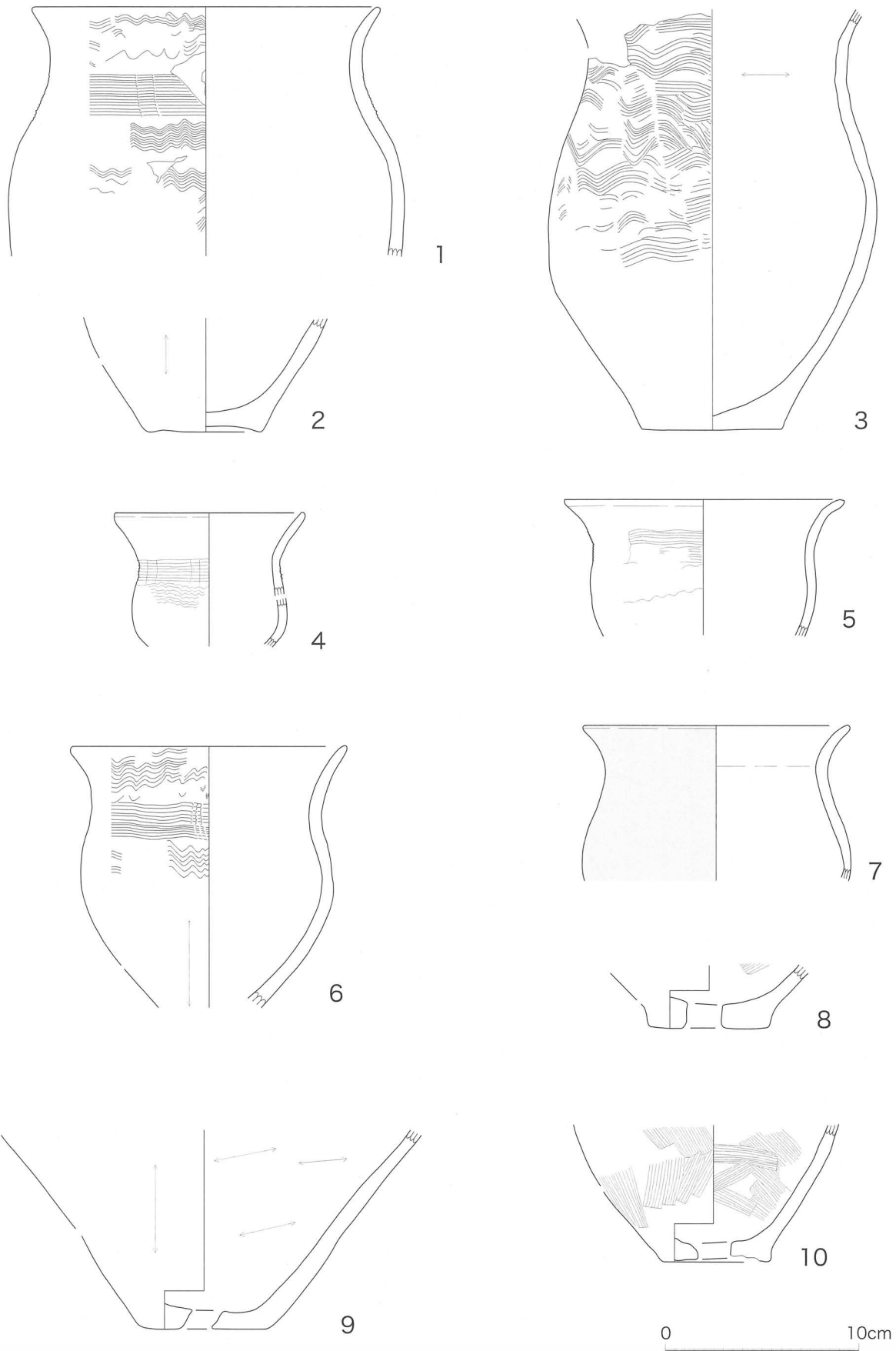
第 36 图 第 107 号竖穴建物跡出土遺物 (3:1)



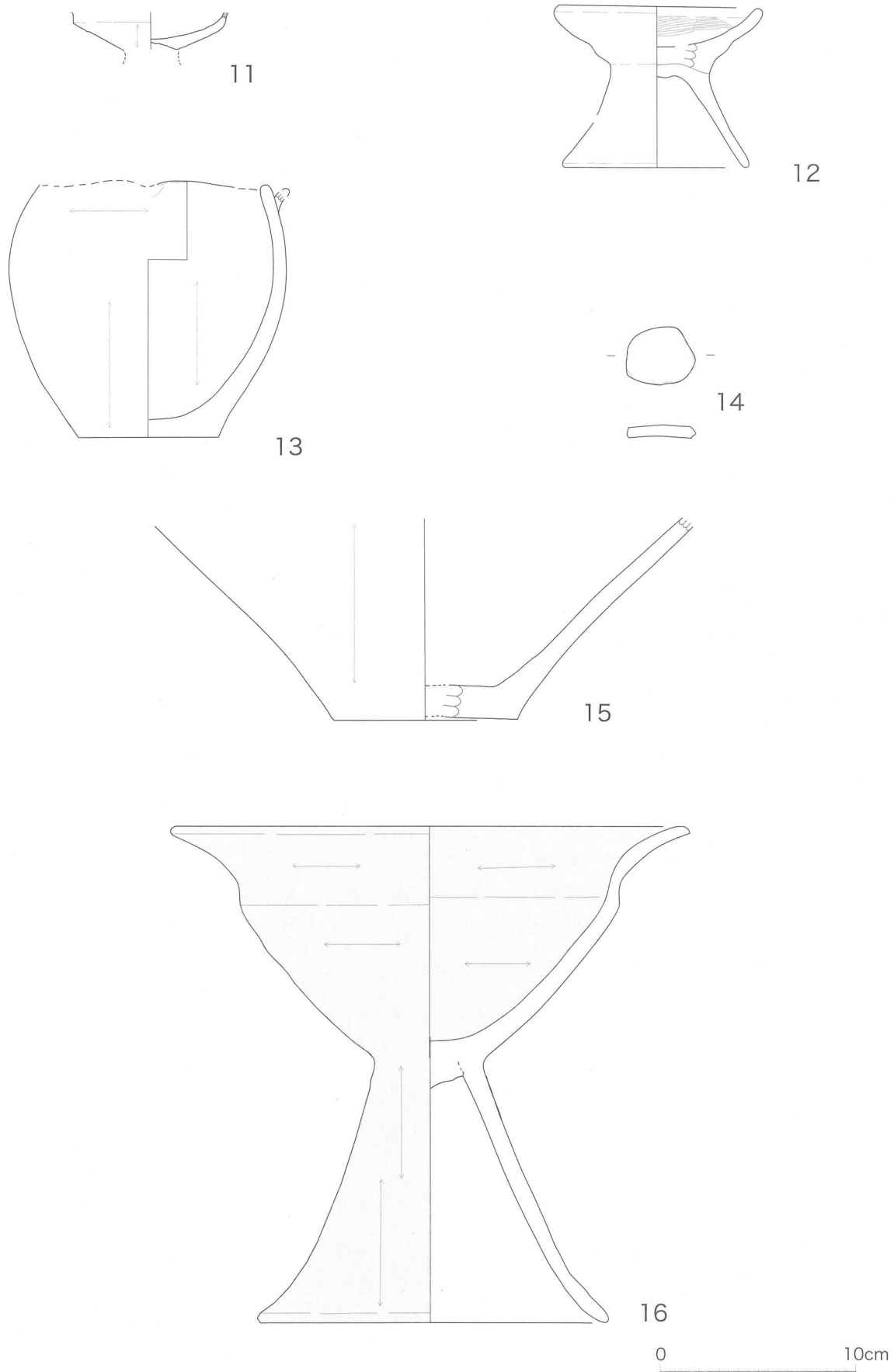
第 37 図 第 100 号竖穴建物跡出土遺物 (3:1)



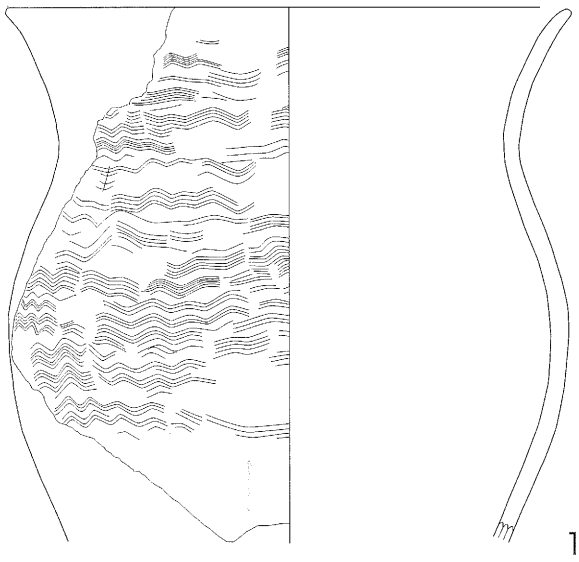
第 38 図 第 110 号竖穴建物跡出土遺物 (3:1)



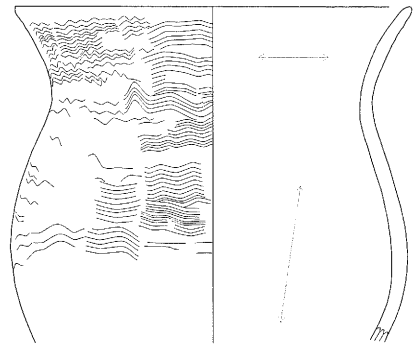
第 39 图 第 105 号竖穴建物跡出土遺物 (1) (3:1)



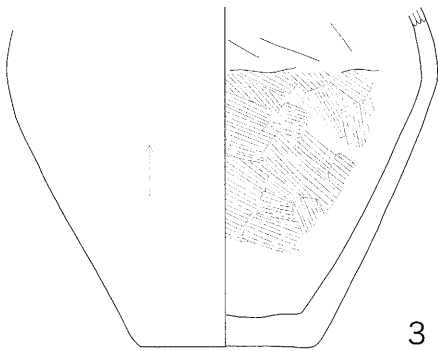
第 40 图 第 105 号竖穴建物跡出土遺物 (2) (3:1)



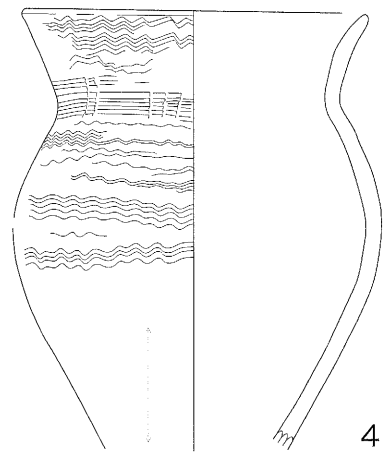
1



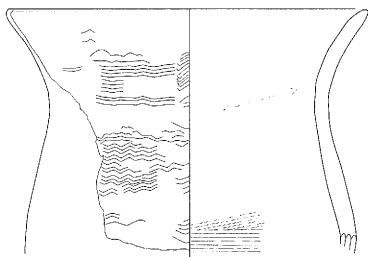
2



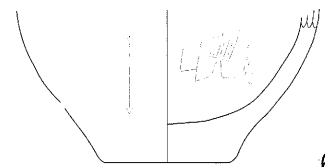
3



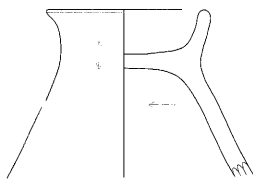
4



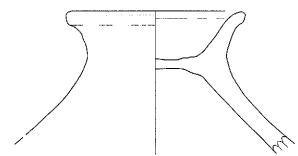
5



6



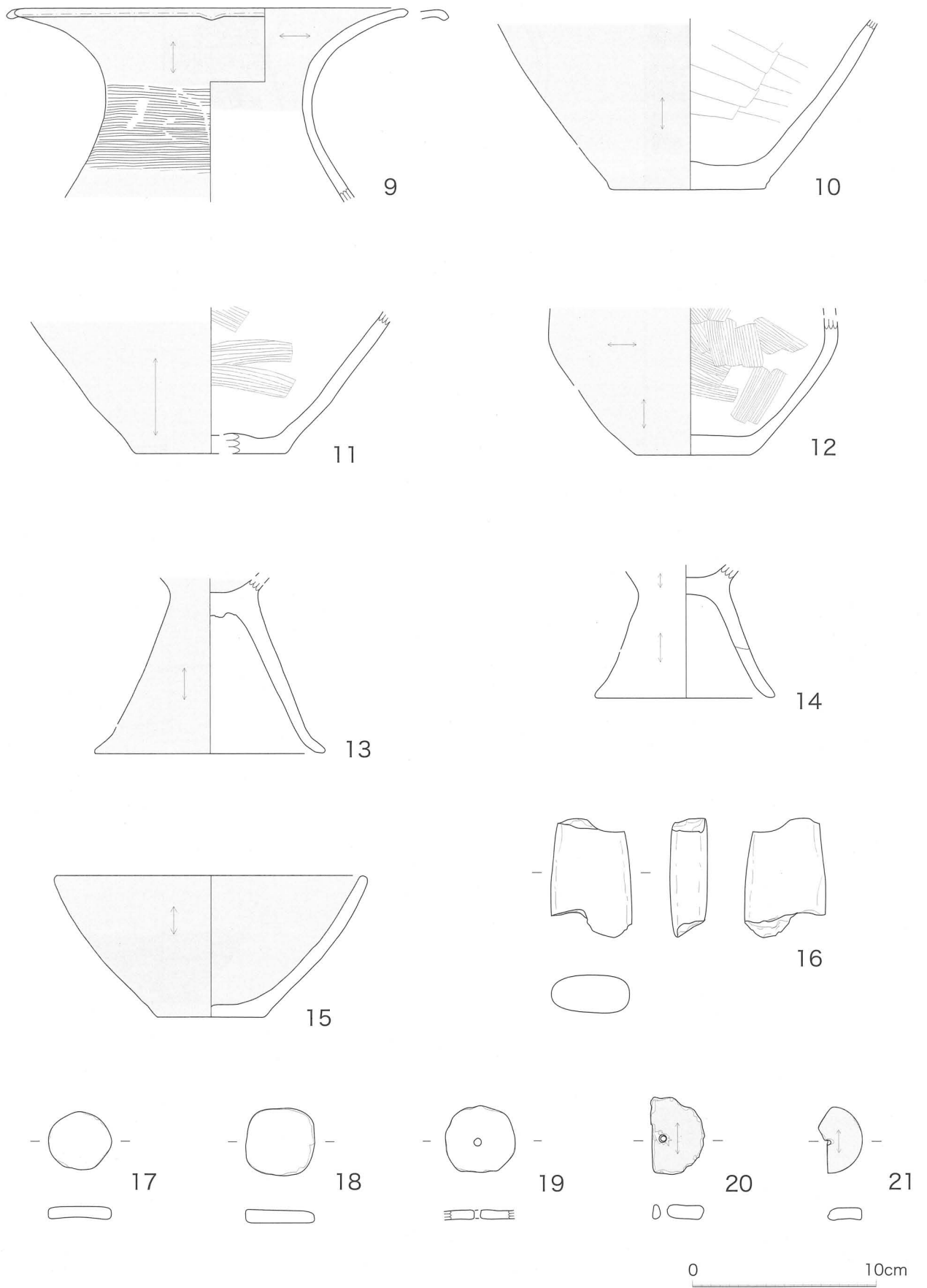
7



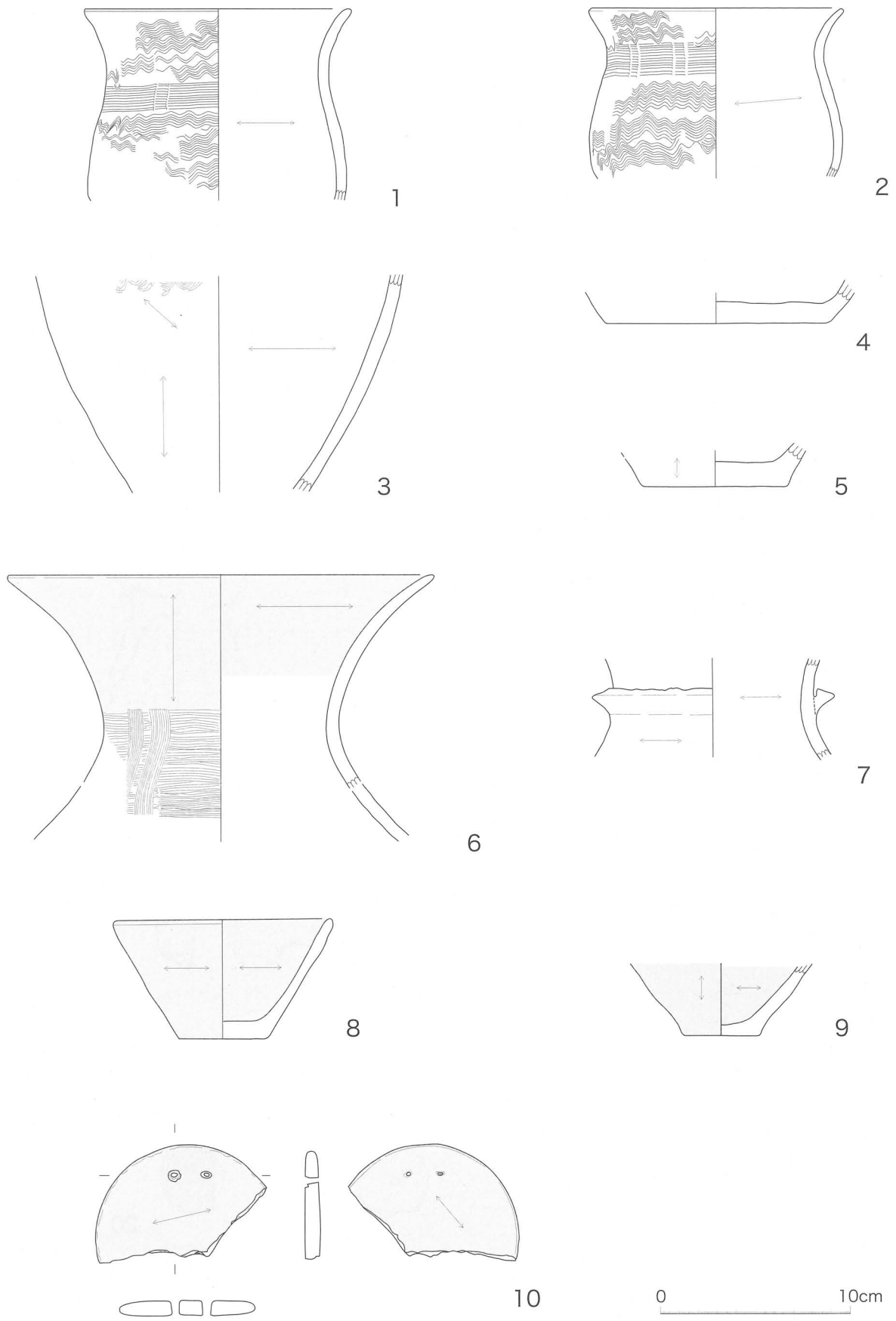
8

0 10cm

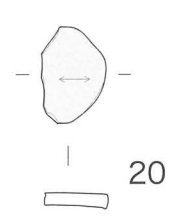
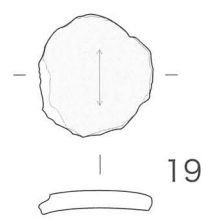
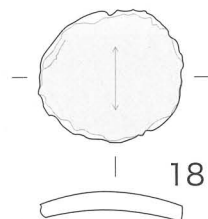
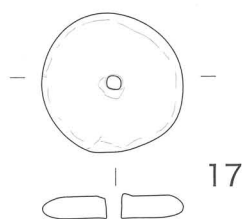
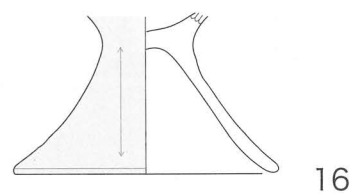
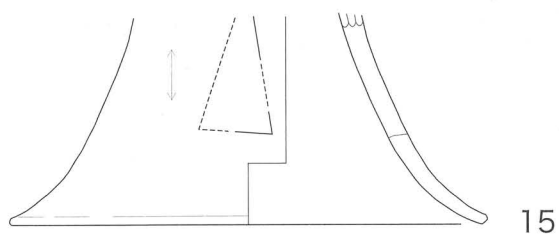
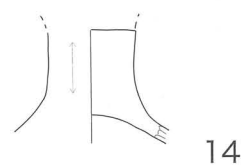
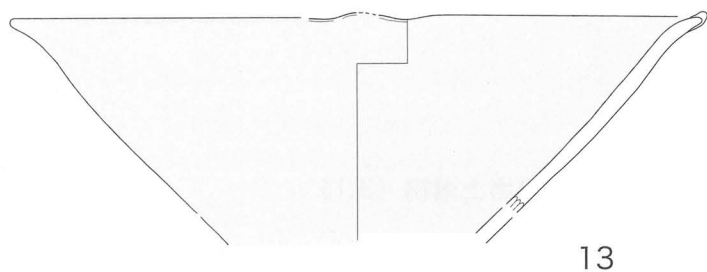
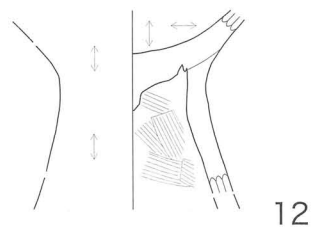
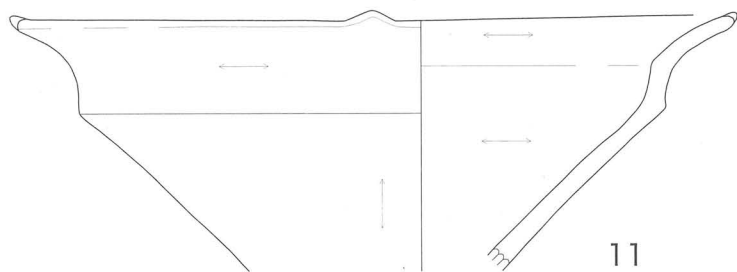
第 41 图 第 108 号竖穴建物跡出土遺物 (1) (3:1)



第 42 图 第 108 号竖穴建物跡出土遺物 (2) (3:1)

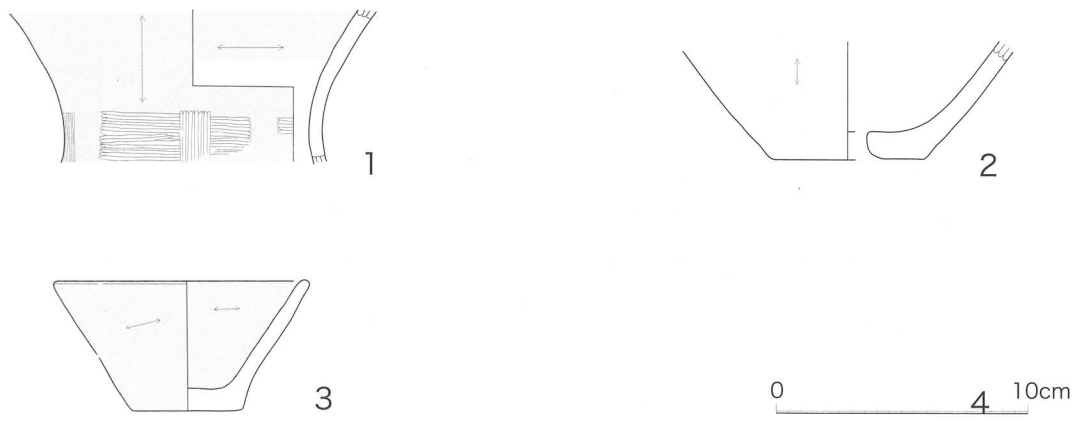


第43图 第109号竖穴建物跡出土遺物(1)(3:1)

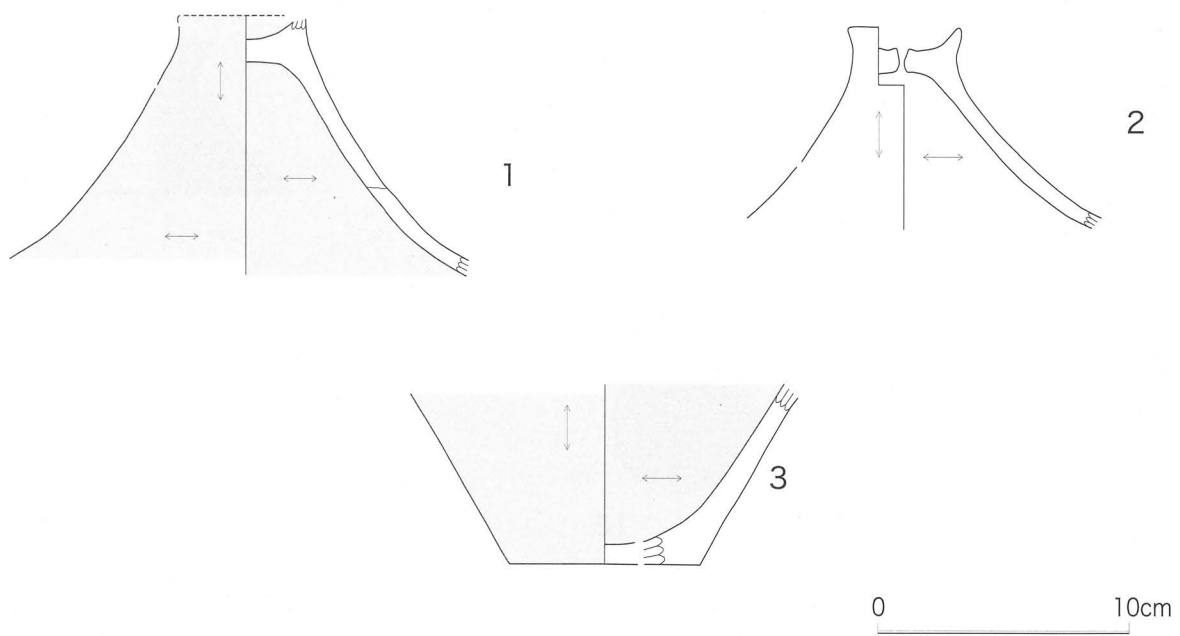


0 10cm

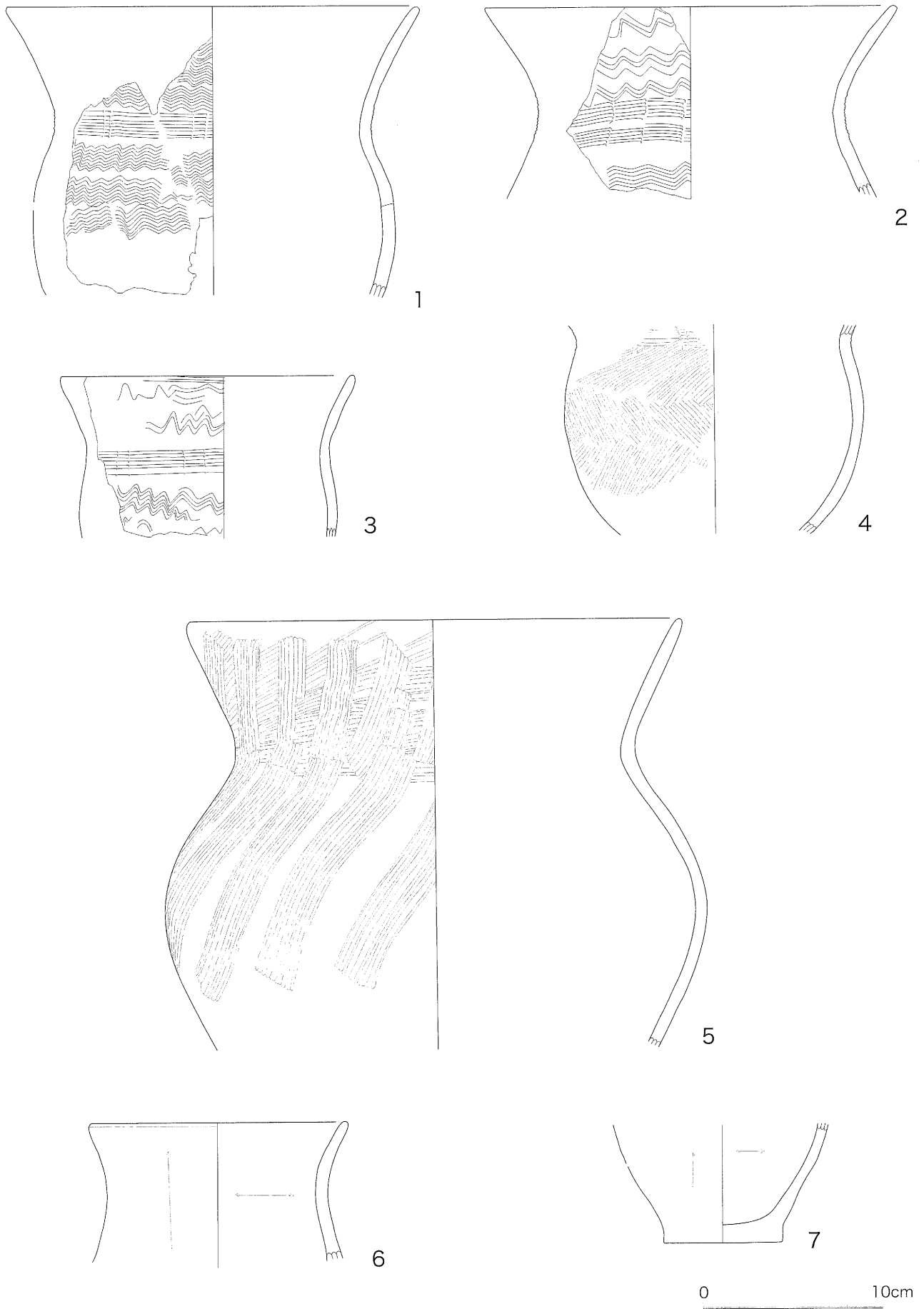
第 44 图 第 109 号竖穴建物迹出土遺物 (2) (3:1)



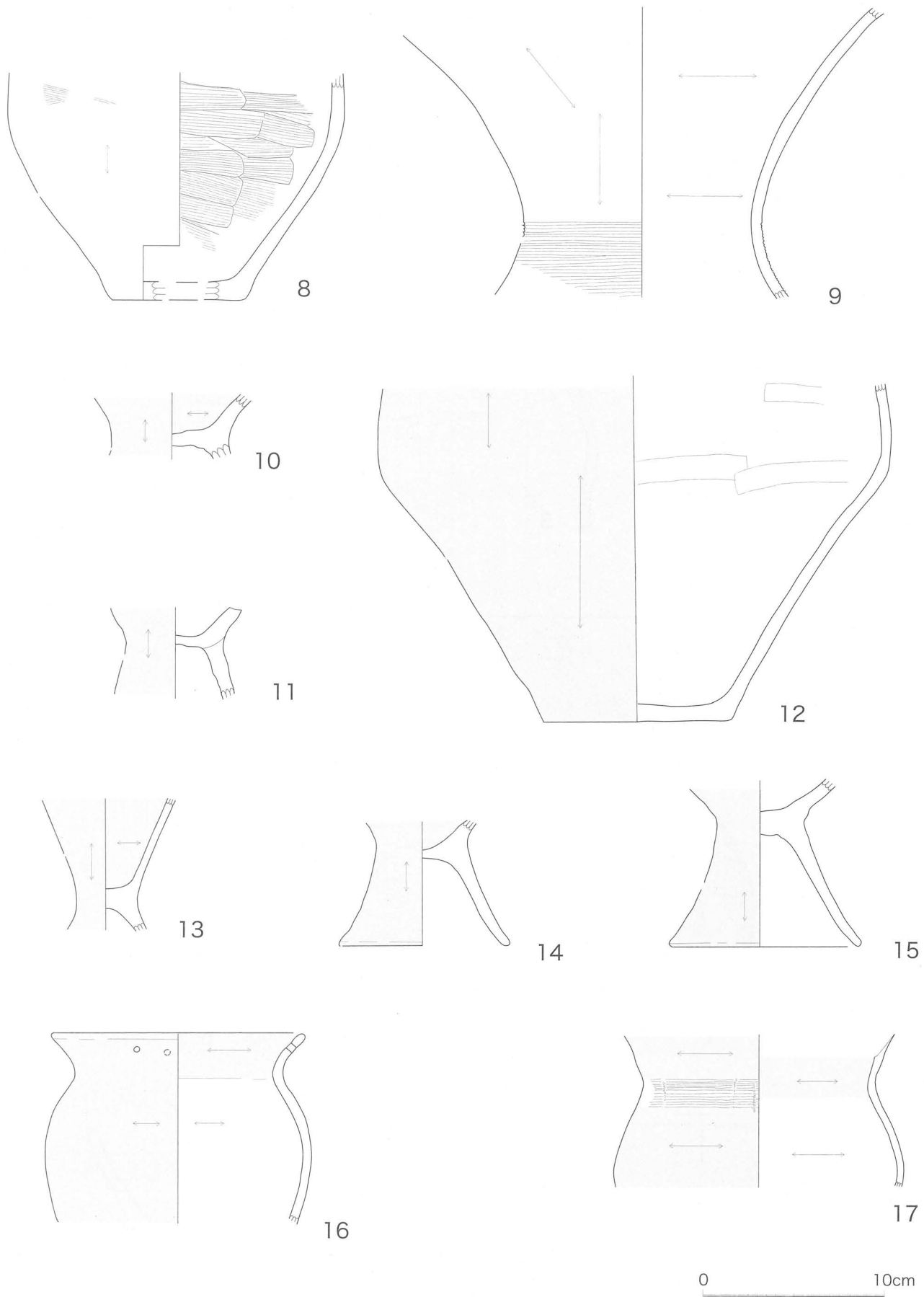
第 45 図 第 111 号竖穴建物跡出土遺物 (3:1)



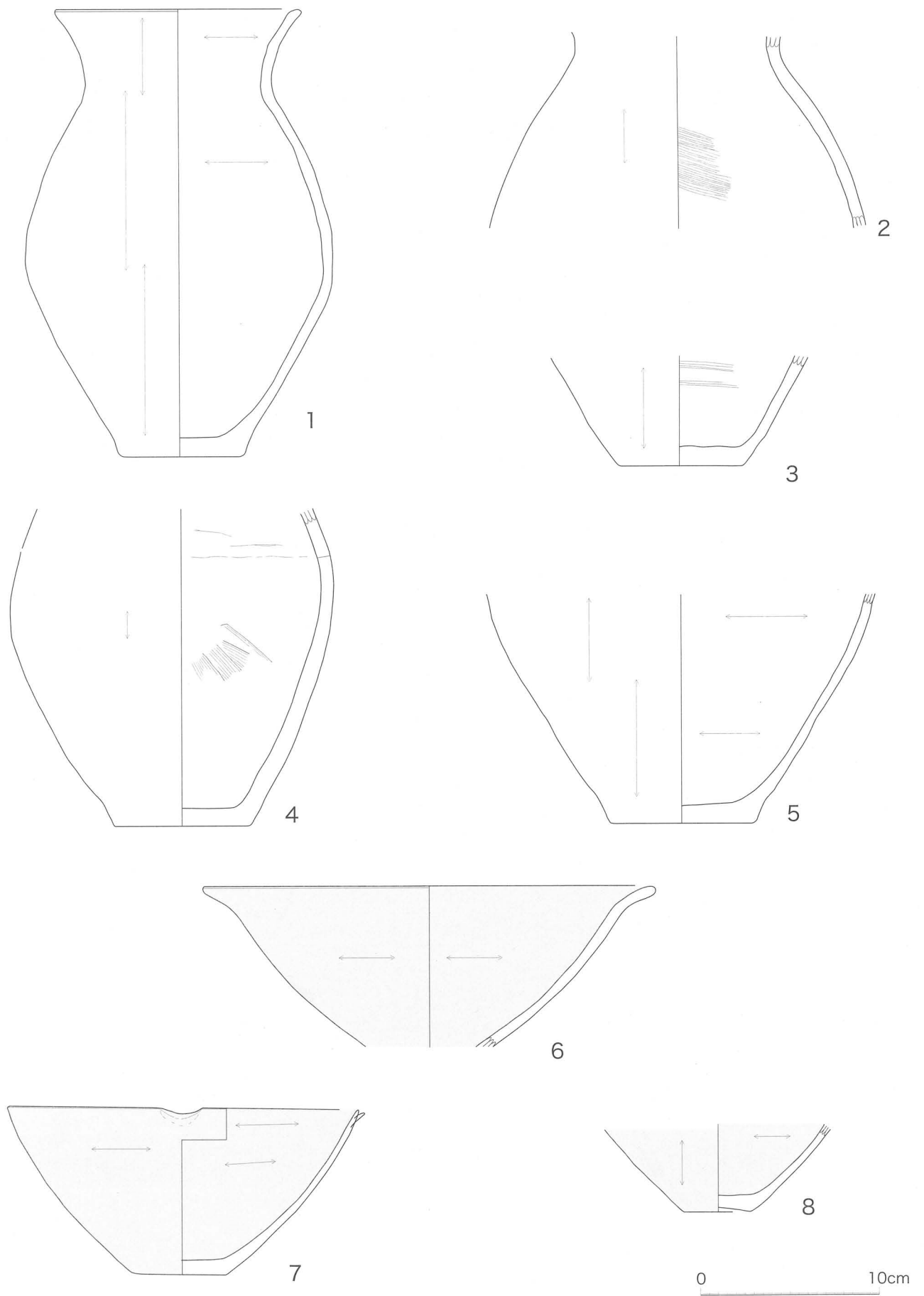
第 46 図 第 114 号竖穴建物跡出土遺物 (3:1)



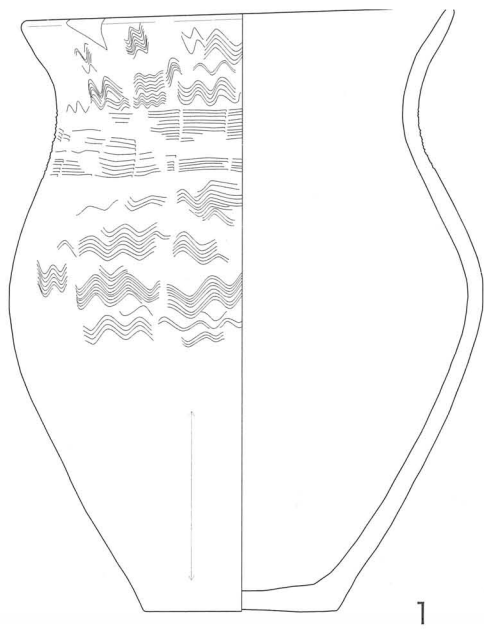
第 47 图 第 113 号竖穴建物迹出土遺物 (1) (3:1)



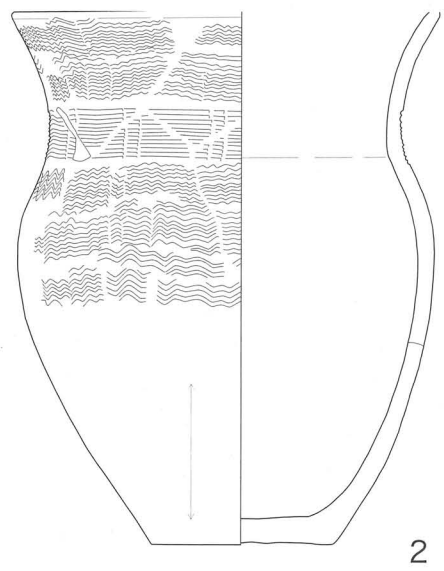
第48图 第113号竖穴建物迹出土遺物(2)(3:1)



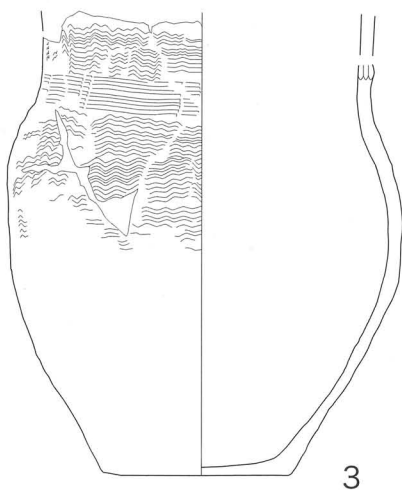
第 49 図 第 115 号竖穴建物跡出土遺物 (3:1)



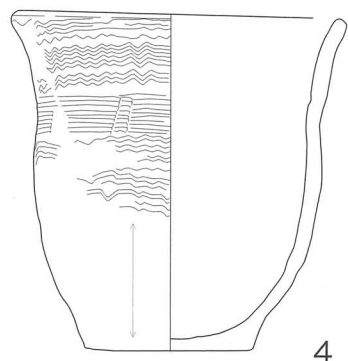
1



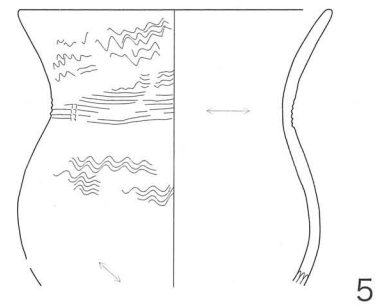
2



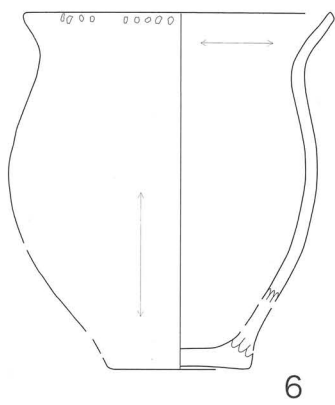
3



4



5



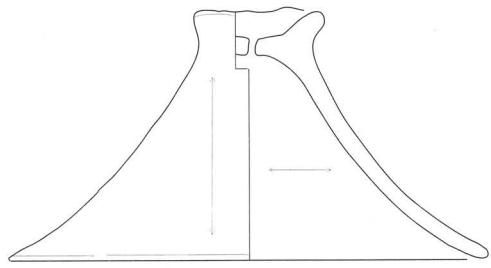
6



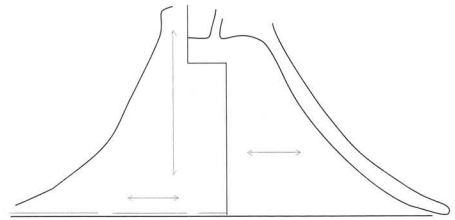
7

0 10cm

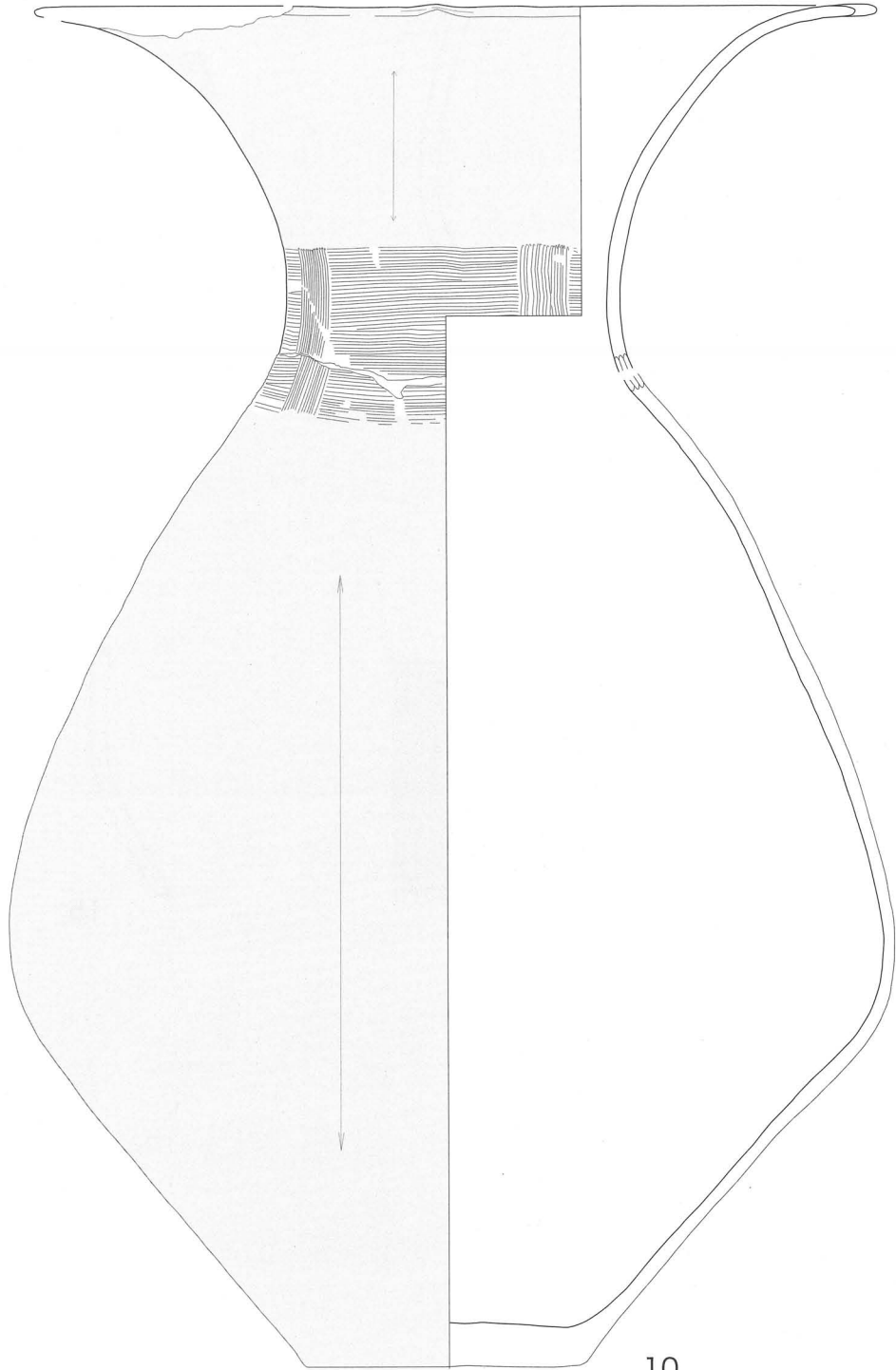
第 50 图 第 117 号竖穴建物跡出土遺物 (1) (3:1)



8



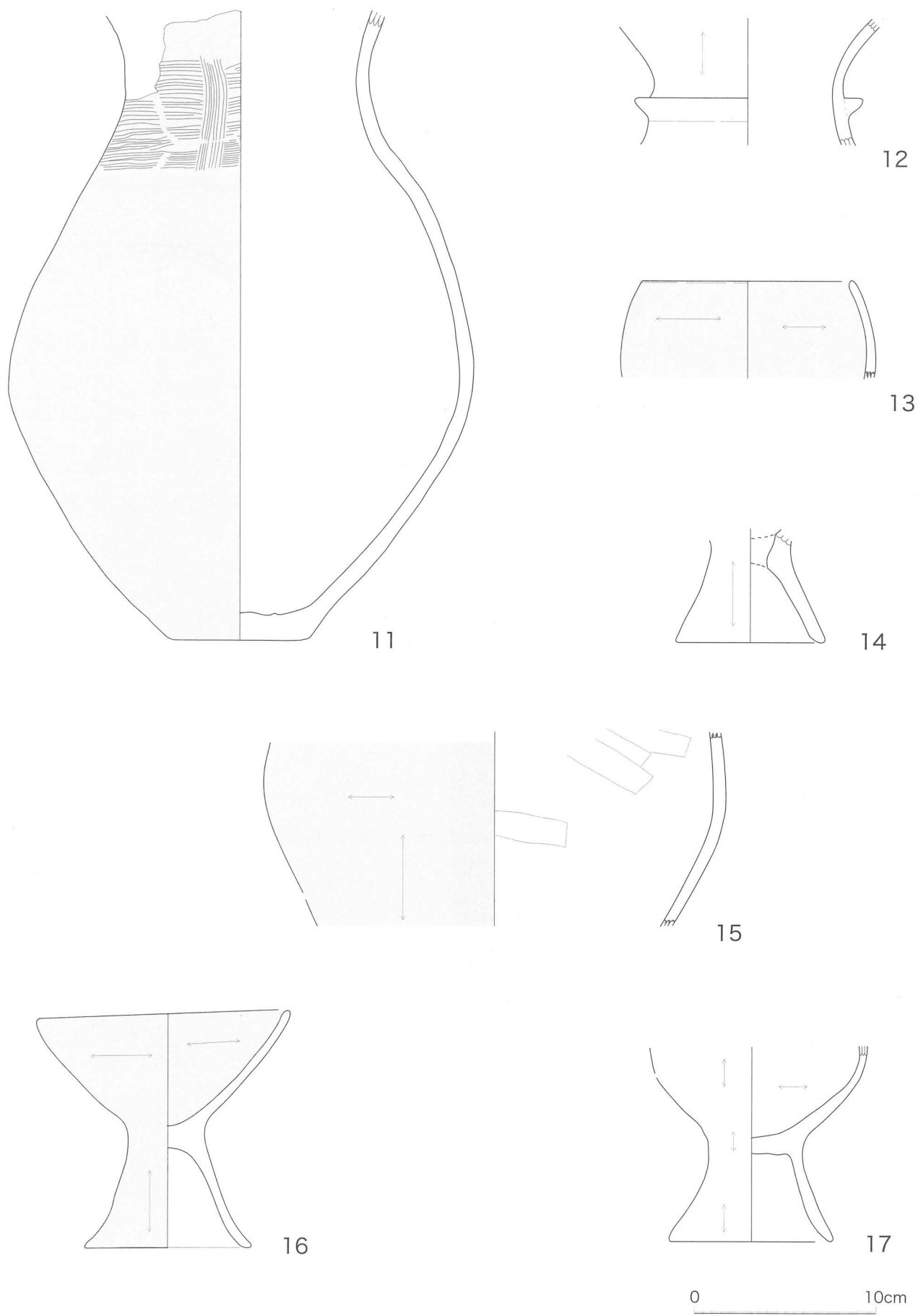
9



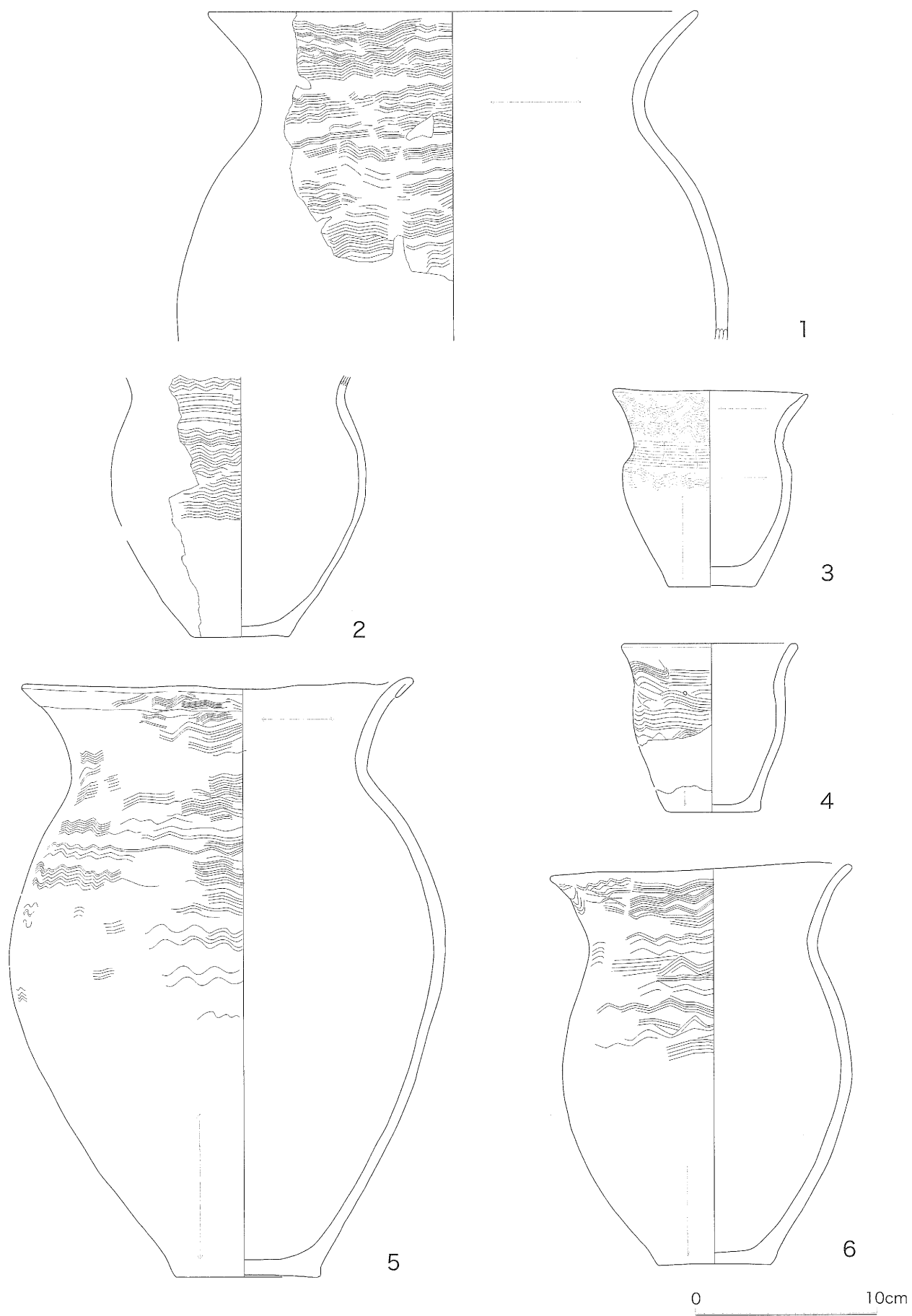
10

0 10cm

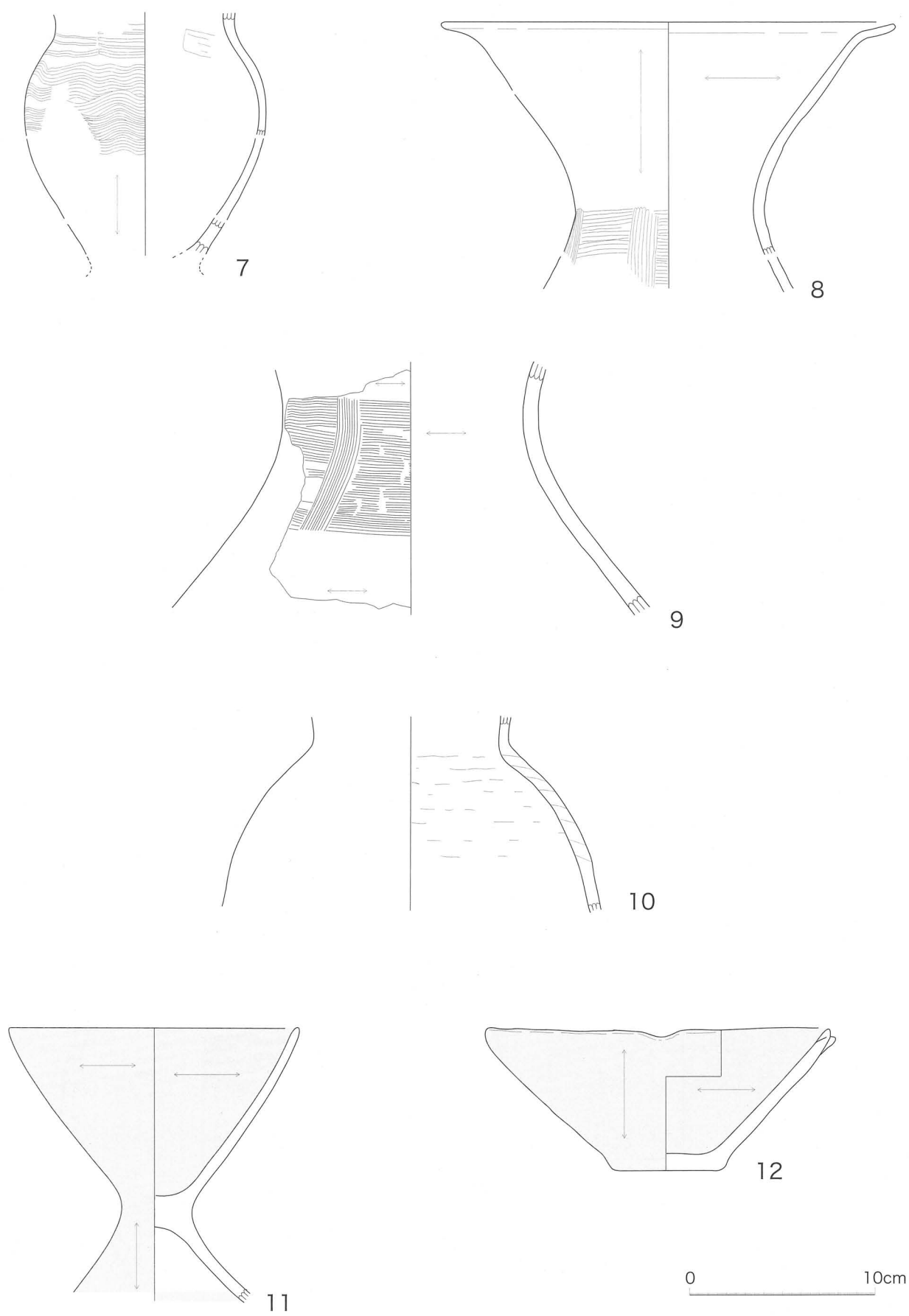
第 51 図 第 117 号 竖穴建物跡出土遺物 (2) (3:1)



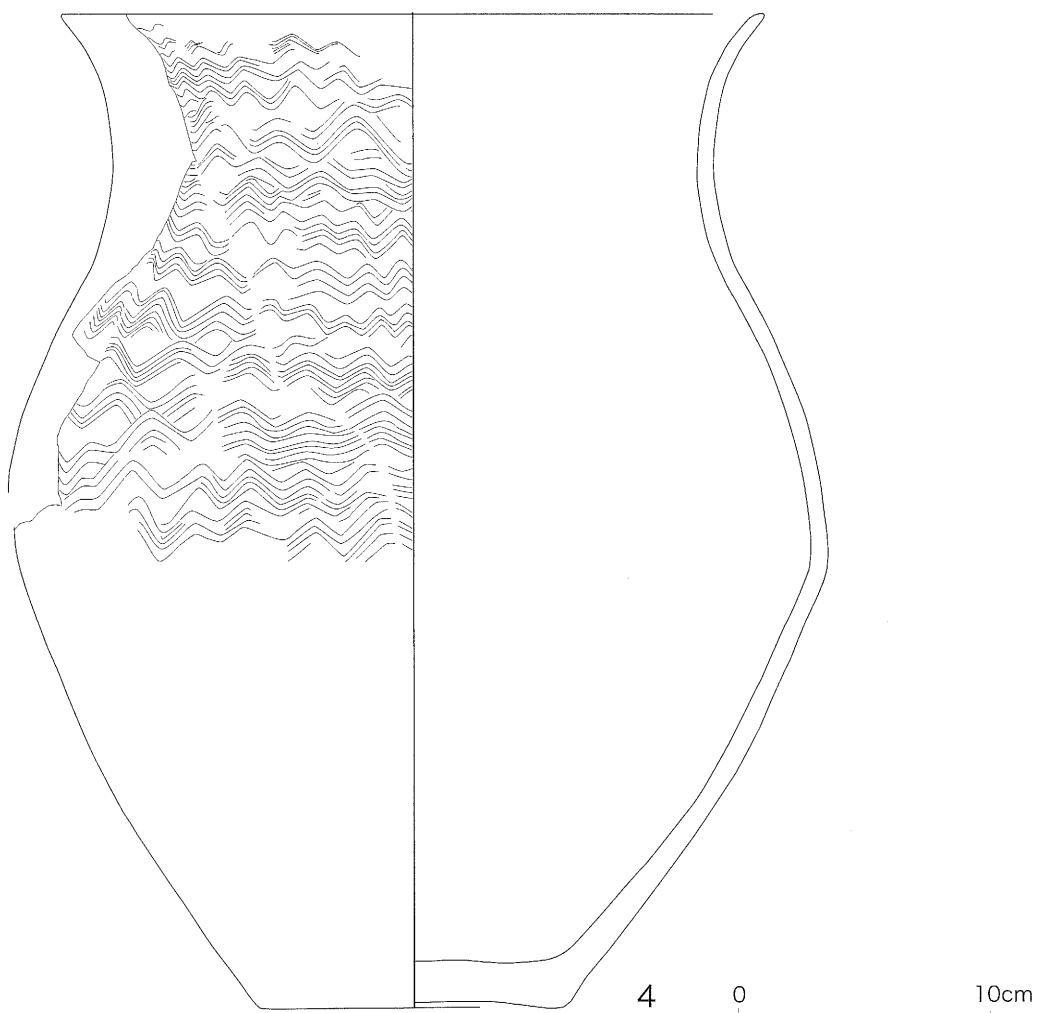
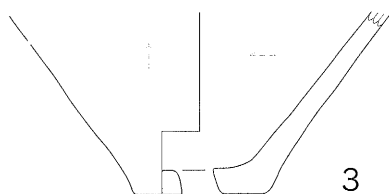
第 52 图 第 117 号竖穴建物迹出土遗物 (3) (3:1)



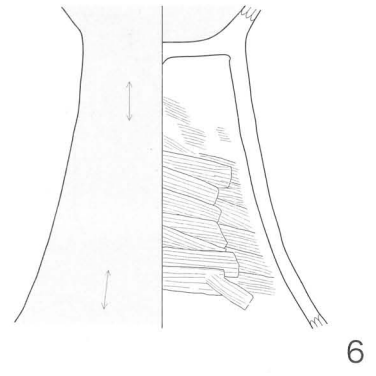
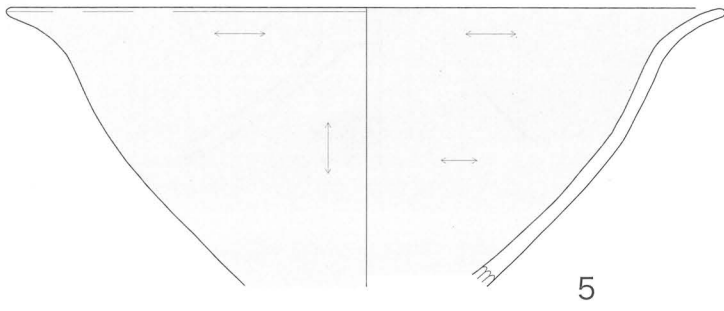
第 53 図 第 118 号竖穴建物跡出土遺物 (1) (3:1)



第 54 图 第 118 号竖穴建物跡出土遺物 (2) (3:1)



第 55 图 第 119 号竖穴建物迹出土遺物 (1) (3:1)

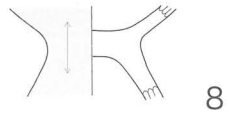
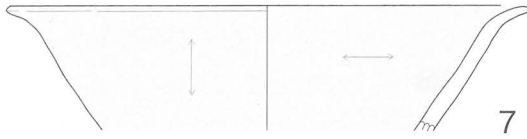
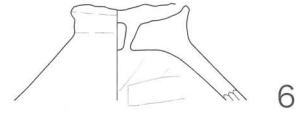
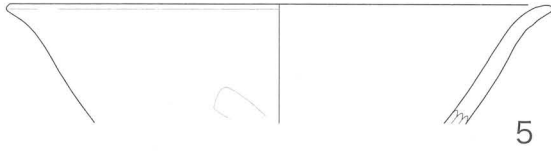


0 10cm

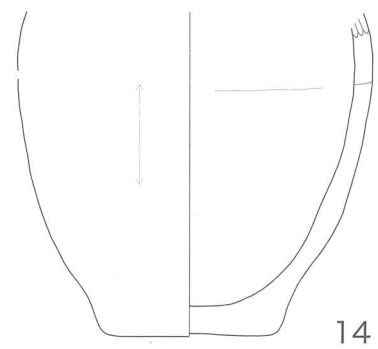
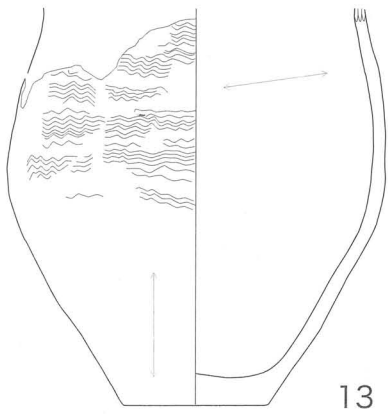
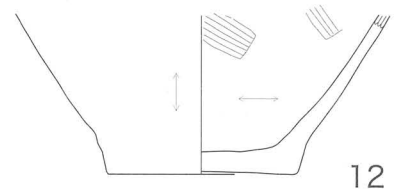
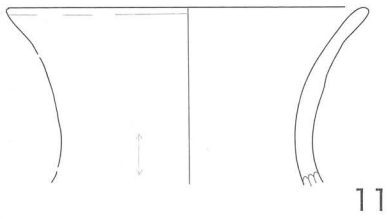
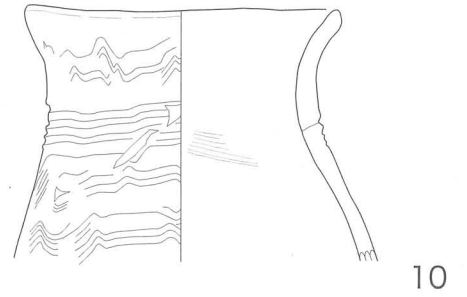
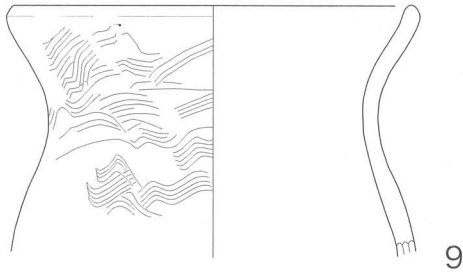
第 56 图 第 119 号竖穴建物迹出土遺物 (2) (3:1)



※1～4は原寸大

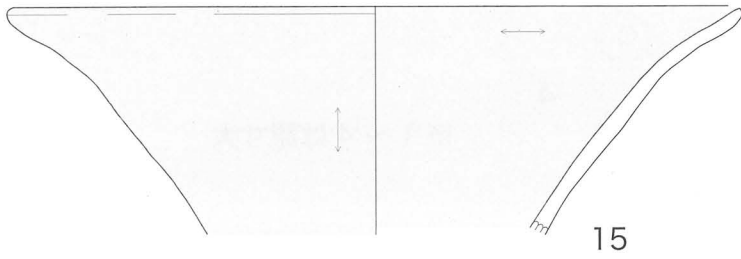


※1～8は集石上面からの出土遺物である。

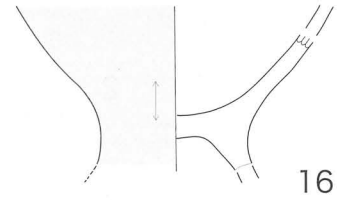


0 10cm

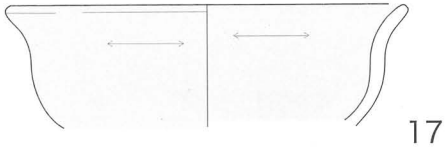
第57図 第120号竪穴建物跡出土遺物(1)(1:1または3:1)



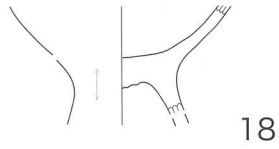
15



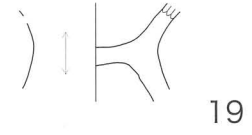
16



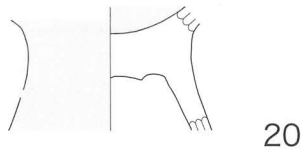
17



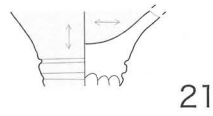
18



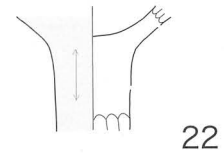
19



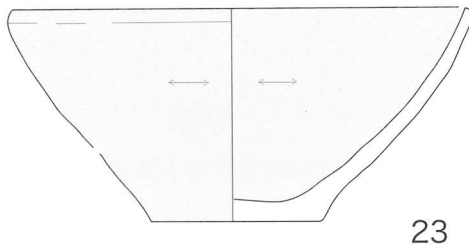
20



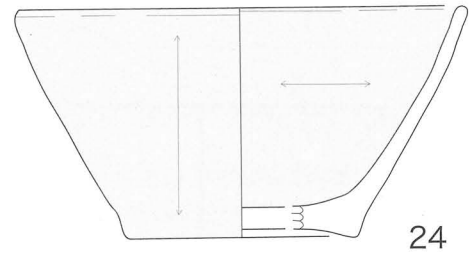
21



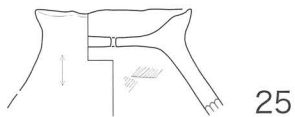
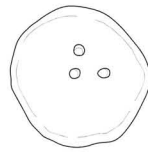
22



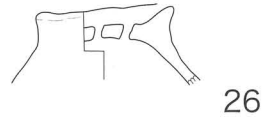
23



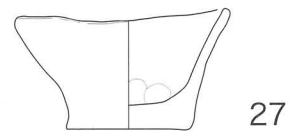
24



25



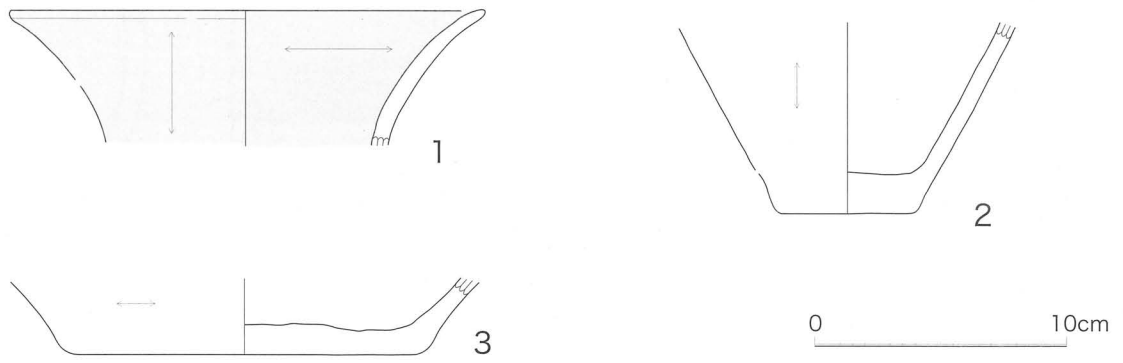
26



27

0 10cm

第 58 图 第 120 号竖穴建物跡出土遺物 (2) (3:1)



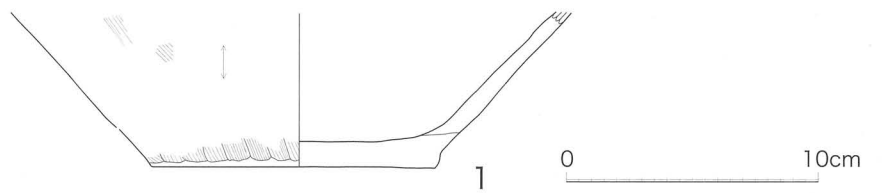
第 59 図 第 121 号竖穴建物跡出土遺物 (3:1)



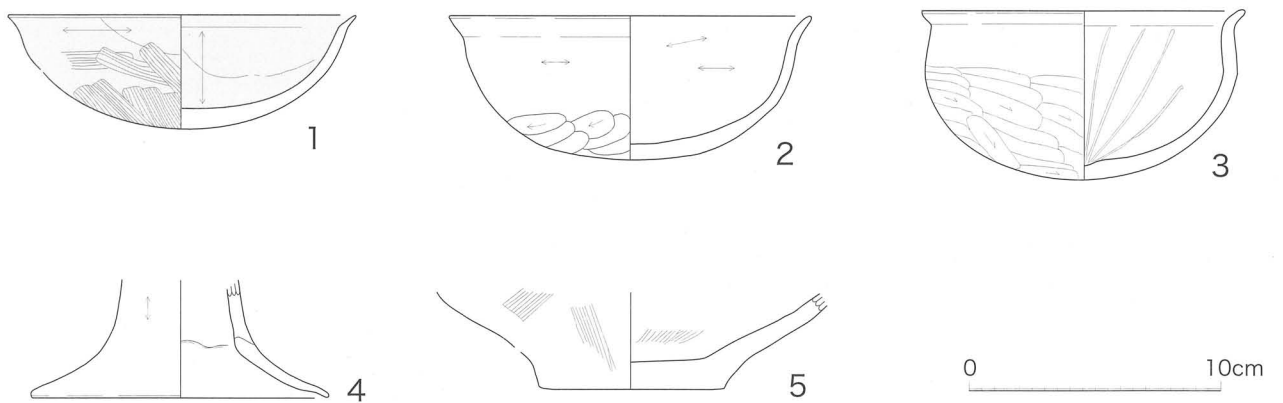
第 60 図 第 122 号竖穴建物跡出土遺物 (3:1)



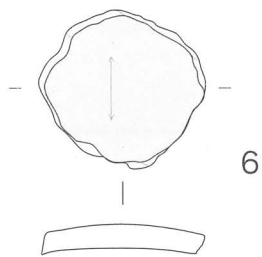
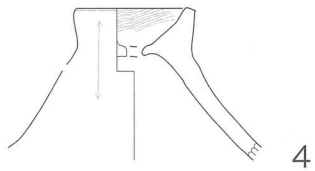
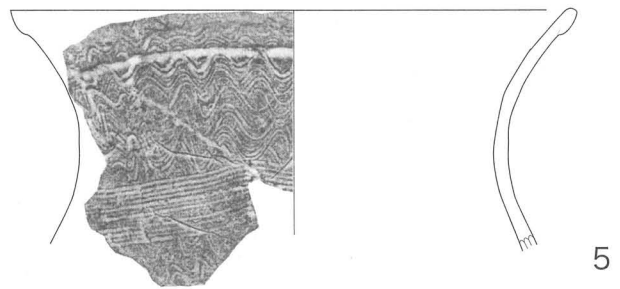
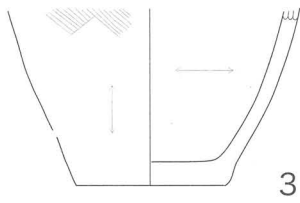
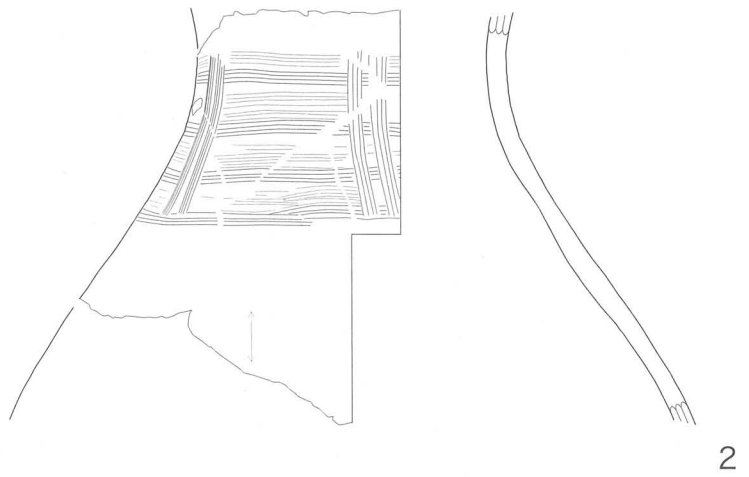
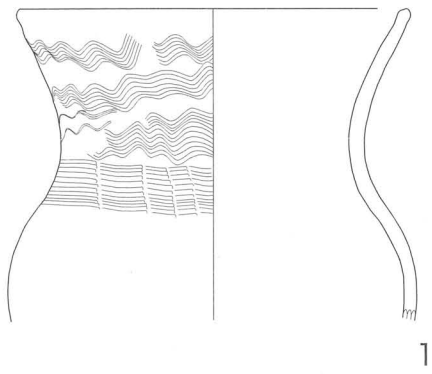
第 61 図 第 124 号竖穴建物跡出土遺物 (3:1)



第 62 図 第 102 号土坑跡出土遺物 (3:1)

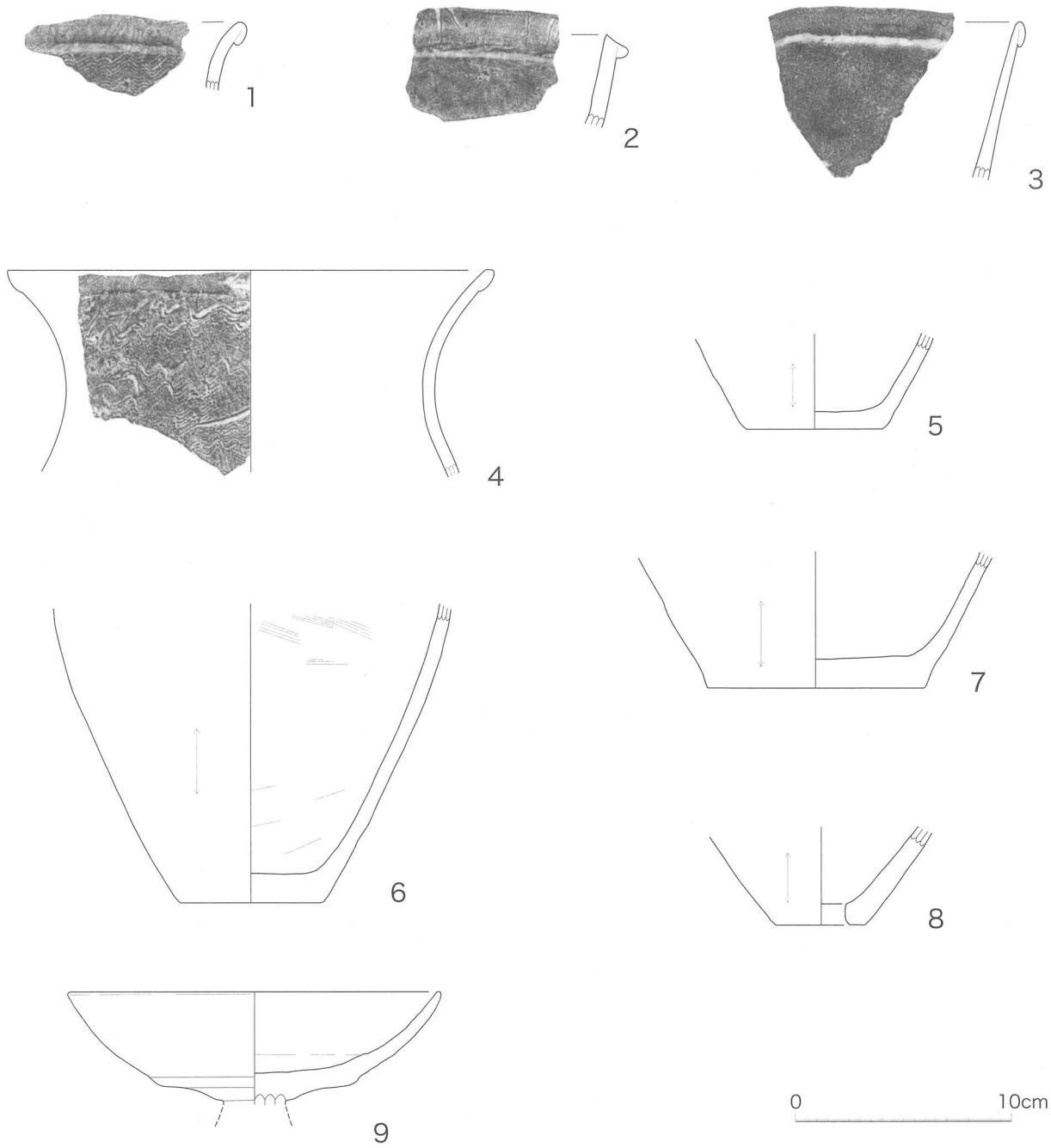


第 63 図 第 124 号土坑跡出土遺物 (3:1)

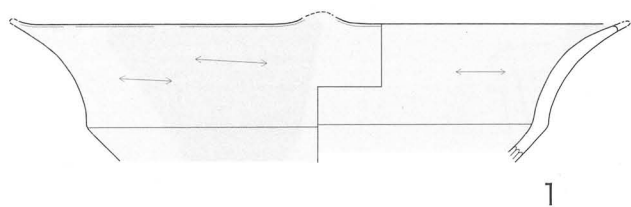


0 10cm

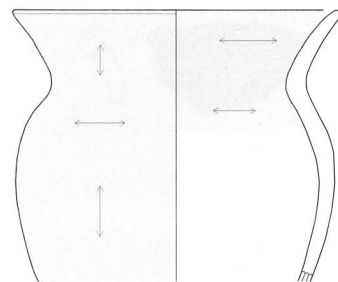
第 64 图 第 123 号竖穴建物跡出土遺物 (3:1)



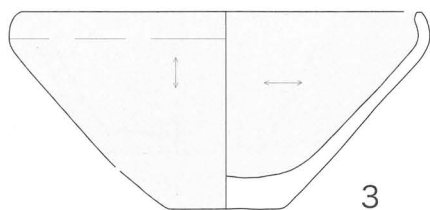
第 65 図 第 125 号竖穴建物跡出土遺物 (3:1)



1



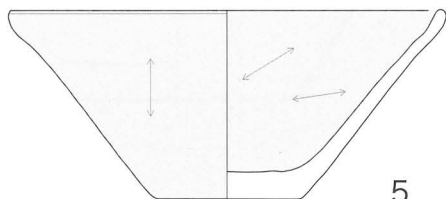
2



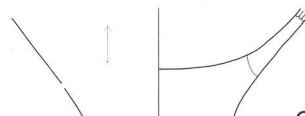
3



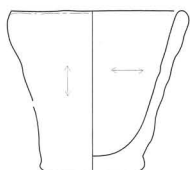
4



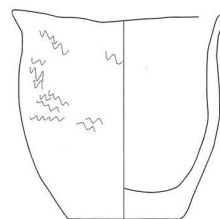
5



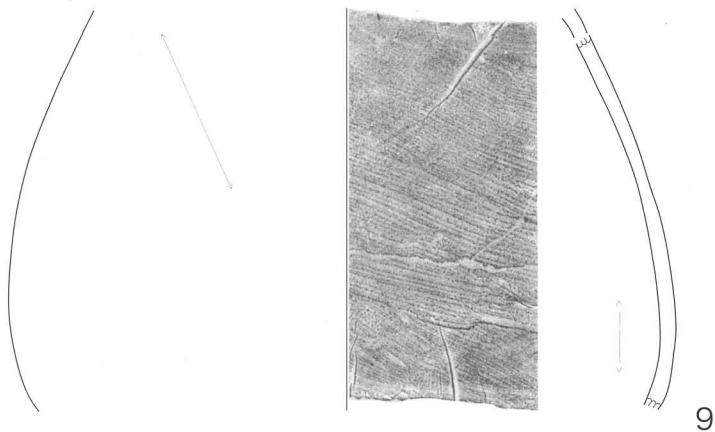
6



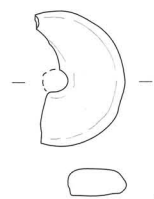
7



8



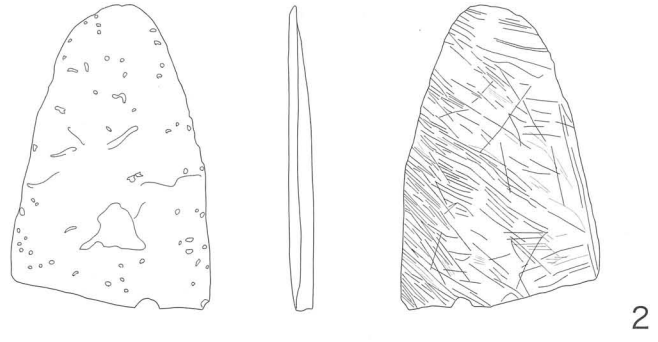
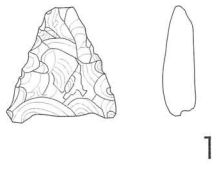
9



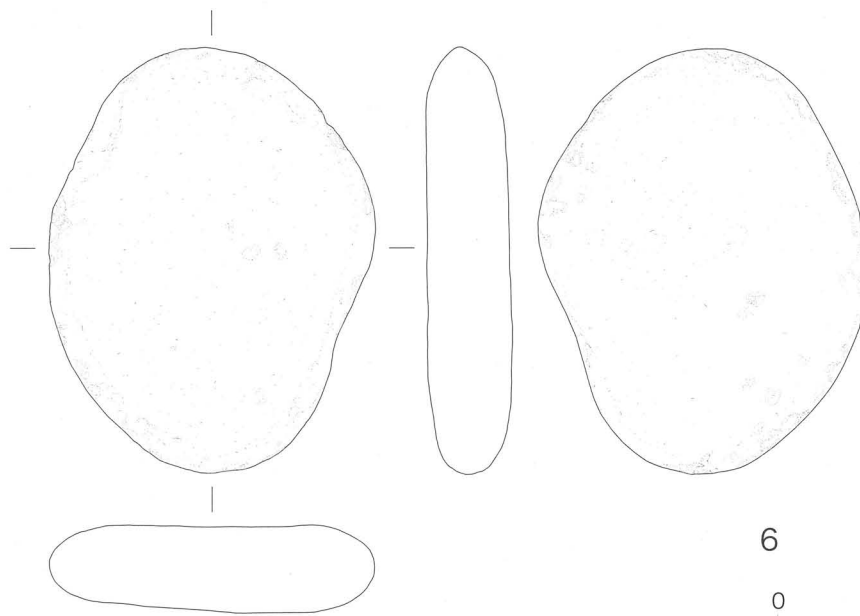
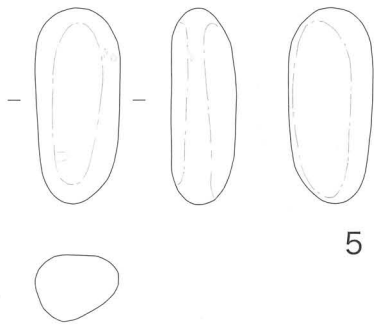
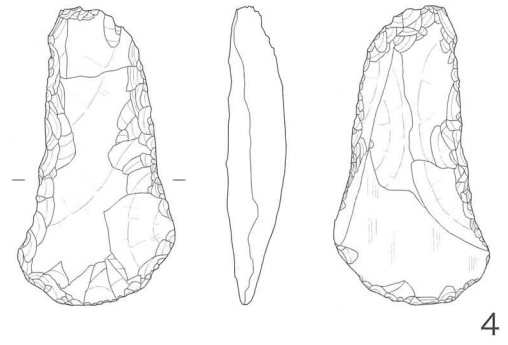
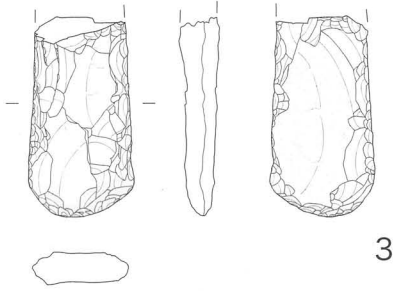
10



第 66 图 第 126 号竖穴建物跡出土遺物 (3:1)



※ 1、2は原寸大



6
0 10cm

第67図 石器 (3:1)

法量の口径、底径は器種により、次のとおり読み分ける。(蓋C、高坏、器台)底径→裾径 (蓋)口径→揃み径、底径→裾径

数値の() 書きは残存値、() 書きは復元値、-は計測あるいは復元不能であることを示す。

赤色塗彩された蓋C、高坏、器台の脚部内側、及び鉢の底部裏側の色調は、特記事項欄に記した。

図版番号	出土遺構	器種・器形	法量(単位:mm)			胎土				赤色塗彩		文様・成形・整形等の特徴	特記事項
			口径	器高	底径	含有物	焼成	色調(外面)	色調(内面)	外面	内面		
32-1	SB99	壺A1	(206.0)	(118.0)	-	雲母、石英	良好	5YR6/6 橙	2.5YR5/6 明赤褐			(外) 籐状文2連止め、波状文11本 (内) 縦ミガキ、口縁部付近: ナデ	
32-3	SB99	壺	-	(47.0)	66.0	雲母、石英	良好	2.5YR4/6 赤褐	2.5YR5/6 明赤褐		○	(外) 縦ミガキ(内) ハケ	底部 5YR6/6 橙
32-4	SB99	土製円盤(土器片)	66.0	59.0	7.5	雲母、石英	良好	5YR6/6 橙	5YR6/4 にぶい橙			(外) ミガキ (内) ミガキ	寸法は左から順に最大径・最小径・厚さ(瓶?)
33-1	SB102	高坏C	142.0	(137.0)	-	石英	良好	10R3/6 暗赤	10R3/6 暗赤		○ ○	(外) 縦ミガキ(内) 横ミガキ	(脚内) 2.5YR5/6 明赤褐
34-1	SB103	壺A1	-	(122.0)	-	石英	良好	5YR6/6 橙	5YR6/4 にぶい橙			(外) 籐状文3連止め、波状文8本 斜ミガキ後 施文 (内) 横ミガキ	
34-2	SB103	器台?	-	(42.0)	-	雲母、石英、ハミス	良好	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙			(外) 縦ミガキ(台内) ハケ調整痕を残す	台内 5YR6/6 橙
35-1	SB106	壺?	-	(95.0)	89.0	雲母、石英、粗砂粒	良好	10R4/6 赤	10R4/6 赤		○ ○	(外) 縦ミガキ、底部周辺-地肌を残す (内) 底部付近に赤彩	内面底部に赤彩(ミガキあり)、違和感のある壺(壺ではない?)
36-1	SB107	壺	-	(70.0)	114.5	雲母、石英、ハミス、粗砂粒	良好	5YR4/6 赤褐	2.5YR4/6 赤褐		○	(外) 縦ミガキ(内) ハケ+ナデ	
37-1	SB100	壺A2	194.0	(192.0)	-	石英	良好	10R4/6 赤	10R4/6 赤		○ ○	(外) T字文11本 口縁部付近: 横ミガキ 胴: 縦ミガキ(内) 口縁部付近: 横ミガキ 胴: 斜ミガキ	
37-2	SB100	壺	-	(99.0)	73.0	雲母、石英、粗砂粒	良好	10R4/6 赤	2.5YR5/6 明赤褐		○	(外) 縦ミガキ(内) ヘラ削り	内面の剥離が著しい
37-3	SB100	壺A1	126.0	(114.0)	-	雲母、石英 僅	良好	5YR4/2 灰褐	5YR5/4 にぶい赤褐			(外) 籐状文3連止め、波状文7本 胴下部: 縦ミガキ(内) 横ミガキ	
37-4	SB100	壺A1	195.5	244.5	79.0	雲母、石英	良好	2.5YR4/6 赤褐	2.5YR4/6 赤褐			(外) 籐状文、波状文5本 胴下半部: 縦ミガキ(内) 胴上半部: 横ミガキ 胴下半部: ナデ	
37-5	SB100	壺A1	110.5	109.0	52.5	石英	良好	2.5YR4/4 にぶい赤褐	2.5YR4/4 にぶい赤褐			(外) 籐状文2連止め、波状文8本? 胴下半部: 縦ミガキ(内) 丁寧なナデ	
38-1	SB110	壺	-	(92.0)	-	雲母、石英	良好	10R4/6 赤	2.5YR5/6 明赤褐		○	(外) 頸部: 楕円T字文 横線8本分? 縦線6本分 横ミガキ(内) ナデ	
38-2	SB110	鉢B	87.5	60.0	42.5	雲母、石英	良好	10R4/6 赤	10R4/6 赤		○ ○	(外) 縦ミガキ(内) 横ミガキ	(底) 2.5YR5/6 明赤褐
39-1	SB105	壺	(178.0)	(128.0)	-	雲母、石英	良好	5YR4/3 にぶい赤褐	5YR5/6 明赤褐			(外) 楕円波状文9本 籐状文2連止め、?本(内) ナデ	
39-2	SB105	鉢	-	(59.0)	59.0	石英	良好	10R3/6 暗赤	2.5YR4/6 赤褐			(外) 縦ミガキ(内) ナデ	
39-3	SB105	壺A2	-	(217.0)	72.0	雲母、石英	良好	10YR5/2 灰黄褐	7.5YR5/3 にぶい褐			(外) 波状文7本 胴下半部: 縦ミガキ(内) 頸部付近: 横ミガキ 胴下半部: ナデ	
39-4	SB105	壺C	(97.0)	(68.0)	-	雲母、石英	良好	7.5YR4/2 灰褐	2.5YR4/2 灰赤			(外) 籐状文、楕円波状文6本一同一原体 籐状文→波状文の施文	
39-5	SB105	壺C	(144.0)	(69.0)	-	雲母	良好	5YR4/2 灰褐	2.5YR4/4 にぶい赤褐				
39-6	SB105	壺C1	141.0	(135.0)	-	雲母、石英	良好	2.5YR3/4 暗赤褐	2.5YR3/4 暗赤褐			(外) 籐状文3連止め、波状文6本(内) 横ナデ	
39-7	SB105	深鉢	-	(80.0)	-	雲母、石英	良好	10R3/6 暗赤	5YR4/4 にぶい赤褐		○	(外) ミガキ(内) ナデ	
39-8	SB105	甌	-	(33.0)	61.5	雲母、石英	良好	2.5YR4/4 にぶい赤褐	2.5YR4/6 赤褐			(内) ハケ調整後ナデ	
39-9	SB105	甌	-	(103.0)	68.0	雲母、石英	良好	7.5YR6/4 にぶい橙	2.5YR5/6 明赤褐			(外) 縦ミガキ(内) 横ミガキ	
39-10	SB105	甌	-	(71.0)	56.0	石英多、雲母	良好	5YR4/2 灰褐	5YR4/3 にぶい赤褐			(内) ハケ調整痕残す(内) ハケ調整痕残す 内側の調整は外面に比して荒い	
40-11	SB105	器台	-	(19.0)	-	雲母、石英、ハミス	良好	5YR7/6 橙	5YR7/6 橙			(外) 坏下半部: 縦ミガキ(内) 横ナデ	
40-12	SB105	器台	106.0	82.0	96.0	雲母、石英、粗砂粒	良好	7.5YR5/6 明褐	2.5YR4/6 赤褐			(外) ナデ(内) ナデ(台内) ハケ調整痕を残す	台内 5YR4/6 赤褐
40-13	SB105	鉢C	(116.0)	130.0	71.5	石英 僅	良好	2.5YR4/6 赤褐	2.5YR4/6 赤褐			(外) 口縁部付近: 横ミガキ 胴中位以下: 縦ミガキ(内) 縦ミガキ 口縁部周辺: ナデ	片口あり
40-14	SB105	土製円盤	34.5	28.5	6.0	雲母、石英、ハミス	良好	7.5YR6/4 にぶい橙	2.5YR6/6 橙			(外) 楕円波状文9本 籐状文?本(内) ナデ	寸法は左から順に最大径・最小径・厚さ
40-15	SB105	壺A	-	(103.0)	(94.0)	石英多、粗砂粒	良好	2.5YR5/8 明赤褐	2.5YR5/6 明赤褐			(外) 縦ミガキ	
40-16	SB105	高坏A	(266.0)	(267.0)	178.0	雲母、石英	良好	10R4/6 赤	10R4/6 赤		○ ○	(外) 坏部: 横ミガキ 脚部: 縦ミガキ(内) 坏部: 横ミガキ 脚部: ナデ	(脚内) 2.5YR5/6 明赤褐
41-1	SB108	壺A2	(225.0)	(213.0)	-	雲母、長石	良好	5YR4/6 赤褐	2.5YR5/6 明赤褐			(外) 波状文6本 胴下半部: 縦ミガキ(内) 横ミガキ	
41-2	SB108	壺A2	156.0	(133.0)	-	雲母、石英	良好	2.5YR5/6 明赤褐	2.5YR5/6 明赤褐			(外) 施文前: 斜ミガキ 胴下部: 縦ミガキ(内) 口縁付近: 横ミガキ 胴下半部: 縦ミガキ	(外) 波状文11本?
41-3	SB108	壺	-	(130.5)	68.0	雲母、石英、粗砂粒	良好	2.5YR5/6 明赤褐	2.5YR5/6 明赤褐			(外) 縦ミガキ(内) ハケ	
41-4	SB108	壺A1	137.0	(176.0)	-	雲母、石英 僅	良好	5YR4/3 にぶい赤褐	7.5YR4/3 褐			(外) 籐状文3連止め、波状文9本? 胴下半部: 縦ミガキ(内) ナデ	

第14表 土器観察表(その1)

図版 番号	出土 遺構	器種・ 器形	法量(単位:mm)			胎土				赤色塗彩		文様・成形・整形等の特徴	特記事項
			口径	器高	底径	含有物	焼成	色調(外面)	色調(内面)	外面	内面		
41-5	SB108	甕	<144.0>	(97.0)	-	石英	良好	5YR4/2 灰褐	2.5YR4/4 にぶい赤褐			(外)櫛描波状文11本 左回り 施文上一下	
41-6	SB108	壺	-	(60.0)	50.0	雲母、石英	良好	5YR5/6 明赤褐	5YR5/6 明赤褐			(外)縦ミガキ(内)ハケ調整	
41-7	SB108	蓋A2	64.0	(62.0)	-	雲母、石英、 ハミス	良好	2.5YR5/6 明赤褐	5YR4/3 にぶい赤褐			(外)縦ミガキ(内)横ミガキ	
41-8	SB108	蓋A2	69.5	(57.0)	-	雲母、石英	良好	7.5YR4/6 にぶい褐	7.5YR4/2 灰褐			(外)ナデ(内)ハケ調整後ナデ	内側に黒色の付着物あり
42-9	SB108	壺A2	222.0	(105.0)	-	石英	良好	10R5/8 赤	10R5/8 赤	○	○	(外)櫛描文8本 口縁付近:縦ミガキ (内)口縁付近:横ミガキ	(外)櫛描文部分2.5YR5/8 明 赤褐 (内)下部2.5YR5/8 明赤 褐
42-10	SB108	壺	-	(90.0)	82.0	雲母、石英	良好	10R3/6 暗赤	2.5YR5/6 明赤褐	○		(外)縦ミガキ(内)ハケ調整	
42-12	SB108	壺	-	61.5	(80.0)	雲母、石英、 ハミス	良好	2.5YR5/6 明赤褐	2.5YR6/6 橙	○		(外)縦、横ミガキ(内)粗いハケ調整	
42-13	SB108	高坏	-	(96.0)	<126.0>	雲母、石英	良好	10R4/6 赤	5YR5/6 明赤褐	○	○	(外)縦ミガキ(内)ナデ	脚内側 5YR5/6 明赤褐色
42-14	SB108	甕C	-	(71.0)	98.0	雲母、石英	良好	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR6/6 橙			(外)縦ミガキ(脚内)ナデ(坏内)ナデ	
42-15	SB108	鉢B	(170.0)	(77.0)	(57.0)		良好	10YR4/4 赤褐	10YR4/4 赤褐	○	○	(外)縦ミガキ(内)横ミガキ	内側底部付近の剥離が著しい
42-16	SB108	不明土 製品	(51.5)	(44.0)	(21.0)	雲母、石英	良好	2.5YR5/8 明赤褐	2.5YR5/8 明赤褐				寸法は左から順に最大径・最 小径・厚さ
42-17	SB108	土製円 盤	33.5	29.0	6.5	雲母、石英	良好	5YR6/4 にぶい橙	2.5YR6/6 橙				寸法は左から順に最大径・最 小径・厚さ(壺?)
42-18	SB108	土製円 盤	41.0	38.5	7.5	雲母、石英	良好	10YR6/3 にぶい黄褐	2.5YR5/6 明赤褐				寸法は左から順に最大径・最 小径・厚さ(壺?)
42-19	SB108	土製円 盤	37.5	36.0	5.0	雲母、石英	良好	5YR6/4 にぶい橙	2.5YR6/6 橙				寸法は左から順に最大径・最 小径・厚さ
42-20	SB108	土製円 盤	(41.5)	(27.5)	(7.5)	雲母、石英	良好	2.5YR5/8 明赤褐	2.5YR5/8 明赤褐				寸法は左から順に最大径・最 小径・厚さ ※表に赤彩 (壺?)
42-21	SB108	土製円 盤	(36.5)	(19.5)	(6.0)	雲母、石英	良好	2.5YR5/8 明赤褐	2.5YR5/8 明赤褐				寸法は左から順に最大径・最 小径・厚さ ※表に赤彩 (壺?)
43-1	SB109	甕	(138.0)	(101.0)	-	雲母、石英	良好	7.5YR4/1 褐灰	5YR5/6 明赤褐			(外)簾状文2連止め、波状文9本 簾状 文→波状文 施文(内)横ナデ	
43-2	SB109	甕A1	(132.0)	(89.0)	-	雲母、石英	良好	2.5YR4/6 赤褐	2.5YR4/4 にぶい赤褐			(外)簾状文2連止め、波状文9本 簾状 文→波状文 施文(内)横ミガキ	
43-3	SB109	甕A	-	(113.0)	-	雲母、石英	良好	2.5YR5/6 明赤褐	2.5YR5/6 明赤褐			(外)胴中位:波状文 斜ミガキ 胴下半 部:縦ミガキ(内)横ミガキ	
43-4	SB109	甕	-	116.0	<16.0>	雲母、石英、 ハミス、粗砂 粒	良好	5YR5/6 明赤褐	5YR5/6 明赤褐				
43-5	SB109	壺	-	75.0	<19.0>	雲母、石英、 粗砂粒	良好	5YR5/6 明赤褐	5YR5/6 明赤褐			(外)縦ミガキ	
43-6	SB109	壺A2	(223.0)	(138.0)	-	雲母、石英	良好	10R3/6 暗赤	10R3/6 暗赤	○	○	(外)口縁部:縦ミガキ T字文(縦2本) 9本(内)口縁部:縦ミガキ 下部:ナデ	(内)下部:2.5YR5/6 明赤褐
43-7	SB109	壺A	-	(52.5)	-	雲母、石英、 ハミス	良好	2.5YR5/6 明赤褐	2.5YR5/6 明赤褐			(外)隆帯貼付け、縦ミガキ(内)横ミガ キ	
43-8	SB109	鉢B	(114.0)	62.0	46.0	雲母、石英	良好	10R4/6 赤	10R4/6 赤	○	○	(外)縦ミガキ(内)横ミガキ	
43-9	SB109	鉢	-	(38.0)	<39.0>	雲母、石英	良好	10R3/6 暗赤	10R3/6 暗赤	○	○	(外)縦ミガキ(内)横ミガキ	底裏 5YR5/4 にぶい赤褐
43-10	SB109	蓋D	(57.0)	(48.0)	(7.0)	雲母、石英	良好	10R4/6 赤	10R4/6 赤	○	○	ミガキ	2孔あり
44-11	SB109	高坏A	291.0	(103.0)	-	雲母、石英	良好	10R4/6 赤	10R4/6 赤	○	○	(外)口縁付近→横ミガキ、胴→縦ミガキ (内)横ミガキ	
44-12	SB109	高坏	-	(78.0)	-	雲母、石英、 ハミス、粗石粒	良好	10R4/6 赤	10R4/6 赤	○	○	(外)縦ミガキ(内)縦+横ミガキ混在 (脚内)ハケ	脚内側 7.5YR6/6 橙
44-13	SB109	高坏B	(272.0)	(92.0)	-	雲母、石英	良好	2.5YR4/6 赤褐	2.5YR4/6 赤褐	○	○	(外)ミガキ→方向不明(内)ミガキ→方向 不明	赤彩:はげている部分多い 口唇部突起4ヶ所か?
44-14	SB109	高坏	-	(36.0)	-	雲母、石英	良好	10R4/6 赤	10R4/6 赤	○	○	(外)縦ミガキ(内)横ミガキ(脚内)ナデ	(脚内)2.5YR5/6 明赤褐
44-15	SB109	高坏	-	<83.0>	(188.0)	雲母、石英、 粗砂粒	良好	10YR6/4 にぶい橙	5YR5/4 にぶい赤褐			(外)縦ミガキ、一部赤彩痕が残る(内) 横ミガキ	三角透し孔あり
44-16	SB109	高坏	-	(62.0)	105.0	雲母、石英	良好	10R4/6 赤		○		(外)縦ミガキ(脚内)横ナデ	(坏内)剥離 (脚内)2.5YR5/6 明赤褐
44-17	SB109	紡錘車	56.0	53.5	8.0	雲母、石英 僅	良好	5YR5/4 にぶい赤褐	5YR5/4 にぶい赤褐				寸法は左から順に最大径・最 小径・厚さ
44-18	SB109	土製円 盤	56.0	51.5	6.5	雲母、石英	良好	2.5YR5/6 明赤褐	2.5YR5/6 明赤褐			(外)ミガキ(内)ハケ調整	寸法は左から順に最大径・最 小径・厚さ
44-19	SB109	土製円 盤	47.5	39.0	6.5	雲母、石英	良好	10R4/6 赤	10R4/6 赤	○	○	(外)ミガキ(内)ミガキ	寸法は左から順に最大径・最 小径・厚さ
44-20	SB109	土製円 盤	(38.5)	(25.5)	(5.0)	雲母、石英	良好	10R4/6 赤	5YR6/6 橙	○		(外)ミガキ(内)ハケ調整	寸法は左から順に最大径・最 小径・厚さ
45-1	SB111	壺A	-	(61.0)	-	雲母、石英、 ハミス	良好	10R4/6 赤	10R4/6 赤	○	○	(外)縦ミガキ、T字文6本、文様帯中に 赤色塗彩部分を加える(内)口縁部:赤 色塗彩+横磨き 頸部:横ナデ	(内)頸部:2.5YR5/6 明赤褐
45-2	SB111	甕	-	<43.0>	(60.0)	雲母、石英、 粗砂粒	良好	5YR4/4 にぶい赤褐	2.5YR5/6 明赤褐			(外)縦ミガキ(内)横ナデ	

第15表 土器観察表(その2)

図版 番号	出土 遺構	器種・ 器形	法量(単位:mm)			胎土				赤色彩装		文様・成形・整形等の特徴	特記事項
			口径	器高	底径	含有物	焼成	色調(外面)	色調(内面)	外面	内面		
45-3	SB111	鉢B	(100.0)	43.0	51.0	雲母、石英	良好	10R4/6 赤	10R4/6 赤	○	○	(外)斜ミガキ(内)横ミガキ	
46-1	SB114	蓋A2	(51.0)	(89.0)	-	雲母、石英、 粗砂粒	良好	10R4/6 赤	10R4/6 赤	○	○	(外)縦方向+横方向ヘラミガキ(内)横 方向ヘラミガキ	頂部および裾部を失う
46-2	SB114	蓋A1	45.0	(69.0)	-	石英多、雲母	良	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙			(外)縦ミガキ(内)横ミガキ	
46-3	SB114	鉢	-	(58.0)	74.0	雲母、石英	良好	10R4/6 赤	10R4/6 赤	○	○	(外)縦ミガキ(内)横ミガキ	底裏 7.5YR6/6 橙
47-1	SB113	甕	(228.0)	(160.0)	-	雲母、石英	良好	7.5YR4/3 褐	5YR6/6 橙			(外)簾状文2連止め、描波状文8本 胴:横ナデ(内)横ナデ	
47-2	SB113	甕A1	(230.0)	(107.0)	-	雲母、石英	良好	5YR4/4 にぶい赤褐	5YR4/4 にぶい赤褐			(外)簾状文3連止め?6本2~3列、波 状文(内)ナデ	
47-3	SB113	甕A1	(162.0)	(90.0)	-	雲母、石英、 ハミス	良好	2.5YR5/6 明赤褐	2.5YR5/6 明赤褐			(外)簾状文2連止め、波状文8本(内) 横ナデ	
47-4	SB113	甕B1	-	(115.0)	-	雲母、石英、 粗砂粒	良好	5YR4/6 赤褐	7.5YR6/4 橙			(外)簾状文4連止め?、斜走文8本 (内)ナデ	
47-5	SB113	甕B2	(273.0)	(238.0)	-	雲母、石英	良好	5YR6/6 橙	5YR5/4 にぶい赤褐			(外)斜走文7本(内)ナデ	
47-6	SB113	壺A1	(142.0)	(80.0)	-	雲母、石英、 ハミス	良好	5YR6/6 橙	2.5YR5/6 明赤褐			(外)縦ミガキ(内)横ミガキ	
47-7	SB113	壺A	-	(65.0)	66.0	雲母、石英、 ハミス	良好	2.5YR4/3 にぶい赤褐	5YR5/4 にぶい赤褐			(外)縦ミガキ(内)横ミガキ	
48-8	SB113	壺	-	73.0	(125.5)	雲母、石英、 粗砂粒	良好	5YR4/6 赤褐	5YR4/6 赤褐			(外)ヘラ削り後、ヘラミガキ(内)ヘラ 削り	底部に穿孔
48-9	SB113	壺A2	-	(161.0)	-	雲母、石英	良好	2.5YR5/6 明赤褐	2.5YR5/6 明赤褐			(外)頸部に楯状文?本、口縁部付近: 縦ミガキ(内)横ミガキ	
48-10	SB113	高坏	-	(34.0)	-	石英	良好	10R4/6 赤	10R4/6 赤	○	○	(外)縦ミガキ(内)横ミガキ	脚内 2.5YR6/6 橙
48-11	SB113	高坏C	-	(52.0)	-	石英	良好	10R4/6 赤	2.5YR5/6 明赤褐	○		(外)縦ミガキ(坏内)剥離が著しい	
48-12	SB113	壺A	-	(189.0)	103.0	雲母、石英	良好	10R5/8 赤	2.5YR6/6 橙	○		(外)縦ミガキ(内)ハケ調整後横ナデ	
48-13	SB113	高坏C	-	(72.0)	-	石英、ハミス	良好	10R3/6 暗赤	10R3/6 暗赤	○	○	(外)縦ミガキ(内)横ミガキ	(脚内)2.5YR5/6 明赤褐
48-14	SB113	高坏C	-	(68.0)	93.0	雲母、石英、 ハミス多	良好	10R4/6 赤	10R4/6 赤	○	○	(外)縦ミガキ(内)縦ナデ	(脚内)2.5YR5/6 明赤褐
48-15	SB113	高坏	-	(91.0)	104.0	石英、ハミス	良好	10R4/6 赤				(外)縦ミガキ(内)縦ナデ	(脚内)2.5YR5/8 明赤褐 坏 内表面剥離
48-16	SB113	深鉢	(138.0)	(104.0)	-	雲母、石英	良好	10R4/6 赤	2.5YR4/6 赤褐	○		(外)横ミガキ(内)横ミガキ	口縁部に2孔あり
48-17	SB113	深鉢	-	(83.0)	-	雲母、石英	良好	10R4/6 赤	2.5YR4/4 にぶい赤褐	○		(外)簾状文7本?2連止め 横ミガキミ ガキ→斜線→簾状文(内)横ミガキ	(内)上部:赤彩
49-1	SB115	壺A1	138.0	251.0	68.0	雲母、石英、 ハミス	良好	2.5YR5/4 にぶい赤褐	2.5YR4/6 赤褐			(外)縦ミガキ(内)横ミガキ	ほぼ完形
49-2	SB115	壺A	-	(106.0)	-	雲母、石英	良好	2.5YR5/8 明赤褐	2.5YR5/8 明赤褐			(外)縦ミガキ(内)ハケ調整後ナデ	
49-3	SB115	甕	-	(60.0)	(68.0)	石英、ハミス	良好	2.5YR6/6 橙	2.5YR6/6 橙			(外)縦ミガキ(内)ハケ調整後ナデ	
49-4	SB115	壺	-	(177.0)	75.0	石英、粗砂粒	良好	5YR5/4 赤褐	5YR5/4 赤褐			(外)縦ミガキ(内)ヘラ削り+ナデ、輪積 痕残る部分あり	内側底部~胴中位に変色部 5YR5/4 にぶい赤褐 黒い附着 物が上澄みのように残る。底 部と平行ではない。
49-5	SB115	甕	-	(128.0)	78.0	雲母、石英	良好	2.5YR5/6 明赤褐	5YR6/6 橙			(外)縦ミガキ(内)横ミガキ	
49-6	SB115	高坏B	(252.0)	(90.0)	-	雲母、石英	良好	10R4/6 赤	10R4/6 赤	○	○	(外)横ミガキ(内)横ミガキ	
49-7	SB115	鉢B	190.0	92.0	51.0	石英	良好	10R4/6 赤	10R4/6 赤	○	○	(外)ヘラ削り後横ミガキ(内)横ミガキ (底)ヘラ調整	片口あり、底部 5YR6/6 橙
49-8	SB115	鉢?	-	(46.0)	38.0	雲母、石英	良好	10R4/4 赤褐	10R4/4 赤褐	○	○	(外)縦ミガキ(内)横ミガキ+ナデ(底) ヘラ削り+ナデ	底部 5YR6/6 橙
50-1	SB117	甕A1	172.0	241.0	76.5	石英	良好	2.5YR4/6 赤褐	2.5YR5/4 にぶい赤褐			(外)簾状文、波状文8本 胴下半部:縦 ミガキ(内)横ナデ	
50-2	SB117	壺A1	183.0	213.0	73.0	雲母、石英、 ハミス	良好	5YR4/3 にぶい赤褐	2.5YR5/6 明赤褐			(外)簾状文2連止め、波状文10本 胴 下半部縦ミガキ(内)横ナデ	
50-3	SB117	甕A1	-	(163.0)	74.5	石英	良好	2.5YR5/6 明赤褐	2.5YR6/6 橙			(外)簾状文2連止め、波状文8本 胴下 半:縦ミガキ(内)ナデ	
50-4	SB117	甕A1	132.0	134.0	66.5	雲母	良好	2.5YR4/8 赤褐	2.5YR4/8 赤褐			(外)簾状文2連止め、波状文9本 施文 前胴上部:斜ミガキ(内)横ナデ	
50-5	SB117	甕C	124.0	(110.0)	-	石英、ハミス	良好	5YR4/3 にぶい赤褐	5YR4/3 にぶい赤褐			(外)簾状文2連止め、波状文7本 胴下 部:ミガキ(内)横ミガキ	
50-6	SB117	甕	(124.0)	142.0	56.5	金雲母、石 英、砂粒多	良好	7.5YR5/2 灰褐	7.5YR5/3 にぶい褐			(外)縦ミガキ 口唇部に刻み(内)口縁 付近:横ミガキ	
50-7	SB117	甕	171.5	(128.0)	-	雲母、黒色 粒子	良好	7.5YR4/1 褐灰	7.5YR5/2 灰褐			(外)簾状文2連止め7本、口縁部及び 頸部下まで縄文(RL?)施文、胴下半 縦ミガキ(内)丁寧な横ミガキ	器面内側にベンガラ附着箇所 あり
51-8	SB117	蓋A1	52.0	98.0	190.0	雲母、石英、 ハミス	良好	5YR4/3 にぶい赤褐	5YR4/4 にぶい赤褐			(外)縦ミガキ(内)横ミガキ	孔あり
51-9	SB117	蓋A1	43.0	83.0	174.0	雲母、石英	良好	2.5YR5/6 明赤褐	2.5YR5/6 明赤褐			(外)縦ミガキ 裾付近横ミガキ(内)横 ミガキ	孔あり
51-10	SB117	壺A2	328.0	(543.0)	110.0	雲母、石英	良好	10R4/8 赤	2.5YR5/6 明赤褐	○		(外)縦ミガキ、頸部にT字文(内)ナデ	
52-11	SB117	壺A1	-	(330.0)	76.0	雲母、石英	良好	10R4/8 赤	2.5YR5/6 明赤褐	○		(外)縦ミガキ、頸部にT字文(内)ナデ	

第16表 土器観察表(その3)

図版番号	出土遺構	器種・器形	法量(単位:mm)			胎土				赤色塗彩		文様・成形・整形等の特徴	特記事項
			口径	器高	底径	含有物	焼成	色調(外面)	色調(内面)	外面	内面		
52-12	SB117	壺A	-	(68.0)	-	雲母、石英、パミス	良好	2.5YR5/8 明赤褐	2.5YR5/8 明赤褐			(外)縦ミガキ 頸部に隆帯(内)ナデ	
52-13	SB117	鉢C	(116.0)	(58.0)	-	雲母、石英	良好	10R5/8 赤	10R5/8 赤	○	○	(外)横ミガキ(内)横ミガキ	
52-14	SB117	甕C	-	(63.0)	(81.0)	雲母、石英	良好	5YR4/2 灰褐	2.5YR5/6 明赤褐			(外)縦ミガキ(内)横ナデ	
52-15	SB117	壺A?	-	(106.0)	-	雲母、石英	良好	10R4/6 赤	2.5YR5/6 明赤褐	○		(外)胴中位:横ミガキ、胴下位:縦ミガキ(内)ハケ調整後ナデ	
52-16	SB117	高坏C	140.0	128.0	91.0	雲母、石英	良好	10R4/8 赤	10R4/8 赤	○	○	(外)坏部:横ミガキ 脚部:縦ミガキ(内)横ミガキ(脚内)横ナデ	(脚内)2.5YR5/6 明赤褐
52-17	SB117	甕C	-	(117.0)	90.0	雲母、石英	良好	5YR4/6 赤褐	5YR4/4 にぶい赤褐			(外)縦ミガキ(内)坏:横ミガキ 脚:ナデ	接合部径:53.0 (脚内)2.5YR4/6 赤褐
53-1	SB118	壺A2	(266.0)	(182.0)	-	雲母、石英	良好	2.5YR4/6 赤褐	2.5YR5/8 明赤褐			(外)波状文9本?(内)横ミガキ	
53-2	SB118	甕A1	-	(143.0)	52.0	雲母、石英	良好	5YR4/3 にぶい赤褐	7.5YR6/4 にぶい橙			(外)波状文6本 簾状文6本 胴下半:縦ミガキ(内)ナデ	
53-3	SB118	甕A1	107.0	107.0	46.0	雲母、石英	良好	2.5YR4/4 にぶい赤褐	5YR3/1 黒褐			(外)波状文、簾状文一等連止め7本 胴中位以下:縦ミガキ(内)横ミガキ	
53-4	SB118	甕A2	(96.0)	93.0	52.5	雲母、石英、パミス	良好	2.5YR3/3 暗赤褐	2.5YR3/3 暗赤褐			(外)波状文6本 胴中位以下:縦ミガキ(内)横ナデ	
53-5	SB118	甕A2	216.0	81.0	328.5	雲母、石英、パミス	良好	2.5YR5/8 明赤褐	2.5YR5/8 明赤褐			(外)波状文6本 口縁部:折り返し	
53-6	SB118	甕A2	165.0	218.0	62.5	雲母、石英	良好	2.5YR5/6 明赤褐	2.5YR5/6 明赤褐			(外)波状文5本? 胴下半:縦ミガキ(内)横ナデ	
54-7	SB118	甕C	-	(130.0)	-	雲母、石英	良好	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/4 にぶい褐			(外)波状文6本、直線文、胴中位以下:縦ミガキ(内)ハケ調整後横ナデ	
54-8	SB118	壺	(242.0)	(124.0)	-	雲母、石英	良好	5YR5/6 明赤褐	5YR5/6 明赤褐			(外)T字文8本、縦ミガキ(脚内)横ミガキ	
54-9	SB118	壺A2	-	(139.0)	-	雲母、石英、パミス	良好	2.5YR4/6 赤褐	2.5YR4/6 赤褐			(外)T字文10本 T字の上下赤彩痕(内)上半:横ミガキ	
54-10	SB118	壺B?	-	(103.0)	-	雲母、石英	良好	7.5YR5/3 にぶい褐	5YR4/3 にぶい赤褐			(外)T字文がない、縦ミガキ(内)横ナデ(調整不足による輪積痕を残す)	
54-11	SB118	高坏C	(157.0)	(142.0)	-	雲母、石英多	良好	10R4/6 赤	10R4/6 赤	○	○	(外)坏部:横ミガキ 脚部:縦ミガキ(坏内)横ミガキ(脚内)裾付近:赤彩	(脚内)2.5YR5/6 明赤褐
54-12	SB118	鉢B	196.0	75.0	59.0	雲母、石英、パミス	良好	2.5YR5/6 明赤褐	2.5YR5/6 明赤褐	○	○	(外)縦ミガキ(内)横ミガキ	
55-1	SB119	蓋A1	46.0	(82.0)	-	雲母、石英、粗砂粒	良好	5YR5/6 明赤褐	5YR3/3 暗赤褐			(外)縦ヘラ削りナナデ(内)弱い横ミガキ	掴みの小孔は内側→外側
55-2	SB119	蓋A2	48.5	(62.0)	-	雲母、石英	良好	2.5YR6/6 橙	5YR5/4 にぶい赤褐			(外)縦ミガキ(内)ハケ	
55-3	SB119	甌	-	(71.0)	52.0	雲母、石英、粗砂粒	良好	2.5YR4/4 にぶい赤褐	2.5YR4/6 赤褐			(外)縦ヘラミガキ(内)横ヘラミガキ	口縁部を欠く
55-4	SB119	甕A2	(266.5)	378.0	118.0	雲母、石英	良好	2.5YR4/4 にぶい赤褐	2.5YR4/4 にぶい赤褐			(外)波状文 胴下半:縦ミガキ(内)横ナデ	
56-5	SB119	高坏B	(282.0)	(110.0)	-	雲母、石英	良好	10R4/8 赤	10R4/8 赤	○	○	(外)縦ミガキ 口縁付近:横ミガキ(内)横ミガキ	
56-6	SB119	高坏	65.0 (接合部)	(126.0)	-	雲母、石英、粗砂粒	良好	10R4/6 赤	-	○	○	(外)縦ヘラミガキ(脚内)ヘラ削り	脚内側 2.5YR4/4 にぶい赤褐。坏部を欠く。若干、調整にムラがある。
56-7	SB119	甕A2	-	(470.0)	105.0	雲母、石英	良好	2.5YR4/4 にぶい赤褐	2.5YR4/4 にぶい赤褐			(外)胴中位まで波状文 胴下半:縦ミガキ(内)横ナデ	器形が特異
57-5	SB120	高坏B	(236.0)	(47.5)	-	雲母、石英	良好	5YR4/1 褐灰	7.5YR4/2 灰褐			(外)ヘラ削り後ナデ(内)横ミガキ一赤色塗彩前	赤色塗彩の痕あり
57-6	SB120	蓋A1	47.0	(36.5)	-	雲母、石英、粗砂粒	良好	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/4 にぶい褐			(外)縦ナデ(内)ハケ	頂部に穿孔 上→下
57-7	SB120	高坏	(205.0)	(49.0)	-	雲母、石英	良好	10R4/6 赤	10R4/6 赤	○	○	(外)縦ミガキ(内)横ミガキ	
57-8	SB120	高坏C	-	(37.0)	-	雲母、石英	良好	10R4/8 赤	7.5YR6/3 にぶい橙	○		(外)縦ミガキ	坏内剥離して色調など不明
57-9	SB120	甕	(158.0)	(10.0)	-	雲母、石英	良好	5YR5/4 にぶい赤褐	5YR5/6 明赤褐			(外)櫛描波状文5本 荒く雑な施文(内)ナデ	
57-10	SB120	甕	124.0	(99.0)	-	雲母、石英	良好	5YR4/3 にぶい赤褐	5YR4/3 にぶい赤褐			(外)櫛描波状文5本 簾状文5本 同一原体 荒く雑な施文(内)ハケ調整後ナデ	
57-11	SB120	壺A	143.0	(69.0)	-	雲母、石英僅	良好	2.5YR5/6 明赤褐	2.5YR5/6 明赤褐			(外)頸部以下:縦ミガキ 口縁部:ナデ(内)横ナデ	
57-12	SB120	甕	-	(63.0)	74.5	雲母、石英、パミス、粗砂粒	良好	2.5YR5/6 明赤褐	7.5YR3/1 赤褐			(外)縦ミガキ(内)ハケ後横ミガキ	
57-13	SB120	甕A	-	(158.0)	57.5	石英	良好	2.5YR5/6 明赤褐	2.5YR5/6 明赤褐			(外)波状文8本 胴下半:縦ミガキ(内)胴上半:斜ミガキ+ナデ	
57-14	SB120	壺A	-	(128.0)	68.0	石英多、粗砂粒	良好	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/1 褐灰			(外)縦ミガキ(内)ハケ調整後ナデ?	
58-15	SB120	高坏B	(288.0)	(90.0)	-	雲母、石英、パミス	良好	10R4/8 赤	10R4/8 赤	○	○	(外)縦ミガキ(内)横ミガキ	内側:塗彩の剥離が著しい
58-16	SB120	高坏C	-	(65.0)	-	雲母、石英多	良好	10R4/6 赤	5YR6/6 橙	○		(外)縦ミガキ(内)横ナデ	
58-17	SB120	高坏B?	(157.0)	(48.0)	-	雲母、石英	良好	10R4/6 赤	10R4/6 赤	○	○	(外)横ミガキ(内)横ミガキ	
58-18	SB120	高坏C	-	(47.0)	-	雲母、石英、パミス	良好	2.5YR5/6 明赤褐	2.5YR4/3 にぶい赤褐			(外)縦ミガキ	(脚内)2.5YR5/6 明赤褐
58-19	SB120	器台?	-	(40.0)	-	雲母、石英、パミス	良好	5YR4/4 にぶい赤褐	5YR6/6 橙			(外)縦ミガキ(内)ナデ	脚内 7.5YR4/1 褐灰
58-20	SB120	高坏	-	(50.0)	-	雲母、石英	良好	10R4/8 赤	10R4/8 赤	○	○	(外)ミガキ(内)ミガキ	脚内 2.5YR5/6 明赤褐

第17表 土器観察表(その4)

図版番号	出土遺構	器種・器形	法量(単位:mm)			胎土				赤色塗彩		文様・成形・整形等の特徴	特記事項
			口径	器高	底径	含有物	焼成	色調(外面)	色調(内面)	外面	内面		
58-21	SB120	高坏C?	-	(29.0)	-	雲母、石英	良好	10R4/6 赤	10R4/6 赤	○	○	(外)縦ミガキ くびれ部に沈線2本(内)横ミガキ	
58-22	SB120	高坏C	-	(48.0)	-	石英多	良好	10R3/6 暗赤	10R3/6 暗赤			(外)縦ミガキ(内)坏内剥離	
58-23	SB120	鉢B	<174.0>	84.0	68.5	雲母、石英	良好	10R4/6 赤	10R4/6 赤			(外)横ミガキ(内)横ミガキ	(底)2.5YR4/6 赤褐
58-24	SB120	鉢B	<175.0>	90.0	<91.0>	雲母、石英、 ハミス	良好	10R4/6 赤	10R4/6 赤	○	○	(外)縦ミガキ(内)横ミガキ(底)ケズリ	(底)7.5YR6/6 橙
58-25	SB120	蓋A1	61.5	(42.5)	-	雲母、石英、 粗砂粒	良好	2.5YR4/4 にぶい赤褐	7.5YR5/4 にぶい褐			(外)縦ミガキ(内)ハケ調整後ナデ	中央にΦ2.5mmの孔あり
58-26	SB120	蓋A1	58.0	(31.0)	-	雲母、石英	良好	2.5YR4/4 にぶい赤褐	2.5YR4/2 灰赤				孔3つあり
58-27	SB120	鉢(ミニチュア土器)	84.0	48.0	48.5	雲母、石英、 ハミス、粗砂粒	良好	5YR5/6 明赤褐	5YR5/6 明赤褐			(外)横ナデ(内)横ナデ 一部指頭痕が残る	手捏ね成形、一塊の粘土から成形
59-1	SB121	壺A1	<187.0>	(53.0)	-	雲母、石英	良好	10R4/6 赤	10R4/6 赤	○	○	(外)縦ミガキ(内)横ミガキ	
59-2	SB121	甕	-	<76.0>	54.0	雲母、石英、 粗砂粒	良好	2.5YR4/4 にぶい赤褐	2.5YR4/4 にぶい赤褐			(外)縦ミガキ(内)横ナデ	
59-3	SB121	壺	-	(30.0)	138.5	雲母、石英、 ハミス	良好	10R4/6 赤	7.5YR6/4 にぶい褐	○		(外)横ミガキ	
60-1	SB122	甕	-	(27.0)	56.5	雲母	良好	7.5YR3/1 黒褐色	7.5YR3/1 黒褐色			(外)ヘラ削り(内)ナデ	胎土に違和感あり、搬入品か
61-1	SB124	甕	<150.0>	(34.0)	-	雲母、石英	良好	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙				
61-2	SB124	高坏C	-	(36.0)	-	石英	良好	10R4/6 赤	10R4/6 赤			(外)縦ミガキ	脚内 5YR5/3 にぶい赤褐
62-1	SK102	壺	-	(61.0)	112.0	石英、粗砂粒	良好	2.5YR6/8 橙	2.5YR6/8 橙			(外)ヘラ削りの後、縦ミガキ 底部ヘラ削り(内)底部ヘラ削り	内面の剥離が著しい
63-1	SK124	土師器 坏	<138.0>	45.0	20.0	雲母、石英、 ハミス	良好	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR6/3 にぶい褐	○	○	(外)口縁部付近:横ミガキ 胴~底部ヘラ削り(内)縦ミガキ 一部に赤色塗彩	(赤)2.5YR5/6 明赤褐
63-2	SK124	土師器 坏	142.0	57.0	-	雲母、石英、 ハミス	良好	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR6/4 にぶい橙			(外)底部:ヘラ削り 口唇部付近:ナデ 胴部:横ミガキ(内)ミガキ+ナデ	ほぼ完形
63-3	SK124	土師器 坏	128.0	66.0	-	雲母、石英、 ハミス	良好	2.5YR4/4 にぶい赤褐	2.5YR4/4 にぶい赤褐			(外)ヘラ削り 口縁部付近:ナデ(内)ナデの際に付いたと思われるヘラの形あり	
63-4	SK124	土師器 高坏	-	(46.5)	117.5	雲母、石英、 ハミス	良好	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙			(外)縦ミガキ、底部付近横ナデ(内)底部付近横ナデ、接合痕が明瞭に残る	坏部の形状不明。胎土精製されている(石などの混入がほとんどない)
64-1	SB123	壺A1	155.0	(124.0)	-	雲母、石英	良好	2.5YR4/4 にぶい赤褐	2.5YR4/4 にぶい赤褐			(外)波状文7本 簾状文7本(内)ナデ	
64-2	SB123	壺A	-	(163.0)	-	雲母、石英、 ハミス	良好	2.5YR5/8 明赤褐	2.5YR5/8 明赤褐	○	○	(外)T字文5本?	
64-3	SB123	甕	-	(69.0)	59.0	雲母、石英	良好	2.5YR5/6 明赤褐	2.5YR5/6 明赤褐			(外)ハケ調整、(胴)縦ミガキ(内)横ミガキ	
64-4	SB123	蓋A1	48.0	(60.0)	-	雲母、石英	良好	5YR4/3 にぶい赤褐	7.5YR3/1 黒褐			(外)縦ミガキ(内)ナデ	
64-6	SB123	土製円蓋(土器片)	58.0	55.0	9.5	雲母、石英	良好	2.5YR5/6 明赤褐	2.5YR5/8 明赤褐				寸法は左から順に最大径・最小径・厚さ ※表に赤彩痕あり(壺?)
65-5	SB125	甕	-	(41.5)	63.5	雲母、石英、 ハミス	良好	10R3/4 暗褐	2.5YR6/5 明赤褐				底部中央が変色(2.5YR5/6 明赤褐)
65-6	SB125	壺A	-	(136.0)	67.0	雲母、石英、 粗砂粒	良好	5YR3/3 暗赤褐	5YR3/3 暗赤褐			(外)縦ミガキ(内)ハケ調整後ナデ	外面に極僅かペンガラ付着
65-7	SB125	甕	-	(60.0)	100.0	雲母、石英、 粗砂粒	良好	2.5YR5/6 明赤褐	5YR3/2 暗赤褐			(外)縦ミガキ(内)ハケ調整後ナデ	底部中央付近が変色(2.5YR4/4 にぶい赤褐)
65-8	SB125	甕	-	(40.0)	45.0	石英	良好	2.5YR5/6 明赤褐	2.5YR5/6 明赤褐			(外)縦ミガキ(内)ハケ調整後ミガキ	
65-9	SB125	高坏	<170.0>	(52.0)	-	雲母、石英、 ハミス	良好	5YR5/4 にぶい赤褐	2.5YR5/6 明赤褐			(外)横方向ハケ調整後ナデ(内)横方向ハケ調整後ナデ	
66-1	SB126	高坏A	236.0	42.0	-	雲母、石英、 粗砂粒	良好	10R4/6 赤	10R4/6 赤	○	○		
66-2	SB126	深鉢	130.0	(108.0)	-	雲母、石英	良好	10R4/6 赤	10R4/6 赤	○	○	(外)縦→横→縦ミガキ(内)横→横→ナデ	(内)2.5YR5/6 明赤褐
66-3	SB126	鉢A	160.5	78.0	44.5	雲母、石英、 粗砂粒	良好	10R3/6 暗赤	10R3/6 暗赤	○	○	(外)縦ミガキ(内)横ミガキ	底部 5YR6/4 にぶい橙 内面 底部付近の剥離が著しい
66-4	SB126	甕	-	(42.0)	94.0	石英、粗砂粒	良好	5YR5/4 にぶい赤褐	7.5YR5/2 灰褐			(外)ハケ(内)ハケ+ナデ	
66-5	SB126	鉢A	164.0	75.0	59.0	雲母、石英	良好	10R4/6 赤	10R4/6 赤	○	○	(外)縦ミガキ(内)斜めミガキ(底部)ヘラ削り	底部 2.5YR5/6 明赤褐
66-6	SB126	蓋A	-	(35.0)	54.5	雲母、石英	良好	2.5YR4/4 にぶい赤褐	2.5YR4/4 にぶい赤褐			(外)縦ミガキ	
66-7	SB126	ミニチュア土器 鉢	69.0	63.0	63.0	石英、粗砂粒多	良好	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙			(外)荒い縦ミガキ(内)荒い横ミガキ	一部にペンガラ付着
66-8	SB126	壺A2	85.0	83.0	43.5	雲母、石英	良好	2.5YR4/4 にぶい赤褐	2.5YR4/4 にぶい赤褐			(外)波状文3本or4本、胴下半:縦ミガキ(内)横ナデ	
66-9	SB126	壺A	-	(155.0)	-	雲母、石英	良好	2.5YR4/4 にぶい赤褐	2.5YR4/4 にぶい赤褐			(外)縦ミガキ(内)ハケ	
66-10	SB126	紡錘車	(53.5)	(28.5)	(11.0)	雲母、石英	良好	2.5YR5/6 明赤褐	2.5YR5/6 明赤褐				寸法は左から順に最大径・最小径・厚さ

第18表 土器観察表(その5)

第四章 調査のまとめ

第1節 遺構

今回の調査で検出された遺構は、竪穴建物跡、土坑、溝跡（配石溝跡）で、時期が判明するものについては、弥生時代後期、古墳時代中期、近現代の所産である。調査区Aでは解体された蚕室による地下の攪乱が一部で認められ、調査区Bでは桑の根による攪乱が随所で見られたが、遺構の遺存状態は概ね良好であったといえよう。

(1) 竪穴建物跡（竪穴住居跡）

検出された竪穴建物跡は、出土遺物の状況及び平面形態が隅丸長方形を呈することから、弥生時代後期の箱清水式土器様式期のものと考えられる。今回の調査区で検出された竪穴建物跡も、下記のとおり、第1～5次調査報告書で指摘されてきた特徴を有するものがほとんどであった。

遺構の構造としては、4本の支柱穴を長方形に配し、建物の奥側にある支柱穴の間に炉を置く。そして、南寄りの壁沿いの中央に出入口が想定され、梯子固定のためと推定されるピット1～2基とその右側に大きめのピットを伴う事例が多く見られた。また、出入口の左右の床面直上から、完形品を含めて、まとめて土器が出土する事例が多く見られた。柱穴が確認できなかつたり、控え柱の穴と考えられる事例も認められるが、以上のような竪穴建物跡が本遺跡での典型的な事例となる。

調査対象とした面積は約1,400㎡であったが、竪穴建物跡の分布は調査区Aでは東北隅で特に濃密であった。これまでの発掘調査の結果から、第5次調査区で検出された井戸周辺に竪穴建物が集中している状況が窺えるが、調査区Aにおいても同様の状況であることが判明した。特に、重複するSB115、117～119の4軒については、東北方向に主軸方向を同じくするなど、これら4軒に何らかの規制を感じさせる。ただ、第5次調査区の東側に位置する調査区Bにおいては、竪穴建物の密度は決して高いとは言えず、むしろ、調査区Bの東半分では土坑すらもごく僅かになるなど、東進するに従って遺構の密度が低くなっているように感じられた。調査前には、竪穴建物が井戸を中心にドーナツ状に濃密な分布をしているものと予想していたが、今回の調査結果から言えば、必ずしもそうではないようである。

建物跡は重複のために全形を知ることができないものが多いが、遺存状態が良いSB99、109、123は長軸8～9m、短軸が4.5～6.0mと大型である。SB109は掘り窪めた地床炉が4基重複しており、比較的長期間にわたって営まれた建物跡とも考えられる。

また、第3次調査報告書以降指摘されている、竪穴の規模による小型、中型、大型という類型が、今回検出した遺構群にも適用できそうである。これが単なる時期差なのか、用途に基づくものなのかは明らかではないが、今後、出土遺物や主軸方向、炉などの付属施設等からも検討していきたいと思う。

支柱穴は建物内に長方形に配置されたものが多く、その形状は建物跡の短軸方向を向いた楕円形を呈する事例がほとんどであるが、SB109に見られるように、長軸方向を向いて楕円形を呈するものもある。また、SB115のように控え柱の穴と推定されるピットも検出されている。柱穴と考えられるピットは壁際などからも検出されているが、それらに共通の特徴を見いだすことはできなかった。また、出入口に梯子固定のためと推定される楕円形の浅いピット1～2基が確認される事例が多く見られた。

出入口と想定した箇所の右側に、若干大きめのピットを伴う事例も多く、貯蔵穴としての機能を考えた。ただ、SB99の同様の遺構では、底部から礎石状の平石が出土していることから、全ての事例を貯蔵穴と

決するのは慎重にならざるをえない。また、貯蔵機能が推定される SB105、SB118 の甕収納ピットの例にあるように、出入口右側という規制から外れているものもある。

炉には床面を掘り窪めた地床炉と、土器片を敷き詰めた土器敷炉、甕の底部を埋設した土器埋設炉が見られた。地床炉は 1～3 個の炉縁石を伴う例もある。また、大型の竪穴建物跡では複数の炉が検出される場合があるが、SB109 のように地床炉が複数重複する例も見られた。炉の位置は出入口とは逆になり、北寄りの支柱穴の間付近に位置するものがほとんどである。

今回の報告にあたり、周辺遺跡の竪穴建物跡の検出状況についての詳細な調査はしえなかったが、上記が下町田遺跡の弥生後期集落における竪穴建物跡の総体的な特徴と捉えたい。尾見智志氏の教示によると、千曲川左岸の当該期の遺跡では炉縁石がほとんどみられない（上田市教育委員会 2004b）ことから、千曲川流域の箱清水式土器を用いる大きな集団の中で、集落ごとのオリジナルな規制のもとに竪穴建物が作られていたことも想定できよう。

（2）竪穴建物跡内の集石遺構

SB113、SB120 において、竪穴建物跡の廃絶後に形成された集石遺構が検出された。出土遺物から、いずれも弥生時代後期の所産と考えられる。特筆すべきは、集石が形成される直前に、建物跡内に木材を持ち込んで火を焚いていることであろう。しかも厚い焼土が形成される規模の行為である。建物跡において観察した土層堆積状況からは、①竪穴の縁辺が自然崩壊した三角堆積が認められること、②集石下の土層が均一な土質で、ブロック状に他質の土塊が混入していないこと、などから、建物跡が自然堆積によりある程度埋まった時点で、覆土上で火が焚かれ、集石遺構が形成されたものと判断した。これらの建物跡から出土した遺物を観察した結果からは、床面直上の土器群と集石直上の土器群とに明確な型式差は確認できなかったが、両者に時間差があることは明らかで、集石遺構の形成過程は上記のようなものだったと考えたい。

遺構の性格については、埋まりかけた建物跡内で火を焚き、石を集積し、土器などを石の上に散在させるという行為からは、祭祀を伴う遺構であると考えたいが、類例に乏しく、判然としない。ただ、第 5 次調査区では、覆土内から炭化物と礫群がセットで出土する事例を確認しており、類似する行為が一般的に行われていた可能性がある。ただし、SB113、120 は建物跡の平面プランの中央に、黒色土の楕円形プランを確認できること。また、建物覆土と集石の間に厚い焼土と炭化材が存在し、建物跡とは無関係の木材を燃やしていることが明らかであることから、下町田遺跡で既に報告された事例とは異なる性格の遺構と考える。また、SB120 では建物跡の覆土内に小ピットを 2 基検出し、集石との関連を窺わせる。丸太を立てたり、上屋をかけたりなどした遺構かもしれない。

集石覆土から出土した土器片について、底部等の特色ある部位をカウントする方法で器種の細別を試みたが、部位が明確な土器片がそれほど多くなく、途中で断念した。両建物跡とも集石上部の出土土器は破片資料がほとんどで、図化できた資料はわずかであった。土器片の観察の結果、高坏がとび抜けて多いというような状況は窺えず、また、赤色塗彩のあるものもないものも混在していることが判明した。出土状態から、集石の上に（完形）土器が並べられたという行為は否定できよう。むしろ、「土器片」を集石上に投入したという状況が考えられそうである。

特筆すべき出土品にガラス小玉、土玉の出土が挙げられる。また、僅かではあるが、石英の細片が検出されている。全て集石覆土からの出土である。集石の覆土は遺構検出時には有機質が腐食したような艶の

ある真っ黒な土であった。骨片等が検出されていないため、これを直ちに埋葬施設と想定するのはいささか無茶ではあるが、上田市・琵琶塚遺跡第62号住居址において、覆土からガラス小玉や銅釦、管玉、骨粉等がまとまって出土した例や、佐久市・上直路遺跡で検出された弥生時代後期の屋内埋葬墓の事例等もあり、これらが本遺跡の事例と同時期の所産であることから注意すべき遺構であろう。なお、石英の破片は本遺跡の過去の調査でも出土しており、遺跡の北方にある太郎山山系で採取可能である。

(3) 土坑跡

遺物の出土状態から、2基を弥生時代後期の土坑であると判断した。遺構の性格は不明である。また、古墳時代中期の土坑と推定される遺構が1基存在した。

(4) 配石溝跡

第4次調査区で検出された配石溝(SD05)と同一の遺構であることが想定される。調査区外でこれに繋がるものと考えられるが、詳細は不明である。時期決定に有効な遺物はないが、近世以降の所産と推定される。今後の考究に期待したい。

第2節 遺物

(1) 箱清水式土器

出土した土器の焼成の程度は一部を除いて「良好」であり、胎土に雲母、石英が混入されているものがほとんどである。土器の色調は、赤色塗彩された土器の表面は「新版標準土色帖」の10Rの色相の赤と判定されるものが主で、稀に暗赤のものが見られる。赤彩がされないものは2.5YRまたは5YRの色相に判定されるものが多く、全体的に赤みの強い胎土と言えよう。

器種ごとにその特徴をみてみよう。出土した資料から窺える器種組成は、甕、壺、高坏、鉢、深鉢、甑、蓋、器台、ミニチュア土器である。なお、箱清水式土器の分類にあたっては、『法楽寺遺跡』（上田市教育委員会2004）で用いられた分類に準じ、本遺跡での出土状況に応じて、新たな器種分類を追加・変更した。
<箱清水式土器の分類一覧>

① 甕 器形は緩やかに胴部が張るもの、胴部の張りが強いもの、球形胴のものなどがみられるが、本報告では器面の文様を主な分類基準とした。

A類 口縁部から胴中位に波状文を施すもの

A1 頸部に簾状文等を施すもの

A2 器面に波状文のみを施すもの

B類 口縁部から胴中位に斜走文を施したもの

B1 頸部に簾状文等を施すもの

B2 器面に斜走文のみを施すもの

C類 口縁部から胴中位に波状文を施し、底部に高台が付くもの（いわゆる台付甕）

C1 頸部に簾状文等を施すもの

C2 器面に波状文のみを施すもの

② 壺 器形により2つに区分し、口縁部形態により更に細分した。なお、文様の有無、種類、赤色塗彩

の有無等によりさらに細分が可能と思われるが、今回は見送った。

A類 頸部から胴部にかけて緩やかにひろがるもの

A 1 口縁部が緩やかに外反するもの

A 2 口縁部がラッパ状に開くもの

B類 胴部が球形となるもの

B 1 口縁部が緩やかに外反するもの

B 2 口縁部がラッパ状に開くもの

③ 高坏 坏部の形状により3つに分類した。

A類 鏝状の口縁部をもち、坏部に稜線をもつもの

B類 鏝状の口縁部をもち、坏部に稜線をもたないもの

C類 鉢状の坏部をもつもの

④ 鉢 片口をもつもの、持たないものという区別はしないでおく

A類 口縁部が内湾するもの

B類 口縁部が直線的に開くもの

C類 口縁部が内湾し、器高が高いもの（いわゆる無頸壺も含む）

⑤ 深鉢（甕形土器・赤彩深鉢）甕の形態ではあるが、外面と内面（口縁部から頸部付近のみ）が赤色塗彩される。高台や文様の有無により細分が可能かもしれないが、今回は行わないこととする。

⑥ 甗（有孔鉢）底部に孔を有する鉢形の土器である。鉢とは調整方法で異なる点が多い。

⑦ 蓋 器形から大きく3つに区分し、細部の特徴に基づき更に細分した。

A類 摘みをもち、裾部まで緩やかに広がるもの

A 1 摘み部に孔を有するもの

A 2 摘み部に孔をもたないもの

B類 摘みをもち、裾部がラッパ状に広がるもの

B 1 摘み部に孔を有するもの

B 2 摘み部に孔をもたないもの

C類 摘みがなく緩やかに三角錘状を呈するもの

D類 円盤状で小孔が1～2ヶ穿たれるもの

⑧ 器台 皿部の直径に比して、脚部の裾径が大きいものである。細分は行わない。

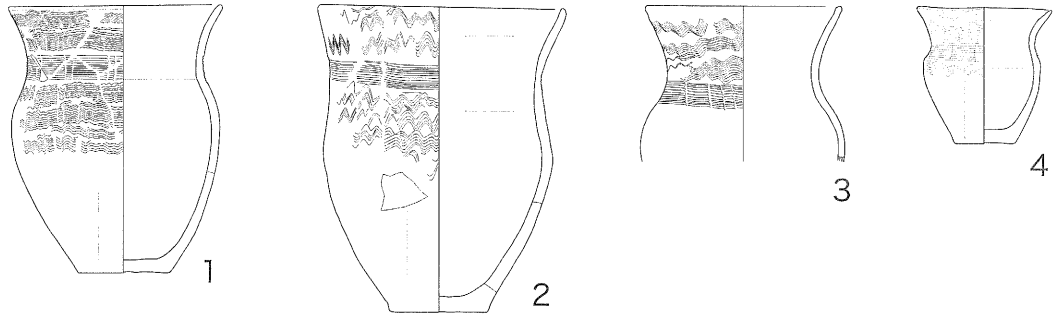
⑨ ミニチュア土器 小型の手捏ね土器をこの範疇で総称する。

（器種ごとの特徴について）

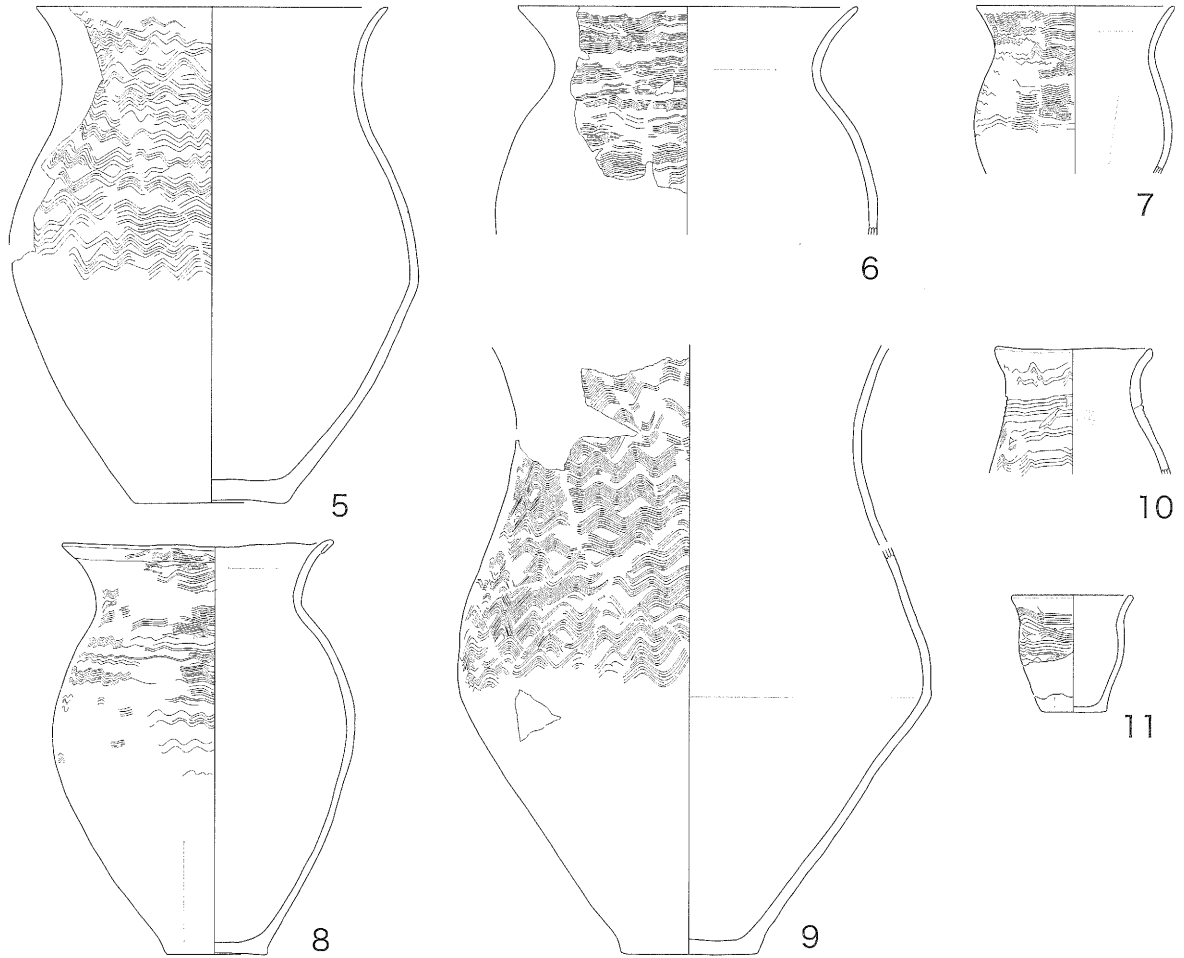
〈甕〉甕は大別すると、甕A、B、C、Dに分類される。このうち、もっとも出土量が多いのが甕Aであり、次いで甕C、甕Bである。甕Bは今回は出土数がわずかで、第 図 12、13 が図化できた希少な例である。

甕Aは更に、頸部に櫛描簾状文を持つもの（甕A 1）、櫛描簾状文を持たないもの（甕A 2）と細分できる。櫛描文の施文具の単位は、文様の重複等により計数が難しいものが多いが、5～9本の櫛を1単位としているものが多く、施文方向は左回りである。甕A 1の簾状文は等連止めのほか、2連、3連止めが見られる。施文順であるが、まず簾状文を施文後に、口縁部と胴中位の波状文を描き、その後、胴下半部を縦方向にヘラミガキをするようである。簾状文が施文されるものは、波状文のみのももの（甕A 2）より、文様を丁寧に施しているものが多いように見受けられる。甕A 2は口縁部から胴中位に向かって波状文を施文

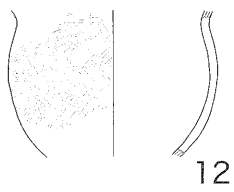
甕 A1



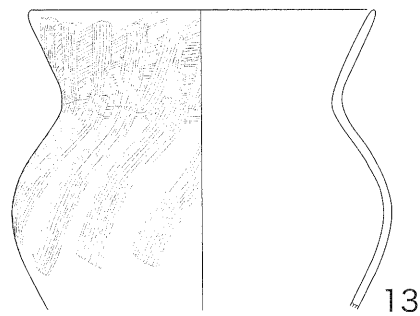
甕 A2



甕 B1



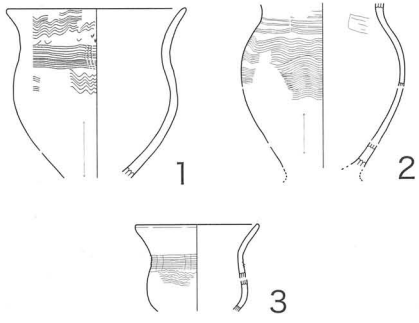
甕 B2



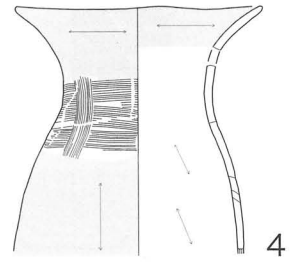
0 10cm

第 68 図 下町田遺跡における弥生時代後期の土器分類 (その 1)

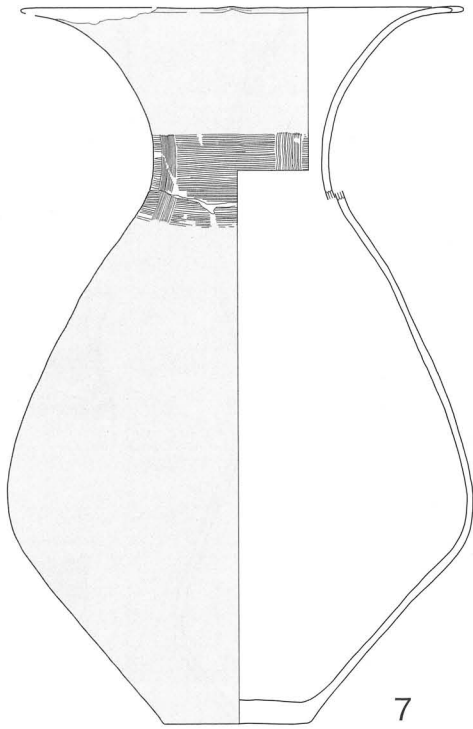
甕 C1



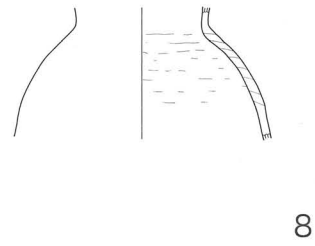
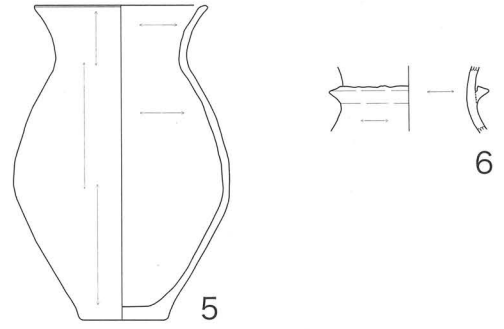
壺 A1



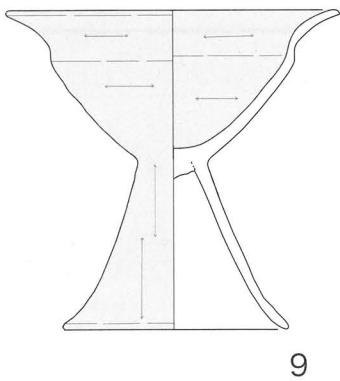
壺 A2



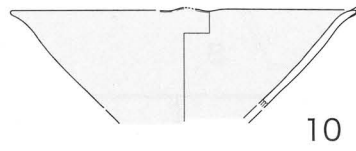
壺 B



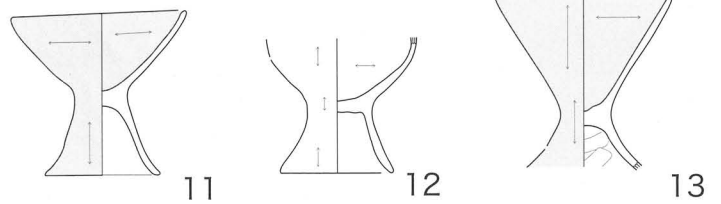
高坏 A



高坏 B



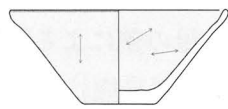
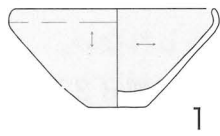
高坏 C



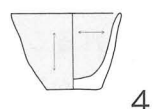
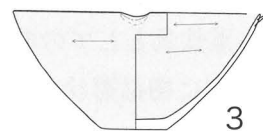
0 10cm

第 69 図 下町田遺跡における弥生時代後期の土器分類 (その 2)

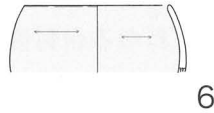
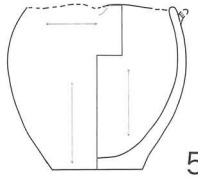
鉢 A



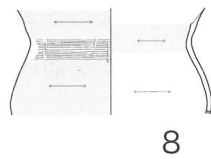
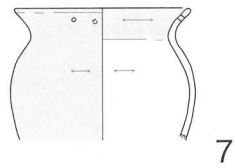
鉢 B



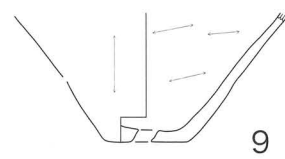
鉢 C



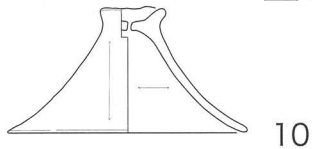
深鉢



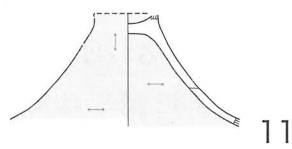
甑 (有孔鉢)



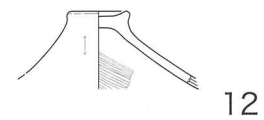
蓋 A1



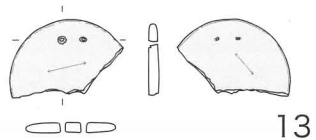
蓋 A2



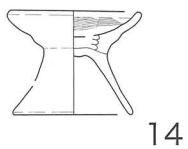
蓋 B



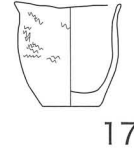
蓋 D



器台



ミニチュア土器



0 10cm

第 70 図 下町田遺跡における弥生時代後期の土器分類 (その 3)

するもので、やはり5～9本の櫛を1単位としているものが多く、施文方向は左回りである。器高 cm 程度の大型品から、10 cm 程度の小型品までその大きさ（容量）は様々なものがある。小型品にも被熱痕がみられることから、煮炊具としての機能も認められる。法量の差による細分も可能かもしれない。

甕Bも同様に、頸部に櫛描簾状文を持つもの（甕B1）、櫛描簾状文を持たないもの（甕B2）に細分したが、出土数が少ないため、詳細は不明である。

甕Cは全形が判明する資料に乏しいが、文様構成は甕Aに準ずるようである。ただ、第46図1のように、頸部に櫛描簾状文ではなく、直線文が施文されるものがあり、注意したい。今回は確認できなかったが、甕C2と分類できる資料は、第4次調査SB77-15等がある。いわゆる台付甕であるが、後述する深鉢（甕形土器、赤彩深鉢とも呼称される）の台付形態のものとは一応区別しておく。

これまでの調査でも報告されていたものの、全形が捉えられる資料に恵まれなかった、口縁部の先端を外側に折り返した甕であるが、今回、第45図5に示したとおり、器形の全体像が分かる資料が出土した。本例は櫛描波状文が施文されているのみであるため、甕A2としたが、折り返した口縁に注意される。折り返しは幅広のものもあり、波状文が施文されるものと無文のものがある。また、第48図3のように壺によく似た特異な形態をとる甕も確認されており、器種分類や文様構成については更に検討をする必要があるだろう。

甕の用途として、煮炊きと水などの貯蔵が推定できるが、底部周辺内側の器壁がドーナツ状に黒色になっている事例が多く見られた。こうした用途論的な痕跡について、器形、文様構成等からの検討が進めていきたい。

なお、隣接する第2次調査区では、他の土器様式あるいはその影響を受けたと考えられるものが出土しているが、今回の調査でも同様の状況が窺える。第42図5は文様と胎土（黒褐色）から、群馬県から埼玉県に分布する、赤井戸式土器・吉ヶ谷式土器の搬入品と思われる。頸部の櫛描簾状文を挟んで、上下に波状文を模した縄文が施文されるものである。また、図化し得なかったが、胎土（にぶい橙）と特徴的な口縁部の形態から、北陸地域からの搬入品と推定される甕の破片も出土している。ただ、今回の出土品の中に、東海地方に起源をもつ、いわゆる「S字甕」は確認できなかった。

〈壺〉 今回の出土品に限っては、壺は全形を復元できる資料に乏しい。少ない資料からではあるが、器形の特徴から壺A、Bと大別し、口縁部の形状により細別した。赤色塗彩されるものとされないものがあり、これらは頸部に櫛描文が施文されるものと、全体が無文のものに分けることができる。また、容量によるカテゴリーも設定できそうであるが、これらの細分は本報告では見送ることとする。

壺Aは、口縁部が緩やかに外反するもの（壺A1）、ラップ状に開くもの（壺A2）とに、分類した。同様に壺BもB1～B2に細分した。『法楽寺遺跡』では更に口縁部が受け口状のもの（壺A3）が細分されたが、受け口状の口縁部は今回は確認できなかった。A1あるいはA2の分類に当てはまるものが多く、球形胴のBはわずかに見られる程度であった。また、注意して観察したが、文様が施文される場合には頸部に収斂され、横描きの櫛描直線文を数条重ねたもの、あるいはこれに櫛描直線文を1または2本垂下したT字文が描かれるものが多い。赤色塗彩をする場合には、櫛描文の施文後に行われる。5～9本の櫛を1単位としているものが多く、施文方向は左回りである。第38図1は横書きの櫛描直線文帯の間に赤色塗彩した無文帯を挟むもので、特異な事例である。図化し得なかったが、ボタン状貼付文が見られる破片もわずかに出土している。ただ、これまでの調査で何例か出土している、頸部に綾杉文をもつ事例は今回は確認できなかった。

また、無文の壺もある程度の割合を占めて土器様式を構成している。外面は縦方向のヘラミガキ調整がされるもので、壺A1に分類されるものが多数である。器形は甕に近いものもあるが、外面に見られる調整方法と施文の有無、被熱痕の有無等を根拠に、この種の土器を壺のカテゴリーに分類した。

また、これまでの調査でも報告されている、頸部に突帯をめぐらせる破片が数例出土した。分類ではA1に属するものと考えられるが、全形を知ることができる資料に乏しい。

〈高坏〉 高坏は坏部の形状により3つに分類した。罎状の口縁で、坏部に稜線があるもの（高坏A）、罎状の口縁で、坏部に稜線がないもの（高坏B）、小型で鉢状の坏部のもの（高坏C）とし、全てにおいて、外面と坏部内面を赤色塗彩する。なお、第36図5のように、脚部に三角透し孔を有する例や、第50図7のように、括れ部に沈線による文様を有するものもある。また、高坏Cのカテゴリーとしたが、第40図6のように、細長いグラス状の坏部をもつものがある。今回は確認できなかったが、脚部に円形透し孔を有する例や、脚裾部に文様帯を有するものが第2次調査で出土している。

〈鉢〉 赤色塗彩されるものとされないものがあり、文様は施文されない。形態差により3つに分類したが、大きさに大小があり、片口が付くものもあるなど、更なる細分が可能かもしれない。

分類は口縁部が内湾するもの（鉢A）、口縁部が直線的にひらくもの（鉢B）、口縁部が内湾し、口径に比して器高が高いもの（鉢C）とした。鉢Cとしたものは、無頸壺と呼称されるものもある。赤色塗彩される場合には、底部裏面を残して器の全面に行われる。鉢A、Bは内面底部付近に、使用痕と思われる器面の荒れが見られる事例が多い。

〈深鉢〉 貯蔵あるいは供献の機能が想定される器種で、甕の形態ではあるが、外面と内面（口縁部から頸部付近のみ）を赤色塗彩することを特徴とする。当遺跡のこれまでの報告書や『琵琶塚遺跡II』（上田市教育委員会1989）等では「深鉢」と呼称され、研究者によっては「赤彩深鉢」（青木1999）とも称される。また、『法楽寺遺跡』では「甕形土器」と呼称された。用途の検証については今後の類例の増加を期待したいが、「一時的に火にかけられた痕跡（青木1999）」が指摘されており、SB109から出土した深鉢に同様の痕跡が認められる（写真図版24）。今回は『下町田遺跡』で使用してきた「深鉢」を用いるが、他の呼称を否定するものではないことを付記しておく。

赤色塗彩は外面と口縁部の内面に行われるが、頸部に簾状文をもつものがわずかに認められる。第40図10は櫛描直線文に同じ施文原体を用いて刺突を加え、簾状文の2連止めを模したものである。なお、第1次調査の際に頸部にT字文をもつ事例が出土している。口縁部付近に小孔を穿つものがあり、注目される。また、いわゆる台付甕の形状を呈するものがある。文様の有無、器形から細分が可能かもしれないが、今回は見送ることとする。

〈甗〉 底部に孔を有する鉢形の器形であり、「有孔鉢」とも呼称される。赤色塗彩は認められず、内外の器面には丁寧なヘラミガキが行われる。孔の数は一孔のものが多数であるが、複数の小孔を有するものも認められる。ひとつの竪穴建物跡から底部が複数出土することがあるが、1軒の器種組成に占める割合は掴めなかった。

〈蓋〉 蓋は下町田遺跡から出土しているものの形態から、蓋A、B、C、Dの4つに大別する。蓋A及びBは更に摘み部に孔をもつものを蓋A1・B1、もたないものを蓋A1・B2に細分した。蓋A1・B1は1孔が通常であるが、第50図12のように3つ孔があるものもある。第3次調査SB50-13のように7つ孔がある事例も出土している。蓋A・Bのカテゴリーには、赤色塗彩される例もある。蓋Cは無頸壺の蓋であるが、第2次調査SB20-30が出土例として知られるが、今回の出土品には確認できなかった。蓋

Dは1点出土した。蓋Cと同様に無頸壺の蓋となると推定されるが、深鉢の口縁部に小孔を有するものとの関連も考えられる。1点のみの出土品であり、総合的な特徴とはならないかもしれないが、赤色塗彩されることが一般的なようである。

〈器台〉 皿部の直径に比して、脚部の裾径が大きいものとする。今回の出土品の中にわずかに見られる。
〈ミニチュア土器〉 祭祀的な用途も想定されるが、詳細は不明である。手捏ねで甕や鉢を範形とするものが出土した。

以上、今回出土した箱清水式土器について、その特徴を概観した。時期的には尾見智志氏による箱清水式土器の6期区分（尾見1999）のうち、5期を主体とするものと考えられ、わずかではあるが、器台、甕などのほか、外来系土器の一部が6期の土器に共伴するものと思われる。

土器の出土量が膨大であったため、時間的制約や紙幅の関係上、全ての資料を掲載することが叶わなかったことをご容赦願いたい。

（2）弥生時代の石器

弥生時代の竪穴建物跡の床面やピットの底部から石器が出土した。

黒曜石の打製石鏃が1点、SB120の床面直上で出土した（第67図1）。縄文の遺物が混入した可能性もゼロではないが、出土状況から弥生時代後期の所産であると考えたい。先端と返しがすべて欠損しており、有茎だった可能性もある。本遺跡ではこれまでに4点の出土が報告され、市内でもこれまでに、和手遺跡などから弥生時代のものと思われる事例を確認している。資料が少なく、縄文時代の石鏃との差異を見出しにくい、縦長の三角形を基本とし、無茎で基部の挟りこみが小さいもののほか、有茎のものがある。

また、小型の石包丁の残欠が1点出土した。竪穴建物跡からの出土である。建物跡の床面からは磨石あるいは敲石と考えられるものも多数出土している。また、打製石斧が出土している。縄文土器の破片がごくわずかに出土しており、混入品である可能性があるが、このうち、SB109のピットから出土したもの（第67図4）は、建物跡に伴うものと判断される。

石器の出土量はごく少なく、鉄器が主体として用いられていた可能性を示唆するが、今回の調査では鉄製品は出土していない。

（3）土製品について

土製紡錘車が2点出土している。第2次調査等で確認された赤色塗彩された紡錘車は、今回の出土品からは抽出できなかった。

土製円盤はこれまでの下町田遺跡の発掘調査でも出土しているが、今回は数が多く、また、特定の建物跡から集中して出土している。これらの特徴をみてみよう。

出土したものは大きく3つに分類できる。ひとつは小型（径3～5cm程度）で無孔のもの、2つめは小型で中心に1孔を有するもの、3つめは大型（径5～7cm程度）で無孔のものである。それぞれ、用途が異なるものと推定されるが、詳細は不明である。小型で1孔を有するものは「紡錘車」としての機能を指摘される。今回の調査で同じ建物跡から土製紡錘車と有孔の土製円盤が共伴した事例はないが、両者は大きさも重さも異なり、当初から紡錘車として製作されるものと、土器片を転用して作成するものとの機能の違いを想定することはできまいか。無孔のものは大型と小型のものに大別したが、小型のものは表面の摩滅が特に著しく、赤色塗彩が消えかかっているような事例もある。大型のものには摩滅は目立たないが、

両者とも、円盤というより多角形となるものが多く見受けられる。これらが機能を推定できる材料となりうるか、今後の考究を待ちたい。土製円盤の素材となる土器片は、赤色塗彩があるものと、無彩のものがあり、特定の器種を選んで材料としているのではなさそうである。

SB108 から出土した土製品は、胎土の特徴から一応、弥生時代後期の土製品としておくが、詳細な検討を要する。文様等は確認できない。

以上、平成21～22年度に行った調査の結果を報告させていただいた。時間的な制約もあり、出土した遺構・遺物の全てを報告できなかったことから、客観性に欠けた報告書になってしまったことは否めない。また、現場での判断ミスにより、いくつかの遺構を正確に報告できなかったことが本当に悔やまれる。常に現場の隅々にまで目を配り、責任を持つということの重大さを改めて感じた。

発掘現場作業は秋から年末までとなったが、土日を問わず、寒いなか作業に従事してくださった作業員の皆さんや繊維学部の学生さんに感謝を申しあげたい。特に留学生の皆さんが発掘作業に参加していただき、作業員の皆さんとの思わぬ交流の場ができたことはありがたいことであった。

最後に、発掘調査にあたって埋蔵文化財の重要性をご理解いただき、多大なるご協力を賜りました信州大学の関係者の皆様に厚く御礼を申しあげ、稿を閉じたい。

〈参考・引用文献〉

(報告書)

『常入遺跡群 下町田遺跡』—信州大学繊維学部大学院棟建設に係る常入遺跡群下町田遺跡発掘調査報告書— 上田市教育委員会 1997

『常入遺跡群 下町田遺跡』Ⅱ—信州大学遺伝子実験施設建設に係る常入遺跡群下町田遺跡第2次発掘調査報告書— 上田市教育委員会 2000

『常入遺跡群 下町田遺跡』Ⅲ—上田市産学官連携支援施設建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書— 上田市教育委員会 2003a

『常入遺跡群 下町田遺跡』Ⅳ—信州大学(常田)総合研究棟新営工事に伴う常入遺跡群下町田遺跡第4次発掘調査報告書— 上田市教育委員会 2003b

『常入遺跡群 下町田遺跡』Ⅴ—信州大学ベンチャービジネスラボラトリー棟の建設工事に伴う常入遺跡群下町田遺跡第5次発掘調査報告書— 上田市教育委員会 2004b

『琵琶塚』Ⅱ 小泉地区県営ほ場整備に伴う緊急発掘調査報告書 上田市教育委員会 1989

『法楽寺遺跡』上田市川東地区農産物総合出荷施設建設に伴う発掘調査報告書 上田市教育委員会 2004a

『和手』—長野県上田市和手遺跡緊急発掘調査報告書— 上田市教育委員会 1983

(論考等)

『上田市誌』歴史編(1) 上田市誌刊行会 2002

『上田市誌』自然編(1) 上田の地質と土壌 上田市誌刊行会 2002

『長野県の弥生土器編年』長野県考古学会弥生部会 1999

「上小地方の弥生土器編年」 尾見智志 1999

「長野盆地南部の後期土器編年」 青木一男 1999



第2次発掘調査
遺伝子実験施設

第3次発掘調査地点
上田市産学官連携支援施設

第5次発掘調査地点。
ベンチャービジネスラボラトリー棟

発掘調査 A 区 / ファイバーイノベーション・インキュベータ棟予定地 (東から)



第4次発掘調査地点
総合研究棟

第5次発掘調査地点
ベンチャービジネス
ラボラトリー棟

発掘調査 B 区 / 先進植物工場研究センター予定地 (南東から)

写真図版 3



発掘調査 A 区表土剥ぎ着手状況



発掘調査 A 区表土剥ぎ進行状況



遺伝子実験棟東側表土剥ぎ状況



発掘調査 B 区表土剥ぎ進行状況



表土剥ぎに伴う土砂の処理状況



遺構検出作業



現場事務所設営



基準点及びグリッド杭設置測量状況



基準点杭 (BM) 設置状況



空中写真測量実施状況



発掘調査 B 区埋め戻し完了状況



発掘調査 A 区埋め戻し完了状況

写真図版 5



第 99・100 号竪穴建物跡（西から）



SB100 遺物出土状況（北から）



第 102・114 号竪穴建物跡（東から）



SB102 出入口遺構検出状況（北から）



SB102-1 ピット内土器出土状況



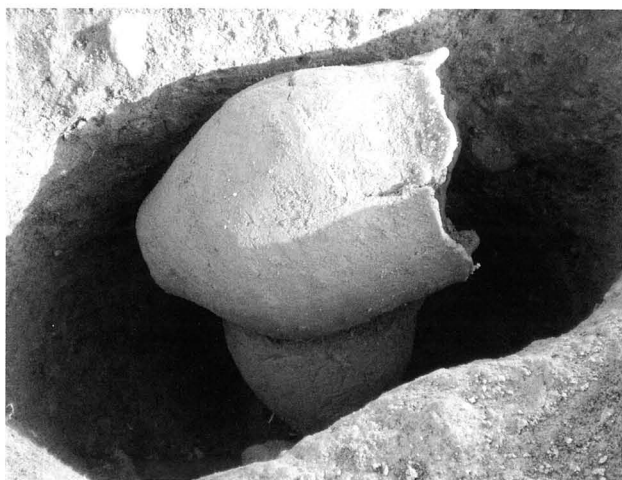
SB102 ピット内土器取上げ後の状況



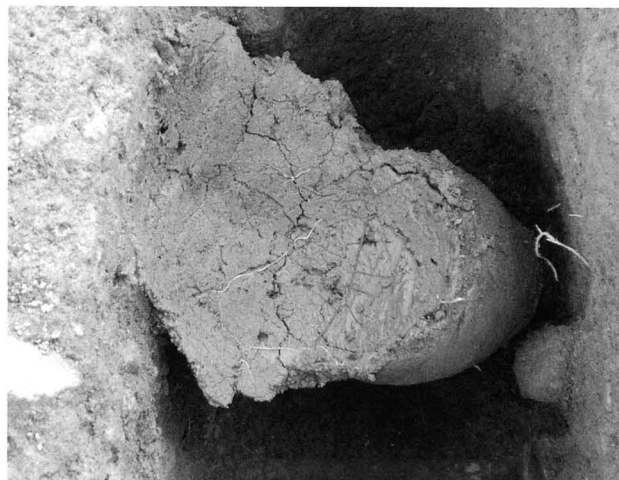
第 103 号 竪穴建物跡 (上空から・上が北)



第 105 号 竪穴建物跡 (南から)



SB105-3、13 ピット内土器出土状況



SB105 ピット内・上部の土器を取り外した状況

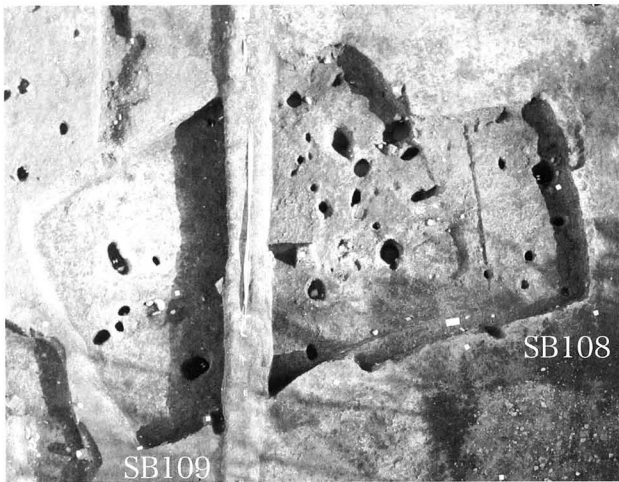


第 106 号 竪穴建物跡 (上空から・上が北)



第 107 号 竪穴建物跡 (東から)

写真図版 7



第 108・109 号竪穴建物跡（上空から・左が北）



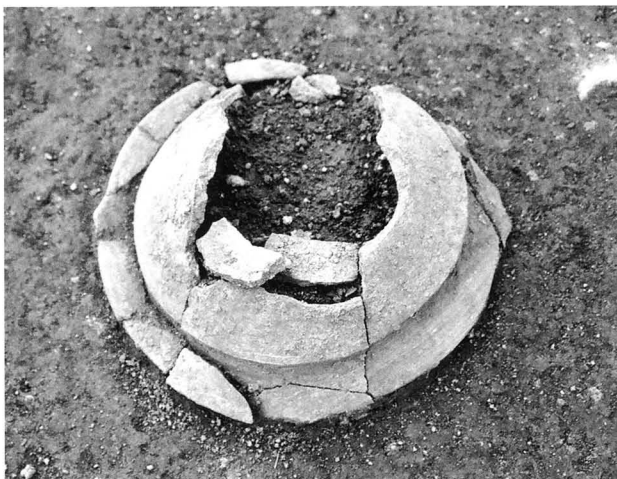
第 108 号竪穴建物跡（南から）



SB108 土器出土状況



第 109 号竪穴建物跡（西から）



SB109-11 土器出土状況



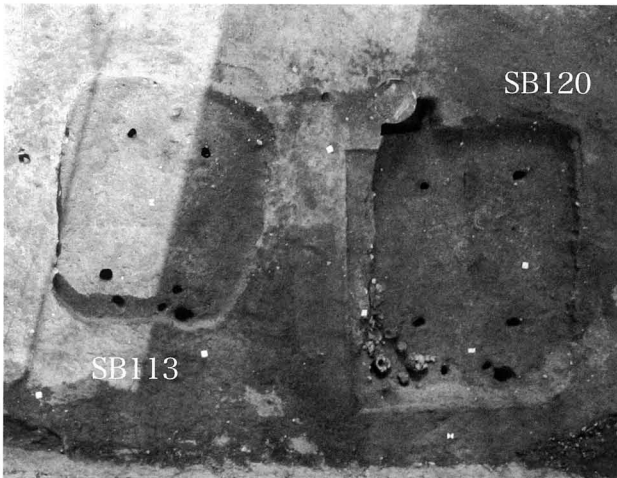
SB109 地床炉検出状況



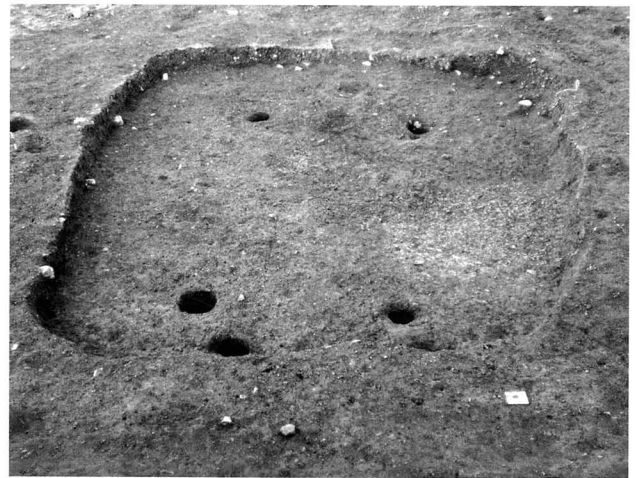
第 110 号 竪穴建物跡 (東から)



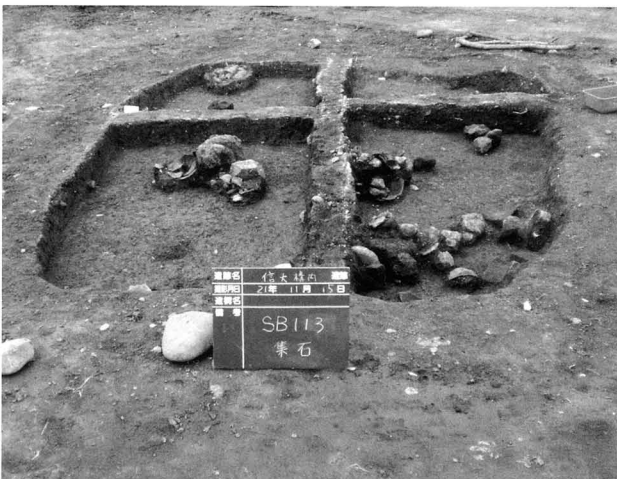
第 111 号 竪穴建物跡 (南から)



第 113・120 号 竪穴建物跡 (上空から・上が北)



第 113 号 竪穴建物跡 (南から)



SB113 遺物出土状況 (南から)



SB113 遺物出土状況 (東から)

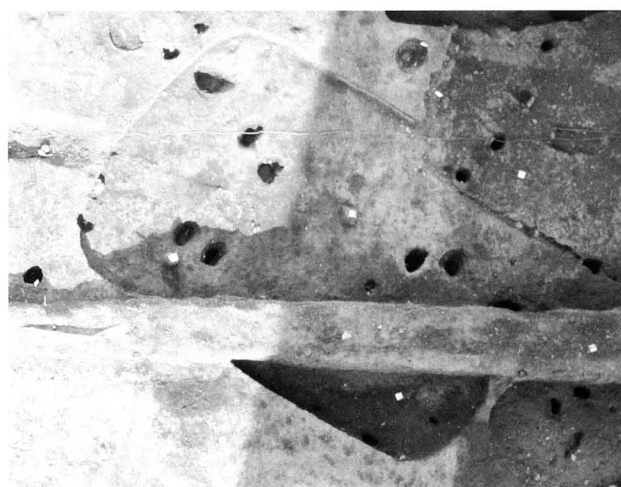
写真図版 9



SB113 集石下焼土検出状況



SB113 掘下げ作業状況



第 115 号 縦穴建物跡 (上空から・上が北)



SB115・117 遺物出土状況 (東から)



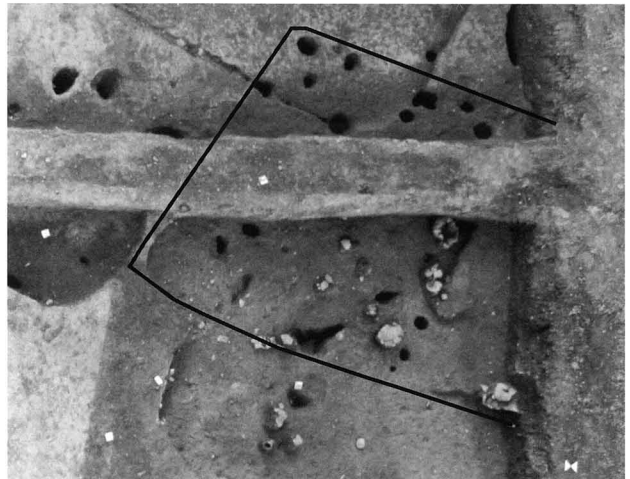
第 116 号 縦穴建物跡 (南から)



第 117 号 縦穴建物跡 (東から)



SB117-11 土器出土状況



第118号竪穴建物跡（上空から・上が北）



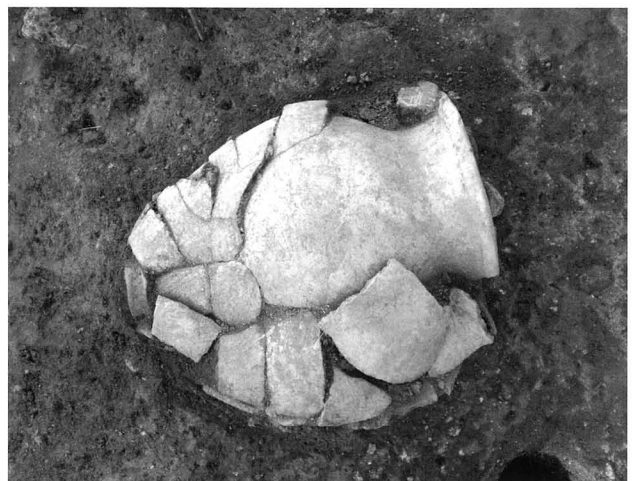
SB118 炭化材検出状況



SB118-3 ピット内土器出土状況



SB118 ピット内土器取上げ後の敷礫の検出状況



SB118-5 土器出土状況

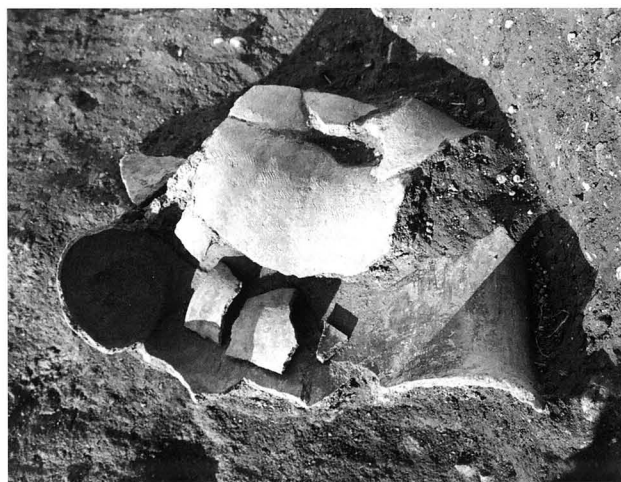
写真図版 11



SB118 地床炉検出状況



SB118 地床炉炉縁石取上げ状況



SB118-6 土器出土状況



第119号竖穴建物跡（南から）



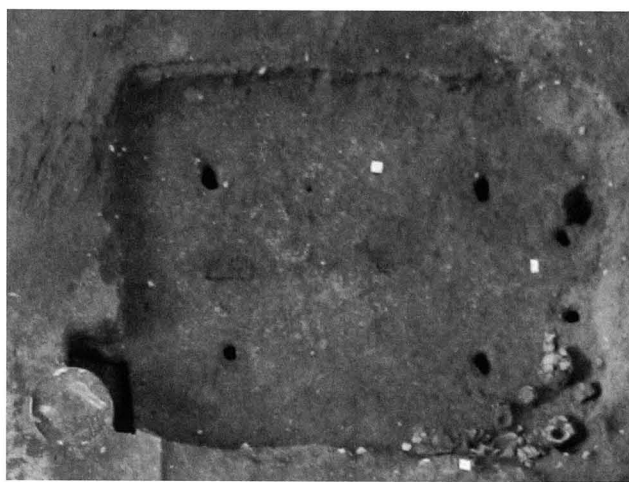
SB119-3 土器出土状況



SB119 土器出土状況



SB119-8 土器出土状況



第120号竖穴建物跡（上空から・上が東）



SB120 集石検出状況



SB120 集石と土器の混在状況



SB120-1 集石中からのガラス小玉出土状況



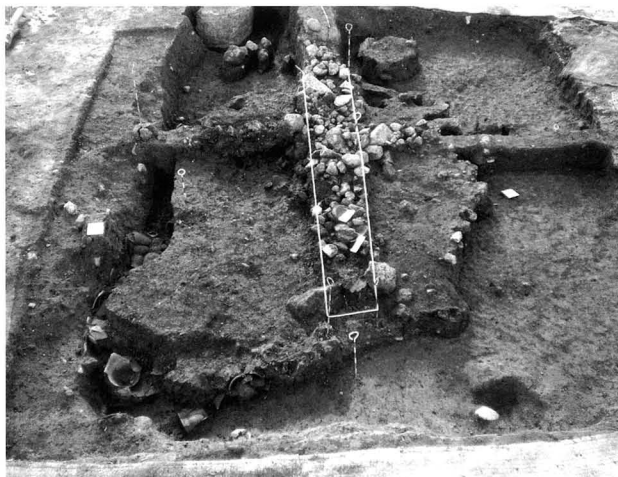
SB120 集石の実測状況



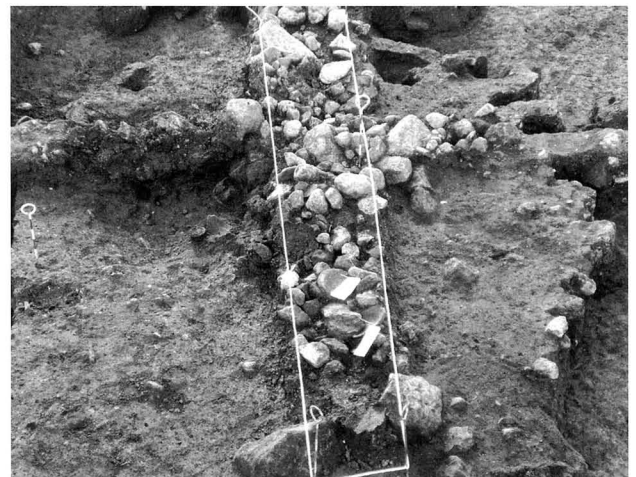
SB120 発掘作業状況



SB120 集石解体状況



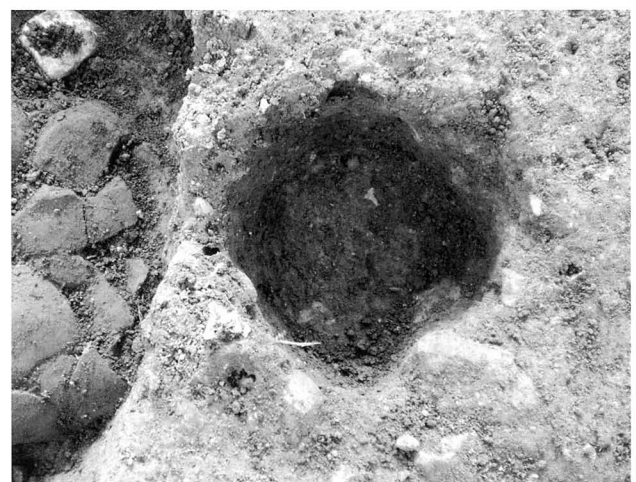
SB120 集石除去後の状況



SB120 集石下の覆土からのピット検出状況



SB120 覆土内ピットの検出状況



SB120 覆土内ピットの完掘状況 (1)



SB120 覆土内ピットの完掘状況 (2)



SB120 掘下げ作業状況



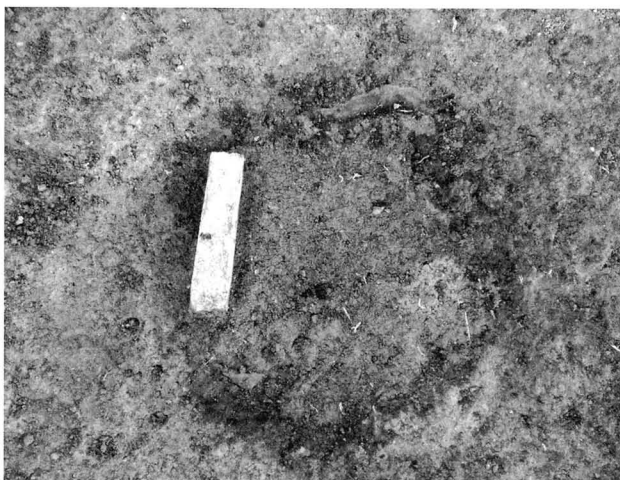
SB120 遺物出土状況



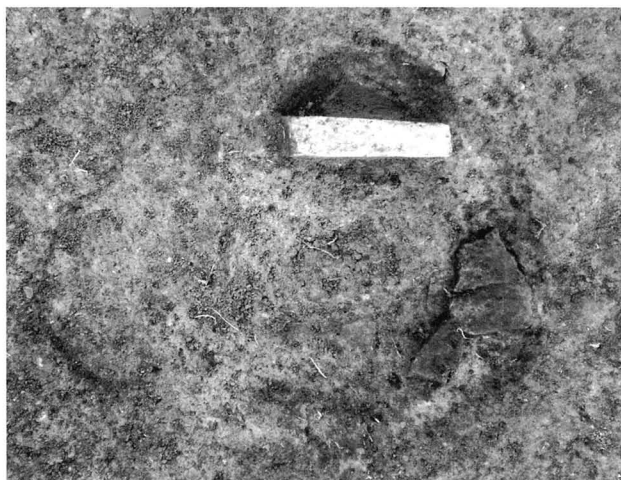
第 121 号 竪穴建物跡 (南から)



第 122 号 竪穴建物跡 (北から)



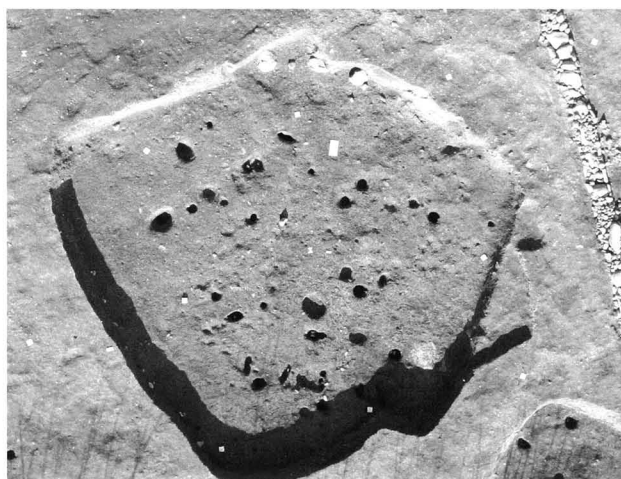
SB122 地床炉検出状況



SB122 地床炉内土器検出状況



SB122 地床炉完掘状況



第 123・126 号竪穴建物跡 (上空から・上が北)



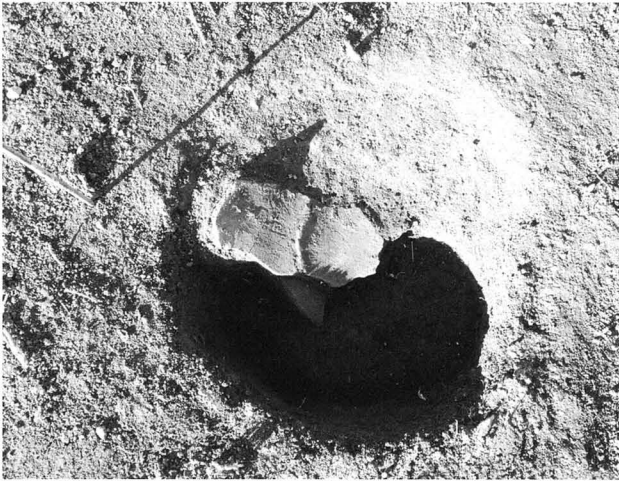
SB123 地床炉内土器検出状況



SB126-9 土器出土状況



第 125・127 号竪穴建物跡 (上空から・上が北)



第 116 号土坑土器出土状況



第 124 号土坑土器出土状況

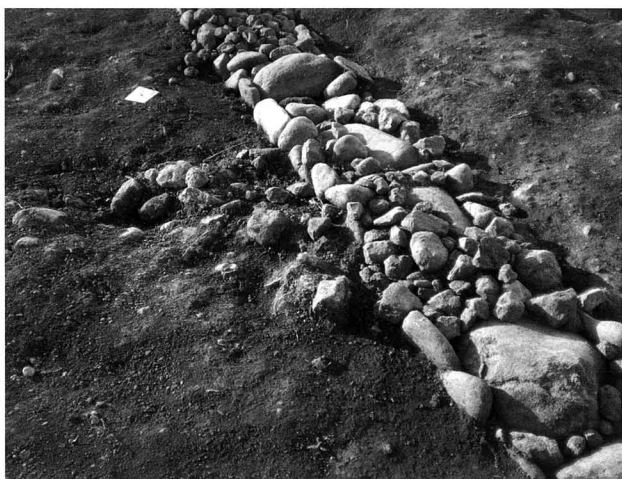


第 2 号配石溝 (SD06) 検出状況 (南から)



SD06 完掘状況 (南から)

写真図版 17



SD06 検出状況 (その 2)



SD06 検出状況 (その 3)



SD06 検出状況 (その 4)



SD06 完掘状況 (その 2)



SD06 完掘状況 (その 3)



SD06 完掘状況 (その 4)



発掘作業状況 (その1)

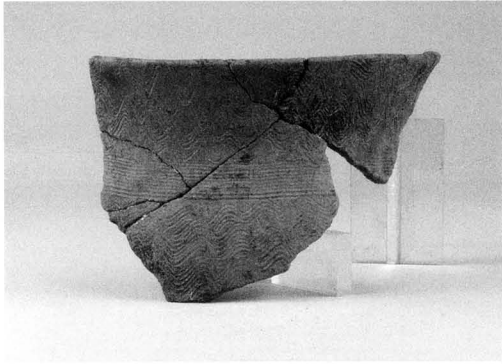


発掘作業状況 (その2)



発掘調査参加者

写真図版 19



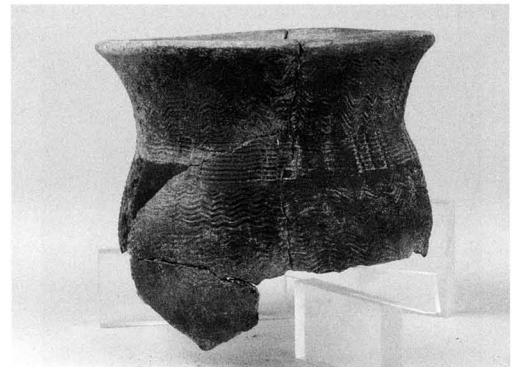
SB99-1



SB99-2



SB100-1



SB100-3



SB100-5



SB100-4



SB102-1



SB103-1



SB105-3



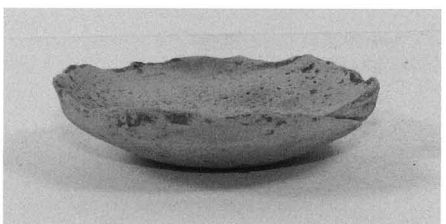
SB105-1



SB105-6



SB105-9



SB105-11



SB105-12

写真図版 21



SB105-13



SB105-16 (坏部)



SB106-1



SB105-16 (脚部)



SB107-1



SB108-1



SB108-2



SB108-3



SB108-4



SB108-5



SB108-8



SB108-9



SB108-13

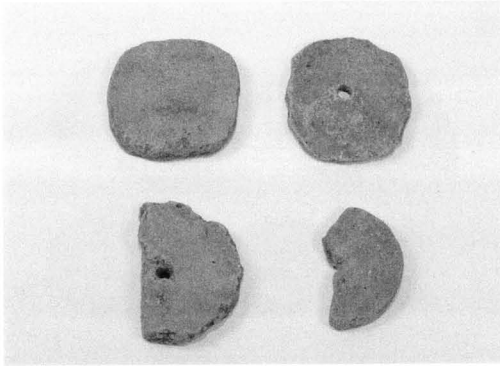


SB108-15



SB108-16

写真図版 23



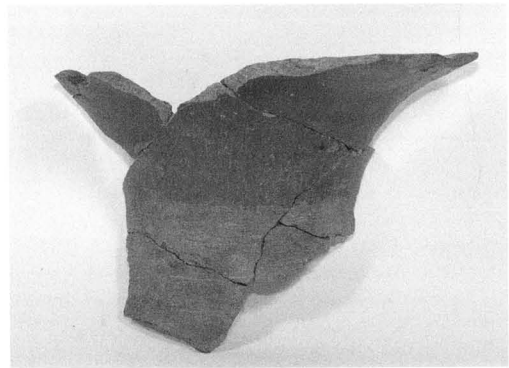
SB108-18 ~ 21



SB109-1



SB109-2



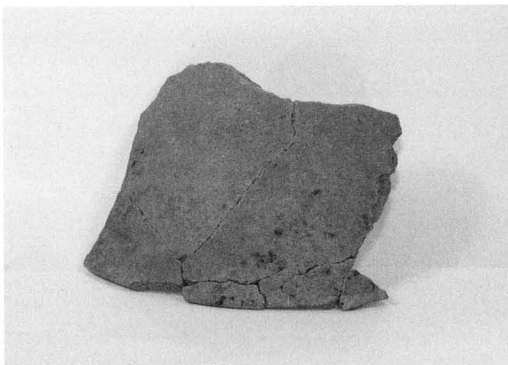
SB109-6



SB109-7



SB109-11



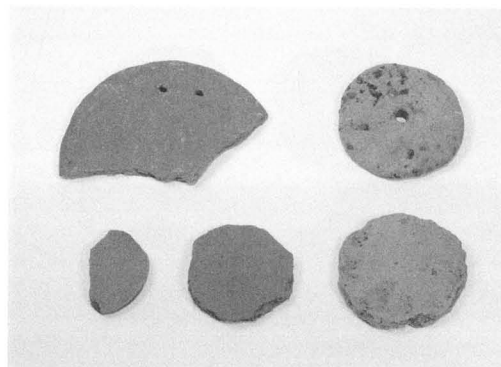
SB109-13 (天地逆)



SB109-16



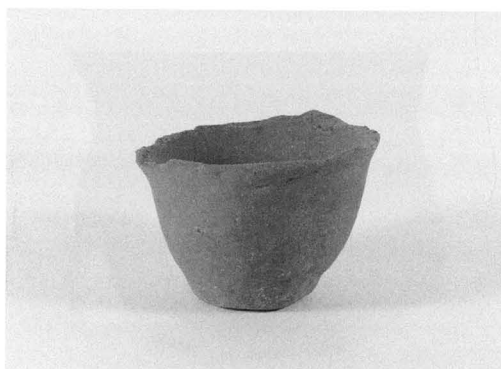
SB109 (被熱痕のある深鉢)



SB109-10・17～20



SB110-1



SB110-2



SB111-1



SB111-3



SB113-1

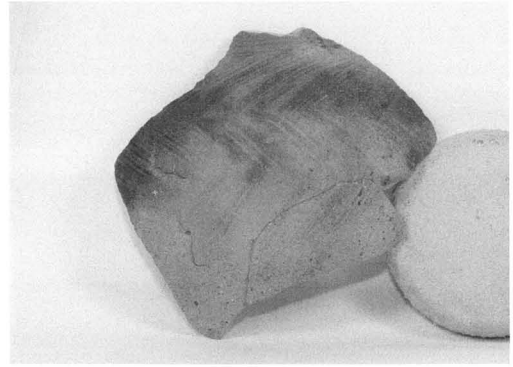


SB113-2

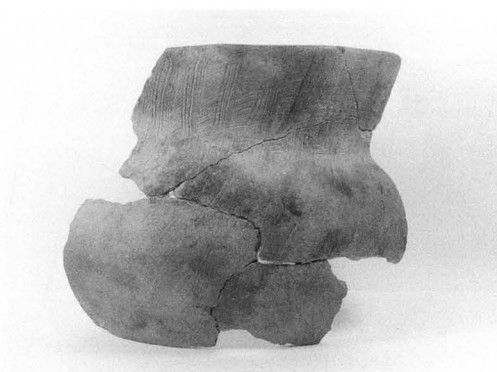
写真図版 25



SB113-3



SB113-4



SB113-5



SB113-9



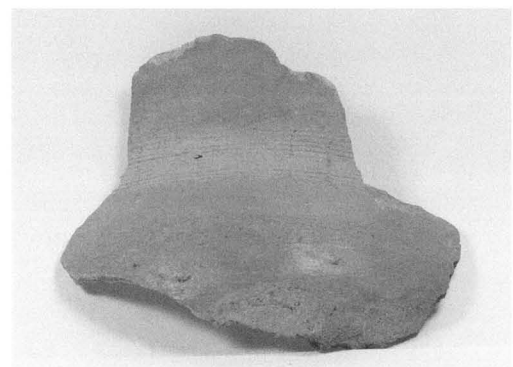
SB113-12



SB113-13



SB113-16



SB113-17



SB114-1



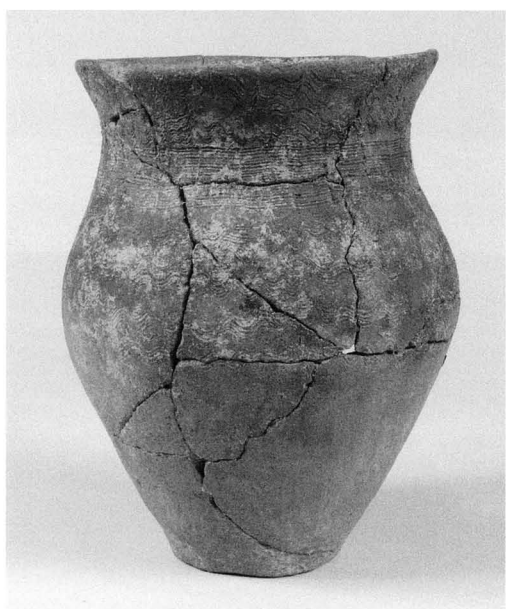
SB114-2



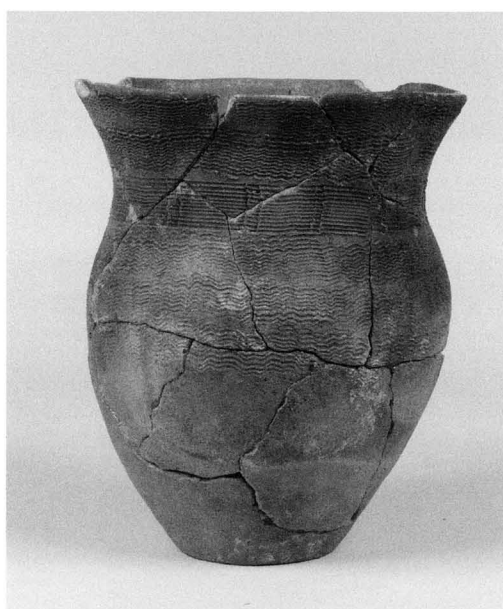
SB115-1



SB115-3



SB117-1



SB117-2

写真図版 27



SB117-3



SB117-4



SB117-5



SB117-6



SB117-5